

あり得ない。例へば悪なるべしといひ得る社會に於いては法則となり得ない。余は「人は善なるべし」といふ規範法を以て根本的の法則と見る能はざるものであつて、倫理學が善なるべしといふ法則を定立する反面に於て、その内面に根本的なる法則が内在して居ると思ふ。「如斯行爲は善なり」「如斯行爲は悪なり」といふ法則が陰されて居る。此の二つの法則を立てずして善なるべしと規定し得ないからである。故に善なるべしといふベシの法則は純粹に本質的なものといひ得ない。余は科學分類に於て規範なる名稱は便宜的に唯從來の慣用にまかせて存置せしに止まる。

次に先驗心理學であるが、余の前述科學分類に於ては哲學を更に三區分したものであるが、三個をその例として表示したにすぎぬ。而して問題は先驗心理學にあると思ふのである。Rickert の Gegenstand der Erkenntnis にある如く、事實上の認識作用を心理過程と見て、其の分析に依て超越的對象に進まんとするものである。然らば心理學には法則定立的自然科學的心理學と、先驗的哲學的心理學との二者ある事となる。後の方でもいふが生理學をよく考へて見るならば、自然科學的心理學は

要するに生理的心理學といひ得られる。何故とならば自然科學的心理學はその方法全く生理學的であるが故に極言すれば生理學の一部に屬せしめる事も出来るであらう。此の意味に於てザント又は田邊博士の如く自然科學的法則定立的心理學の事を生理學的心理學 Physiologischen Psychologie と名附けても良いと思ふ。之に反して先驗的心理學は意識の學であり超個人的超時間的である。即ち意識本質の識別と意識の成立に関するものであつて、全く超經驗的であるが故に之を哲學の部門に入れられて居るのであるが、要するに心理學の本質的批判的の考察は今日の處未だ十分に解明されて居らぬ。コムトは心理學を生物學中に置いたがスペンサーは生物學の次に置いた。コムトに依れば生物學は有機體の組織及環境に關する有機的動學の法則を研究する學であつて、その時代未だ生物學や心理學は十分に發達しては居らなかつたのである。余は先にもいふ如く心理學を二分し、自然科學的なるものは之を生理學中に内在せしめ、先驗的なるものを哲學の内に存して置かうと思ふ。之本發生論的系統案に於ては適當な方法と思ふ。内在科學なるものにつきては後の方

に於て論ずるが、自然科学的心理學は動植物學即ち記述科學の内在學たる生理學中に内在するものとして置く。即ち、



以上余の抽象科學分科につきて説明し終りたりと信ずるものであるが、先にもいふ如く、先驗的科學の名稱は現今の科學分類派の人々の使用する如き根本的なる意味に於て用ひず、發生論的には抽象科學の名を用ふるを適當と認むるのであつて、先驗の名は唯從來慣用に從ひて存置するに止まるのである。

次に個性認識の科學、説明科學等を包括する經驗科學であるが、余の經驗科學の分類は從來の科學分類派のそれとは根本的に異なり、發生論的系統的科學分類なる事、前に述べた通りである。余が西南學派の科學分類に反對し、更に溯つてはセントのそれに反對し、近くは田邊博士の學問分類に反して前述せしが如き科學系統案

を立せるは、前述文化科學と自然科学といふ二元的區分が極めて論理的に不完全であり、かゝる科學分類を以てしては到底總てを十分に説明し得ざるが故である。

由來經驗科學を文化と自然とに區別する事は極めて論理的に見えるが、今一步立ち入りて研究するならば、そこに不合理が存するものである事に氣が附くのである。即ち文化と自然との兩科學に二元的に區分する處の根本的立脚は方法論的に個性と普遍の對立に存するのであるが、從來の科學分類派の人々は個性、又は個性と普遍との關係などを十分に明瞭にして居らぬ。而して其の間に中間關係を配置したり、文化科學に法則を定立する事を許すものと否とを作つたりする矛盾した事をしてなければならぬのであつた。之は全く個性又は普遍といふものも本質を誤り、更に發生論的考察が缺けて居つたのであつて、余はかゝる分類に満足する事が出来なかつたのである。

然し發生論的分類はそれ自身方法論的であるといひ得られるのであつて、余の發生論的といふはその科學の方法論的に見た上での階段である。故に方法論的分類と

しては余の發生論的分類が從來よりも一步を進め得たものと信ずる。

余は經驗科學をその發生論的考察のもとに個性認識科學と記述科學と説明科學との三者に區別したのであるが、個性認識の科學は記述科學へ、記述科學は説明科學へ順次接近しやうとする傾向を有して居る。それは發生論的に實にかなければならない傾向であつて、かゝればこそ發生論的の意義があり、個性認識の科學例へば文化科學の名に於て包括されて居つた諸分科中に共通點とか通則とか乃至は普遍的のあるものを定立し抽象してゆく傾向のあるものも、如斯經過を發生的に取る當然の事であると見られ得る。要するに個性から記述へそして説明へと進む——發生する又は發展する——傾向を有するといふ事が發生論的に意義のある所であつて、現今の科學分類派の人々の系統と趣を異にするのである。

却説余は個性記述的の科學として歴史學や一般に文化科學といふ名稱に於て包括されて居た諸分科を配したのであるが、之は西南獨逸學派の所謂文化科學と等しくなるのである。西南獨逸學派に依れば文化科學は個性記述であつて通則發見を許さ

ぬのであるが、余の科學分類に於ては發生的に次第に記述科學的の性質を要求してゆくのであるが故に、通則發見や定義の定立も必ずしも不可なきものとなるのである。故に一回限りの一個性、個別的なるものゝ個別性に進んでゆく内に、それ等から共通點や通則を抽出する事は許されるわけである。かゝる共通點なり通則なりが、現今發見され抽出されて居るや否やは別問題であるとしても、若し發見され抽出されて居らないとしても、論理的には可能である事が許されねばならぬ。若し抽出されたと假定すれば、その共通的なる通則は次第に記述科學の性質に近づくものと見られ得るのである。而して歴史にかゝる抽出が行はれ、通則定立が出来、それが歴史と名附け得ざるが如きものとなりても不可なし、それが社會學や心理學に近きものとなりても、乃至は別に特別な科學が生れて來ても問題ではない。要するに科學は如斯にして最高の普遍概念に進まんとするのであるが故に、余の科學分類案に於ては——現今の科學分類派の人々の分類に於て許す能はざる矛盾も——許さるゝ事となる。故に個性記述の内に通則發見を許すといふ事が可能である。かゝる發

生論的なる傾向は既に吾人の常識の階段より發芽して居る。而して吾人の求知的興味は次第に進みつゝあるのであるが故に、それ等は必らずしも矛盾する事はあり得ない。

田邊博士は文化科學に於てその多くの分科に通則定立を許されながら、歴史に於てのみ之を奪はれたのであるが、余は歴史にかゝる通則が定立されあるや否やを知らないが、論理的には許されねばならぬと思ふ。歴史の科學的成立は論理的に哲學的に可能であると思ふのである。然し余はそれは從來の既成歴史に對していふのではない。それは從來の歴史の方法が果して科學として價值ありしや否やは疑問であるが、哲學上は論理的に可能であるといふのである。

余は個性認識科學として歴史と一般文化科學とを包括せしめたのであるが、余は個性認識科學を如斯二元的に對立させたものではなく、一般文化科學として包括した諸分科も唯あれだけで盡くして居るわけでない。列舉した諸分科はその一例にすぎない。要するに文化價值を對象とせる諸分科といふ意に於て配したまでである。

故に歴史を一般文化科學と區別するといふ事は實は不必要なのであり、只その全部門を文化科學と名付けても良いのである。

元來文化科學とか自然科学とかいふ名稱は對象に依る所のものであつて、對象の區分に依て出來上つた科學の發生論的な名稱、例へば動物學とか植物學とかといふものを總括的に呼ぶ名としては良いかも知れない。西南獨逸學派の文化とか自然とかいふ名稱は、要するに如斯對象的名稱であつて、之を方法論的にいへば一般化普遍化と個性化となり、その目的よりいへば法則定立科學と價值關係科學との對立となるのである。余の此處にいふ文化科學とは、かゝる根本的に相反する對立的の意味に於てなく、既成科學の總括的名稱として便宜使用せしに止まる。

却說西南獨逸學派は自然科学に對するものは文化科學なりとしたのであるが、余の科學分類に於てはその文化科學なるものは總て一般に個性認識學中に入る。西南獨逸學派としても文化科學は個性記述であると稱するのであるが、此の點に於ては一見相違なきものゝ如くである。然し余の科學分類は發生論的立脚なるが故に、彼

に於ては個性記述の通則発見は許されず、相互に矛盾するのであるが、余の分類に於ては之を許す事が出来、そこに矛盾は起らないのである。例へば前述歴史の如きは西南獨逸學派や田邊博士に於ては、通則発見は許されぬが、余に於ては個性認識科學は次第に法則學に進まんとする處の發生論的傾向を有するのであるが故に、之を堂々と可能ならしむる事が出来る。それが直ちに説明科學の立せんとする普遍法則の如き極めて一般的なものでないかも知れないが、それは次第に一般的妥當性に進まんとする傾向を有するもの、即ち前段として立せらるゝものであつて、そこに發生論の意義が存するのである。

例へば Karl Marx が *Die Geschichte aller, bisherigen ist die Geschichte von Klassenkämpfen.* と看破した事は有名であるが、之は説明科學的法則の如く一般的でないかも知れない。又此の一句を法則と稱するにはあまりに多くの難點を有するかも知れない。が然しながら歴史科學として個性認識科學中に於ける通則としては、經濟的の現象を偏重した難點はあるにしても一の合理的なる句といひ得るのであつ

て、かゝる通則は既に歴史に非ずとするならば、社會學中に包括すれば良い。何故かならば前にもいふ如く、總ての科學は普遍必然の法則學に進む傾向を有するが故に、その經過に於て方法上歴史と名付け社會學と名付け經濟學と名付けるのであつて、かゝる科學の名稱の如きは根本的なものでなく、科學研究の方法上便宜的に區分するにすぎざるが故に、科學の名稱こそはそれ／＼發生的又は對象的に異なり居りこそすれ、之等の科學の求めて居る知識の性質は全然同一種のものであつて、歸する處は一般的法則、構成的概念なのである。

更に一例をいふならば Karl Lamprecht. がなせし處の文化發展の六時代別(又は五時代別)の如き、Comte の實證論的史觀に於ける人間精神發展の三階段説の如き更に又歴史家が各々自國の歴史につきて時代々に區分し、時代をその特徴に依て區分し、共通的に統一し次の時代に連続せしむるが如き、之等は有機無機を論ぜず一般自然界を通じてそれを抽象普遍化せんとする説明科學的法則の如く廣くはないかも知れないが、然しかゝる法則に進まんとする傾向を有するものとして、歴史現象

を對象とせる、歴史現象中に於ける、限られたる範圍に於ける通則であつて、それが直ちに説明科學的法則とは成り得ないにしても、それに到達せんとする、その前段としての通則である。

かゝる通則は類型的通則ともいふべきものであつて、一般的法則を定立する説明科學の普遍的法則とは、その範圍に於て異なるといふ論者もあらうと思ふが、如何なる經驗科學の定立する法則も、その經驗科學に於ける通則であつて、絶對普遍の法則は論理上不可能である。例へば物理學の法則は有機無機兩界を通ずる一般的普遍法則であるといふが、それは吾人々類の經驗し認識する範圍に止まり、それ以上に及ぶ事は出家ぬ。若しそれ以上に論理を進むるならば、それは假説か假定に止まり一の普遍法として確定する事は不可能である。宇宙の絶對普遍法は吾人の遂に知る能はざる處なるや知るべからずとするも、要するに説明科學なる物理學の法則と雖も一定の範圍を有するものにして、文化科學の法則が價值關係を無視する程度に法則性を進め得ずとするならば、説明科學はその經驗對象を無視する程度に法則性を

進め得ず。然しながら少くとも一個の通則は一定の範圍に於ける普遍性を有するが故に、その通則より抽象歸納してより高き普遍に進む事の可能なるを認め得らるべく、而して價值關係を無視しても、通則定立の可能なる事は論理的に認め得らるべし。

然らば此處に問題を提出する者あらん、現今に於ける個性認識の科學例へば歴史の如く一般文化科學の如きは、將來幾百年の後には一の説明科學たり得るや如何。更に現今に於ける記述科學たる動植物學の如きも、又將來説明科學たり得るや如何といふ問題である。人間は猿より進化したものであるといひ、而して現代の猿は將來に於て、果して人間たり得るや否やは別題としても、かゝる問題は未知數に屬する。何故とならば現代の説明科學が現代の個性認識科學より進歩發達したものでなく、現代の説明科學は發生論的考察に依れば、それがそれ自身として、その科學の個性認識科學より發展したものであるといふのである。故に現今の個性科學は將來に於て果して説明科學たり得るや否やは疑問であり、説明科學たり得ると假定して

も、それは現今の説明科學と趣を異にすべく、説明科學たり得ずとしても個性認識科學それ自身に於て、よく吾人の求知心を満足せしむる事が出来、更に個性的にそれより高度の科學の前段として目的を達してゆく事が出来るのである。

個性認識科學につきて今一言附加すべきは文學藝術との關係であるが、科學の發生論的分類に於て、その高度の科學に至るに従つて文藝との關係は薄らぎ、低度の科學に至るに従つて關係は次第に接近し來り、リツケルトのいへるが如く歴史に於て最も文藝に接近すといふべきである。極論すれば歴史の如きは半文學半科學の時期にありといひても不可なかるべし。換言すれば文藝との關係は歴史最も近く、物理最も遠く、要之文藝と科學との關係は普遍性の度と反比例すといふべきである。

此の意味に於て考ふるならば、リツケルトの歴史は藝術に近しといふ言葉は、深き意義あるものと認められる。只科學の對象は實在であるが、文藝の對象は實在でないかも知れぬ。然しながら文藝と雖も實在としてあり得ざるが如きものを對象とする事は出来ぬ。創作の如きも『あるを得るが如き』歴史でなければならぬ。歴史の對象

は過去に於ける人事現象であるが、その過去の實在といふものは、あり得しが如き人事現象でなければ眞理性を有しない。即ち之をまとめて考察すれば次の如くいひ得られる。即ち『あり得る事を得る現象でなければ歴史及び文藝の對象とは成り得ない。』此の意味に於ては歴史も文藝もその對象は實在的でなければならぬ。何人か歴史の對象とする過去の人事現象を以て實在なりと斷定するものか、歴史はその對象素材が實在なりしならんと假定する。その假定は古文書學とか考古學とか金石學とか古泉學とかといふ、所謂史學の補助學に依て立てらるゝものであつて、歴史の記録は要するに文藝と等しく實在に非ずして何處迄も實在的である。等しく經驗科學なりと雖も此の點に於ては物理學等とその趣を異にする。然し此處に注意すべきは科學としての歴史は、假令その根本に於て文藝に似通ひたる點ありとするも、その目的とする處は眞理性に存するが故に、美を目的とする文藝の眞理性とその趣く途を異にして居る。

歴史及一般に文化科學と呼べるゝ諸分科が、説明科學の如く一般的普遍妥當な法

則を立て得ておらないといふ理由に依て、説明科學とは全く反對に個性認識のみを目的とするものであると断定するのは早計である。哲學的には『斯くある』事を證明するに非ずして、『斯くなければならぬ』事を主張するのである。故に歴史科學が如斯法則を立て、居らぬが故に、個性認識のみを目的とするとなし、此の理由に依り Marx や Lamprecht や Comte やつは Kurt Brey sig や Paul Barth 等の史觀を排斥する事は出来ぬ。科學を發生論的に考察するならば、論理的に斯くあらねばならぬ事を——假令現今に於ては斯くあらなくとも——主張する事が許されねばならぬ。

マルクスの唯物論的史觀は宗教とか道德とか乃至は知的精神的要素を輕視して居るのであつて、かゝる見地からいふならば彼の史的法則は缺點の多いものである。即ち始終經濟的動機のみが人間を支配して居るとは考へられない。人間文化は經濟的素因の他に、眞善美聖の知的精神的要素があるのであつて、經濟的唯物史觀の法則たるものは極めて偏狭なる見解であるといひ得られるが、然し社會の文化發展の總てはかゝる經濟的素因によるのではないとしても、少くともその一部の有力なる

要素として彼の法則を認めぬわけにはゆかぬ。故に此を以て一の史的法則と見る事は可能である。史的對象たる個々の個體の事象中に、かゝる普遍法則が内在して居る事を認め得られるからである。彼の Paul Barth の如きは彼の大著『社會學としての歴史哲學』Die Philosophie der Geschichte als soziologie. Frster Teil. Frster Auflage. 1897に於て、歴史法則の可能性を論述して居るのであるが、その説く所幾分の偏見を有するとは言ひ條、特に傾聴に價するものがある。彼はシユマイドレン Schmeidler の語を引用して曰く、『特殊と普遍とは左右上下因果など、同様に相互的に自他を産出し保持する相關的概念である』と。歴史法則の可能、又發生論的科學統案の可能は特殊と普遍との相關々係に依て認むる事が出来るといふ事は余の説と等しく、余の前述した通りである。

以上、余は發生論的立脚に依て史的科學一般に文化科學に屬する分科は發生論的に低度のものであり、前段のものであるといふ見地より之を個性科學としたのであるが、西南獨逸學派のそれと異なる所は、それが個性記述にのみ向ふものに非ずし

て、科學の發生論的傾向としては、總ての科學は普通に進まんとする傾向を有するものなるが故に、史的法則の定立は可能であると主張するのである。只現今に於ては史的科學が法則を定立し得て居らぬが故に、その可能性を疑ふのは謬論であつて論理的には如斯なければならぬ事を哲學的立脚地より主張するのである。而して主張の相異を來す最も根本的な原因は、普通者と特殊者の對立にあるか相關を係にあるかといふ事の究明に依て斷定し得る問題であつて、余は前述せし如く兩者が根本的異質的に對峙するものに非ざる事を論じたるもの、只現今の既成歴史は問題外である。

次に記述科學の問題である。記述科學は説明科學と共に西南獨逸學派の所謂自然科學に屬する部門であつて、田邊博士の所謂没價値的普遍化的の科學部門である。余の科學分類に於ては科學發生論の見地より、之を記述科學と説明科學とに區分するのであつて、動物學と植物學（一般に無生物に對して生物學）及び鑛物學（以上を一般に博物學の名稱に依て呼ぶ）は記述科學に屬し、物理化學一般に理化學の名に依て呼ぶ）は説明科學に屬する。

依て呼ぶ）は説明科學に屬する。

由來科學は個性より記述へ、而して説明へと進む傾向を有し、而して經驗的對象所謂科學的素材を其の類似共通に従つて一の類概念にまとめ、その類の特質を更に分析して、其の類を主部とする命題の賓部として定義に立て、ゆくのが、記述科學の仕事である。換言すれば對象の分類 Einteilung (Classification) 及び記述 Beschreibung (Description) にある。かゝる仕事は定義に立てられてゆくのであつて、定義 Definition とはかゝる意義を有するが故に、記述科學は一に定義定立の科學といひても不可なかるべし。要するに記述科學は有意的注意即ち觀察 Beobachtung と機械的分析即ち實驗 Experiment とに依て概念を規定し依てもつて立つ所の科學部門である、それが發生論的立脚より見れば個性科學より後にして、（又は高度にして）説明科學よりは前段、（又は低度）なる事は此處に説明する要なかるべし。

分類とは普通哲學的にいへば、類概念を種概念に區分 Unterscheidung するとは反對に、種類に共通なる性質に基づき、一層大なる種類にまとめゆく事であつて、

更に各類が相互に共通性を有する時は一層普遍的な類の系統に組織してゆく事をいふのである。之を科學の組織論的見地より考察すれば、普遍的類概念の外延を分割して個々に達するの逆と見る事が出来る。それを彙類ともいふのである。分類又は彙類とは普通次の二種に分つ。

- { A. 人爲的 Artificial classification.
- { B. 自然的 Natural classification.

而して自然的分類の事を一に科學的分類 Scientific classification ともいふ。即ち前者が任意的な偶有性に基づき分類するに反し、後者は本質的屬性に基づき分類するのであつて、かゝる本質的屬性は根本的屬性に結合されるから、其の結果は自然的種類 Natural Kind 又は實在の種類 Real Kind に一致する事となる。生物學的分類 Biologische Klassifikation とはかゝる本質的屬性によるのであつて、記述科學とは一般にかゝる種類の分類記述を主とする。

人爲的分類に於ては例へば花を分類するに、任意的に色といふ偶有性を以てするが如きはそれであるが、然しかゝる分類は根本的本質的な分類といふ事を得ぬ。科學的分類は前述せしが如く類に一貫する處の分類基礎 Einteilungsgrund に依て分類の標準を定めるのである。Definition とはかゝる層性を命題に表したものであつて、かゝる Definition は普遍法則定立の豫備的の階段をなすものであるが故に、説明科學より見ればそれより低度のものであるといひ得るのである。又かゝる定義は普遍概念に導來されてゆく性質を有するものであるが故に、現代の記述科學は發生論的には説明科學の前段であるといふ事が出来る。

生物學につきては異論が多い。余も又その道に専門に非ざるが故に十分なる説明は成し能はざる處であるが、生物學 Biologie, Biology. は通俗には礦物學即ち無生物に對して動物學植物學を總稱したる名稱と見られ得る。或人は生物に新學名を附する事とし、或は人跡未だ至らざる土地に於て新しき生物を發見する事を以て生物學なりと論ず。然し一般に學界に重きをなす人々は生物學をかゝる意味に解しては居らぬ。生物學とは斯道の學者は之を生命學と解して居る様である。

生物學 *Biologie* と云ふ學術的の名稱は、トレヴィラヌス *Treviranus* が一八〇二年に *Biologie oder Philosophie der lebenden Natur*. に於て始めて用ひたのであつて、彼は生命の科學的研究の學であると考へた。從來、形而上學的に考察されて居た生命研究が、此處に一の經驗科學として研究される事になつた。フランスのラマルク *Lamarck* も又 *Hydrog'eologie* の中に於て *Biologie* の語を用ひた。然し當時尙十分にその實を擧ぐる事が出来なかつた。生物學の發達は極めて近代の事である。

余の科學系統中に於て、生物學といふ名稱は上述せしが如き狹義に用ひては居らぬ。如何に生物學が生命學なりとしても、それは生物學の範圍を出でない。生命の研究は生物學の仕事であつて、生物學中に於て、特に生命を研究するを生命學といへば良い。生命學とは靈魂學と極めて似通ひたるが如く、一面心理學の仕事にも似通つて居る。然し何れにしても吾人の生命や靈魂は物質的の表現觀察分析なくしてその對象素材を得られないのであつて、生物學が生命學なりといふ狹義の意義に於ては、それは動植物學に於ける生命研究に關し、靈魂學や心理學や一般精神科學は

動物特に人間の生命に關するが故に、かゝる意味よりいふならば、生物學は靈魂學や精神科學とは範圍が廣い。が然し生命とは何ぞといふ問題は、未だ十分に解決されては居らぬ。現今に於ては只生物の形式的物理的化學的の所謂機械的研究に満足しなければならぬ。生物學は生理學に依て生物を比較的單純なる細胞に歸し、その作用に依て定義をたて、ゆくののであるが、生命の本質、靈魂の問題、精神の如何は果してかゝる方法を以て完全に認識さるゝや如何の問題は未知數に屬する。

記述科學が説明科學の前段である事は前に述べた。而してそれが目的論的立脚より見れば、發生論的に説明科學に進むべき途にあるものと見なければならぬが故に、方法論上の記述分類に依て系統立て、ゆく事は、普遍必然の法則定立に進まんとする傾向を有すると見るのである。彼のダーウイン *Darwin* の有名なる生物進化

論 *Abstammungslehre, Descendenztheorie. (Theory of evolution, or of descent.)* の

如き、記述科學的の一の通則と云ふ事が出来る。彼は因果法以外の所謂活力論 *Vitalismus* の説く所に反して、何處迄も因果的説明記述に向つたものといひ得られる

のである。彼は自然淘汰 Natural selection 及び適者生存 Survival of the fittest の理法に依て生物進化と種の起元を説いたのであるが、(種の起元 On the Origin Species by Means of Natural Selection. は彼の主著である。)所謂 Darwinismus の意義は生物の進化といふ合目的な事實が、かゝる理に依て機械的に説明された處に存する。要するに現代の生物學の立脚地は機械論的であつて、佛國の哲學者ラ・メトリー La Mettrie は人間機械論 L'Homme machine を著して機械論的唯物論を主張するのであるが、機械論的因果法の發見は生物學の進むべき途として正しいといはねばならぬ。かゝる見地よりすれば、生物の生命も遂に機械論的に定めらるる日が来るかも知れない。生物の現象の種々相は遂に機械論的に化學や物理學に還元せられやうとして居るのである。彼のメンデルの法則 Mendelsches Gesetz. (oder prinzip) の如きは生物學を一の數量的に又は機械的に側定して物理學や化學の現象に還元せんとするものであつて、發生論的科學分類に於てはそれが説明科學の前段として、發生論的にも方法論的にも記述科學の特徴を表すものといふ事が出来る。生物學即ち如斯、

まして鑛物學の如き、化學の一部の如き、それはやがて記述科學より説明科學に進むべき發生論的經過を十分に遺感なく表して居ると言ふ事が出来る。此處に生物學が發生論的科學分類に於て記述科學の部門に屬する事は以上述べた處に依て説明し得たりと信ずるものであるが、尙生理學と心理學につきての問題が残されてある。此の點を今少し述べる必要がある。

生物學と生理學及び自然科學的心理學は前にも述べたるが如く、余の科學分類に於ては内在關係に存する。此處に於て余は内在科學の説明をすべき必要あるを認むる。内在科學 Immanente Wissenschaft. といふのは前にも記した通り一の科學に實質的に内在して居るものであつて、所謂母子の關係に存する。故に元科學を母科學といふならば、内在科學を子科學といひ得るのである。生理學は生物學をして一層高度の記述科學に進ましめん爲に生物の生活現象を物理的化學的變化に歸さうとするのが生理學である。要するに生理學は生物學の母科學に依て引き出さるゝ科學であつて、その内に内在する子科學であるが故に之を内在科學と見るのである。

生理學は右の如く生物學の内在科學である。そこで如何なるものをその學の對象として居るかといはゞ、それは母科學のそれと變りはない。生物の生活現象を對象として居るのである。そこで生物の生活現象が、物理化學の現象であるといふ立場から、生物の生活々動(生命)を唯物的理化的に研究しやうとするのが次の二分科である。

A. 生物物理學 Biophysics.

B. 生物化學 Biochemistry.

物理化學は有機無機を論ぜず總ての自然現象をその對象とする上から、かゝる區別を立て、研究するといふ事も適當な方法といはねばならぬ。尙生理學は常體のみの研究ではないが故に、病理學 Pathology 生物病理學 Physiological Pathology. なども認められる。尙生物學が次の如く區分さるゝに依り、此の際に於ては生理學は生體の官能 Function を研究する學となる。

(形態學 Morphology.

生物學 Biologie (解剖學 Anatomy.

生理學 Physiology.

次に心理學である。之れは前述した通り先驗的のそれと自然科学的のそれとあるが、前者は純然たる哲學の部門に屬するが故に、此處には經驗科學としての心理學が問題となる。然しながら心理學、一般に精神科學は現今に於て未だ十分にその旗色を鮮明にして居らぬ。余の發生論的科學分類に依れば、通俗的に常識を以て考へても、論理的に科學的に考へても、精神なるものは生物の個體に内在して居るが故に、(或は又精神即ち物質——生物——と見ても良い。此の關係は不可分離の關係であるが故に。)心理學が生物學より引き出さるゝものと見るべく、かゝる論理があまりに對象的なりといふならば方法論的に考察するとも又同じ。即ち現今の心理學的方法は専ら生理學的方法であるが故に、生理學より引き出さるゝといふべきである。

此處に問題を提出する者あらむ。コムトすでに論じて心理學を生物學中に入れ、スペンサーは彼の科學分類中に於て心理學を生理學の次に置いたと。而して余も又

その兩者を祖述する如くに見えるが余はコムト、スペンサー案を引用せしに非ずして、科學の發生論的考察を以てしか信ずるものである。生理學も心理學も共に生物學に依存してのみ成立するものでありその對象的考察を以てすれば生物なくして生物學も生理學もはた又心理學もなけむ。余は何處迄も論理的に心理學は生物學引いて生理學の子科學なりと斷定するに躊躇する者に非ず。即ち内在科學なりと斷ずるものである。而して母科學の生物學が記述科學なるに依りて、生理學も心理學も共に記述學たる事を得るのである。而して余は必らずしもコムト、スペンサーのなしたる轍を蹈むものではなく、根本的に論理的發生論的にしか考へるものである。内在科學は尙澤山ある。例へば岩石學は礦物學に内在するものであつて、各々その母科學より引き出され、母科學の科學目的を達するものであつて、それ自身の科學目的は總て母科學のそれに包含されるのである。要するに内在とは母科學に對して、目的的にも方法的にもその限界を超越する事を許されぬのである。ましてその對象的考察に於てもそれは母科學に包括されると言ふべきである。かゝる意味に於て余は内在を

認めるものである。例へば岩石學は礦物學に内在關係にある。されば母科學なる礦物學に對して子科學の位置にあるが故に、岩石學はその科學の目的方法對象等總て礦物學に内在して居り、それを超越する事を許されぬのである。而してその子科學は子科學としてそれ自身獨立に組織さるゝが故に、一の組織として獨立する事が出来る。心理學は上述せしが如く生理學に内在するが故に生物學より引き出されなければならぬから、理由は別として結果に於てはコムト乃至はスペンサーのそれと等しくなる。要するに心理學は生理學に内在し、生理學は生物學に内在する事となり、お互にその母科學を超越する事能はずといふ事になる。かゝる意味に於ては心理學は生理學の内在科學たる生理學の更に内在科學となる。故に右に論ずる所の如く内在とはその方法目的に於ていふのであつて、當然その對象が等しくなるわけである。内在科學は如斯にして組織さるゝ時此處に内在的に一の組織科學として獨立する事が出来るのである。

精神現象の研究には自づと二つの方面がある。第一は心理學を生理學と關係づけ

て出来得る限り接近せしめつゝ、研究してゆく方法、第二は人間を全く相異なる二方面、即ち心理的と生理的の兩方面より研究してゆく方法である。前者を主張する者はフッド Ladd チーヘン Ziehen などであつて、心理的研究を生理的研究に關係せしめて理解しやうとする、後者に屬する者はヴントの如く並行論的に考へ、人間を心理的方面と生理的方面とより考察し、兩者の研究は相補ふものであるとする。前者は心理學と生理學との區別が明瞭でないが、然し一元的の見方としてそこに特徴が存する。要之精神と肉體(生理的)とを別々の二元的に見るか、又渾一體として一元的に不可分離に見るかに依て、即ち見方の相異に依て區別されるのであつて、是等の研究を總括して生理學的心理学 Physiologische Psychologie, Physiological Psychology; といふ。

由來精神科學殊にその基礎をなす所の心理學の對象たる吾人の精神については、それが如何なるものであるかの深い研究は現今に於て尙解決が出来て居らない。而してそれが根本的に吾人の肉體と別々に考へられるものであるか否かは今日の處不

明である。或は肉體と別々のものであつて、それが肉體に宿ると考へる人もあり、肉體の有機的活動それ自身が生命であり精神であると考へる人もある。かゝる研究は尙斯學の將來の研究にまつべきものであつて今日の處未知數に屬するのであるが然し之だけの事はいひ得て誤りなからむと信ずる。即ち精神は肉體と不可分離の關係にあり、而して精神現象は肉體現象に依て表現する。故に精神現象は肉體現象と極めて密接であつて、肉體現象それ自身が精神現象それ自らと考へられるが故に、從來の心理學は肉體殊に生理的現象に依てのみ研究しつゝあるのであつて、精神といふものを單獨に取り出して研究する事は不可能である。要するに心理學の研究は生理的のみに可能であるが故に、それがかゝる對象論的見解に於ても内在科學である事を認める事が出来る。而して又生理學の母科學たる生物學は記述科學であるから、生理學も心理學も一般精神科學も、共に記述科學であると認むる事が出来る。

次に化學であるが、之は記述的の部分もあり説明的の部分もある。從來物理學と化學との區分に於て、その學の對象たる物質が性質を變へざるものを物理的變化と

し、性質を變ふるを化學的變化として居つたが、之は今日の場合許されなくなつた。何故とならば、化學の大部分は總て物理學的に研究さるゝやうになり、從來の化學は説明科學としての物理學に接近して來たのである。そこで「物理化學」なる一の科學が成立して居るのであるが、如斯に物理學に還元せられざる部分が化學として存在するやうになつて來た。されば化學に於ては發生論的に之を記述及説明の兩科學に掛けて見る事が出来るのである。

説明科學は前にもいふ如く科學の極致であつて物理學之を代表する。前にもいふ如く物理學には二種あつて、説明科學としての物理學は理論物理學である事前述した通りである。實驗物理學は現象の計量的關係に依り法則を立て、ゆゑの事であつて理論物理學は更に一層高度の普遍必然的法則即ち因果法を立て、特殊の事實の説明をするものであり、科學は此處に至つてその頂點に達したものと見られ得る。

因果法 *Kausalgesetz* とは何ぞ、因果法は合法性であり法則性である。如何なる出來事も一定の原因なくして生起するものに非ず。或る状態には必らずや結果として

他の状態が必然的に結合するものであるといふのが合法的なる因果法であつて、論理上科學目的の終極的位置を占めるものであり、科學理論の根柢をなすものである。前にもいふ如く余の所謂發生論的科學觀に依れば、總ての科學は此の合法性に進まんとする傾向を有するものであり、それぞれの科學はその範圍内に於て此の傾向に進みつゝあるのである。而して經驗世界の全般を通じて窮極的な因果的合法則を立てんとするものは物理學であるが故に、經驗科學の認識は此處に盡きるのである。無論他の經驗科學は物理學に從屬して居るのではない。物理學は諸分科の上に君臨して居るのではない。現今の説明科學は論理的には發生的經過に従つて此處迄進み來つたものであるが、現今の個性認識科學や記述科學が果してかゝる發生的經過を取るや否や、又そのまゝに終るや否やは別問題として、論理的見地より考察すれば經驗科學の目的とする終極點に理論物理學が位置するのである。

以上余は經驗科學をその發生論的階段に依て三區分し、個性認識を目的とする最低の歴史より、次第に記述科學に進み、遂に合目的因果法の定立に至る順序を以て

發生論的科學分類方案を提出し得たりと信ずるものであるが、此處に残された問題は混成科學についてである。

西南獨逸學派は經驗科學を普遍に進むものと個性に進むものとの根本的に反對なる兩極端に區別した。即ち之を圖示すれば次の如くなる。

(學科(文化)の進むに依る) ———— 科學 ———— (科學(科學))

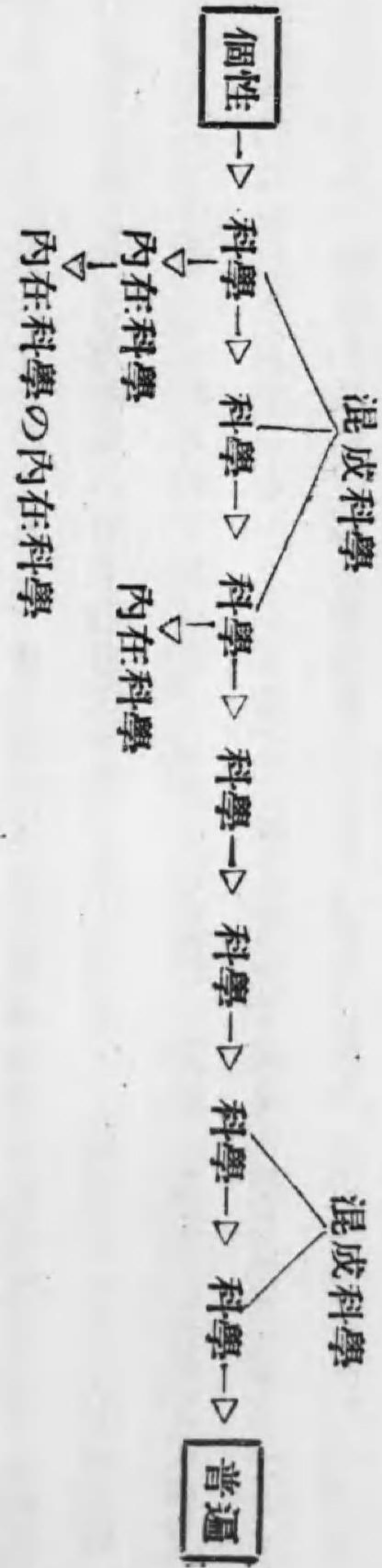
即ち兩科學はその進む方向全く反對である。かゝる對立的な分類に對してその中間範圍を許す事は出來ない。然るに彼等はその中間範圍を許して居るのであつて、之こそ論理の矛盾である。若しかゝる對立的な兩極端に通ずる何れへも關する經驗學がありとすれば、それは實に偉大なる科學であつて、經驗的に考へる事が困難になる。余の發生論的分類を圖示すれば次の如くなる。

科學 ———— 科學認識 ———— 通則發見 ———— 法則定立

即ち西南獨逸學派の主張する如く個性認識は法則定立の科學と全く反對に進むといふ事は、余の取らざる所であつて、余の主張は同一方向に進む一系統案である。

その個性認識も法則定立の科學と同一方向に進むものである。常識的の見方に依れば個性認識といふ事は法則定立とは全く反對の如く考へられるが、科學的個性認識なるものを今一步前段の常識の階段より考察すれば、西南獨逸學派の如く、全く反對の進路を取るものとは考へられないで、むしろ通則發見の前段であるとする事が出來、通則發見は法則定立の前段と考へられるが故に、その系統に於ける發生的順序整然たるものが存するのである。故に個性認識は普遍必然の法則定立と全く異質的な氷炭相容れざる兩極端の對立的存在と見る事は出來ず、相關的に不可分離の關係に於てあると考へられるのであつて、尙又余の個性、記述、説明の三區分の如きも、根本的に確然と區分さるゝものに非ず、總てかゝる順序の發生的過程を取るといふ迄である。如斯が故に、西南獨逸學派に於ては中間範圍を許す事はそれ自身矛盾の論理に陥ちたが、余の分類案に依ればむしろ中間範圍の存在する事が特徴となり、中間範圍の更に中間範圍や、更にその中間範圍をも論理的に許さるべきである。それがむしろ發生論的には當然であると考へられ得る。而して中間範圍といふいひ

方は余の發生論的分類に於ては適當なる言葉といひ得ない。發生的系統に於ては一の系統行に直線に配列されるのである。然しながら前述する如く内在的の科學もあり混成の科學もあるが故に、その系統は次の如くなる。



内在科學は前述した通りであるが、此處に説明を要すべきは混成科學である。混成科學とは二以上の母科學の復合混成になる一の科學であつて、かかる混成體を許す事も發生論的分類の特徴である。

混成科學につきて最初に説明し置く必要があるが、混成科學は二個以上の科學の混成にあるとして、例へば博物學といふ科學は動物學と植物學と礦物學の全部の混

成になる。故に動物學も植物學も礦物學もその各々の科學の全量が博物學といふ混成科學を作る事になる。故に三學は博物學中に全部残す處なく包括されるものである。次に或る母科學と他の母科學との一部分宛の混成になる場合であるが、余の混成科學といふのは前者に非ずして主として後者にある。前者も或る意味に於て混成科學といひ得ない事もないが、博物學の如きは混成といはむよりは總合的の名稱を見るが適當なりと考ふるが故に、而して又博物學といふ科學は一の獨立科學といひ得ずして便宜的に總稱されたるものと見られ得るが故に、余の混成科學とは別なり。

余の混成科學といふのは、母科學の一部分宛混成して一の子科學を作るものをいふ、而してかかる混成科學はその認識目的、科學目的、はたまた構成概念は如何なるものであるか。それは多くは母科學より出で、他の實用的なる目的を追ひつゝ要求さるゝ構成概念であつて、母科學とは獨立に他の目的を追求するのである。然し混成科學の目的は母科學と極めて近い關係にあるが故に根本的に異質的なものではなからう。

科學に先驗的なるものを許すならば混成科學には二種ある事になる即ち先驗科學の科學分科の一部と、經驗科學の分科の一部との混成になるものが一つ、又經驗科學内に於て混成するものが一つ。此の二種の混成科學が認められ得る。然し余が先にいふ如く、先驗科學といふ者も、要するに經驗的のものであると考ふるが故に、此の區別は不必要となるのである。

宗教學は前者の例として良いと思ふ。何故ならば一面規範的でなければならず、他面現象的でなければならぬが故に、兩者の混成科學なりといひ得られる。若し規範學を認めるならば、宗教學の追求する法則は、二途に出でなければならなくなるが、然し、規範學も前にいふ如く、經驗科學の法則と何等の變りはなく、經驗的方則も一面に於て直接經驗の内面的不許不に本づいたもので、經驗的事實的不許不も論理的不許不と同様であるが故に、根本的の區別はあり得ない。而して宗教學の如きも一の經驗的の混成科學なりといひ得るのである。

元來宗教學の對象たる宗教の本質なるものは如何なるものであるか。吾人に哲學

とか倫理とか美學とかいふ基礎的の母科學を所有する。而して宗教的内容なる神とか聖とかといふものも之等の學問にて解決がつく如くにも見える。が然し又一方からは之等の科學にて満足の出來ない部分の存在する事も認め得られる。宇宙觀とか人生觀とかいふ宗教方面は哲學的のものである。又實際の修養方面は倫理的であり、其の形式的儀式的又は禮拜などの方面は藝術的のものである。之等清淨なるものに對する崇敬の念が宗教的情緒であつて、それを歴史的に社會的に心理的に經驗的現象として研究するのであるから、先驗的なるものと經驗的なるものとに關係を有して居る混成科學である。

無論宗教の本質的解決はその對象たる神の何者であるかといふ事が問題になる。然しながら今日之等の問題につきて十分なる説明を與へる事が出來ぬ。神は人生の理想であつて實在でないならば、宗教そのものも本質問題も起るであらう。かゝる問題は此處に立入る事は出來ぬが、只先驗的には美學特に倫理學關係し、他面文化的な科學と交渉を持つのであつて、所詮混成科學たり得るのである。

諸種の科學をその發生論的見地に立ちて考察する場合に於ては、絶對的區別を要求する事は不可能であつて、その絶對區別の不可能といふ事が發生論的には意義ある事になるのであるが故に、根本的無交渉に區分する事が出来ないからとて科學分類は不可能といひ得ない。而して又それは止むを得ず區分するものでもない。總ての科學がそれ自身としては獨立に存在するのであつて、その發生過程に於ける程度を認むるが故に、發生的區分が可能なのである。

從來醫學の如きは應用科學として實用學と認められて居たのであるが、應用とか實用とかいふ言葉は極めて通俗的である。何故とならば科學の目的が普遍必然の法則定立にある以上、それが人生に有用であり實用である事は當然である。應用とか實用とかは人生を中心に考へた呼び方であつて、人生に有用なるが故に眞理なるには非ずして、眞理なるが故に實用である。醫學の如きは人生に有用であり實用である事が主をなすのであるが、何故に有用であり實用であるかはその成果が眞理なるが故である。從來の科學分類派の人々は醫學の所屬する科學的地位を明瞭にして居

らぬ。それは生理學を以て醫學の基礎學と考へたからであらうが、醫學が完全に構成されるには生理學がその根本的基礎をなす事疑ひなき事實であるが、さりとて生理學のみに依て立つ能はざる事明である。必らずや動物學、植物學、生理學、生物學、更に物理學化學等の混成研究にあるものであつて、かゝる科學の混成的なる實驗と觀察は醫學の根本的方法であるが故に、その對象は一般の自然科學的なるものであるが、方法に於ては混成的の性質を有するのである。まして醫學の一分科なる精神科學の如きは自然科學的心理學と極めて近い關係にあるが故に、醫學には心理學の混在も認めなければならぬ事になる。

此處に一言すべきは實驗 Versuch Experiment と觀察 Beobachtung と云ふ事である。實驗とは故意に人爲的に變化を加へて認識する事であり、觀察は有の儘の現象を人工を加へず有の儘に認識する事である。醫學は如斯觀察と實驗とに依りて人生に有用なる醫學的現象を認識し、更に物理的化學的研究が加はり、その認識の眞理性を確め、之を人生に施さんとするものであつて、醫學の根本目的は實用にあり

有用にあり人生に役立つ事にあれど、人生に役立たせる爲には、科學的に眞理性を要求しなければならぬが故に醫學も矢張り一の混成科學として獨立の位置を占めねばならない。

醫學を一種の術なりといふ論者もあるが、かゝる人々には醫學は醫術といふ名に依て呼ばれる。然し臨床醫が患者に接するのは學的には實驗と觀察であつて、金を取るが故に術であり、取らぬが故に觀察實驗であるといふ事は出来ぬ。而して又如何なる科學にも觀察實驗、科學の方法には幾分術を有するが故に、醫學を術なりといふ事は通俗的な見方である。

地理學は普通A、人文地理學とB、地文地理學とに區別されるが、前者は文化的であり、後者は自然科學的であつて、文化科學的なる分科の一部分と自然科學的なる分科の一部分との混成體であるが故に、地理學は一の混成科學として成立するものである。

以上混成内在の科學を認めたわけであるが、かゝる意味からいふならば總ての科

學は幾分混成的性質を有すると考へられる。總て經驗科學は個性認識に始まり分類記述を経て歸納的方法に依り因果的法則定立に進むものである。而して經驗科學の方法はかゝる發生論的過程を取るものなるに依り、之を方法的に最も正しい適當な分類といひ得るのであるが、今は以上の説明に止めて置く。

却説此の項を結ぶに際し、此處に西南獨逸學派乃至は現今の科學分類派の主張を回顧する必要がある。彼等の主張する方法論的の確然たる科學分類は、余の上述せし意味にいふならば無暴の擧といはねばならぬ。何故とならば如何に方法的に確然と區分し得たりとは言へ、諸科學の方法は個性記述より説明科學に至る順次的發展變化であつて、それを區分する事は便宜的の事であり、論理的には確然に黑白に區分する事不可能である。それは丁度少年と青年とを何年何ヶ月を以て區分するかと言ふ問題に等しい。此の意味に於ても余の科學分類は西南獨逸學派の説を許す事が出来ぬ。若し彼等の説く如く根本的に方法的に確然と明瞭に黑白に對立的に區分し得るとするならば、總ての科學分科は各々獨特の方法を以て獨立する事の可能

を許さなければならぬ。それは到底困難な事であり、諸分科の存在上不可能の事に属する。而して遂に論理の矛盾せるに氣附かず、その分類の根本的成果をなし得ずして中間範圍を置いた。之こそ更に矛盾であらねばならぬ。根本的に絶對反對なる二方向の中間範圍といふものが論理上如何なるものであるかを考へ得ないではないか。論理學の言葉を以ていへば個性記述は演繹的であり、法則定立は歸納的である。然しながら演繹と歸納とは根本的に別者に非ず。格段の真理或は事實よりして一般の真理を引出す推理法即ち歸納法に對して、豫め知られたる一般の真理よりして格段の真理を引出す推理法が即ち演繹であるが故に、それは全く相反なるものに非ずして相關々系に於て存在すといひ得るのである。若し兩者が全く根本的の反對なる二個の對立ならんには推理は遂に不可能に屬する事とならん。一定のより一般的なる命題を與件として、より格段なる斷案を推理するといふ事は、兩者が相關々系に於てあるが爲であつて、兩者が無交渉的無絶縁的存在でない事を證明する。而して科學の發生論的考察に於ては、演繹的個性化は常識の階段より一步を進めたるもの

であつて歸納的普遍化の前段をなすものである。更に又田邊博士の所謂通則發見と否とも科學分類としては大なる要素をなすものではない。

第三章 個性認識科學

第一 歴史の概念

歴史が個性認識科學である事は既に學問大系の章に於て叙述した通りである。余は前述科學分類論より出發して個性認識科學特に歴史をその代表者として今少し研究して見度いと思ふ。

前述した如く、歴史は科學として發生論的に最も初めのものであり、論理的に最も低度の科學である。而して歴史が個性認識科學なりといふ事は、個性認識の方向にのみ進むものに非ずして、普遍必然の法則定立科學に進まん爲の個性認識である。かゝれば西南獨逸學派のリツケルト等が主張する處の、普遍必然の法則科學に進むものと全く反對の方向に進まん爲の個性認識に非ずして、個性認識は同時に普遍者の發見、法則の定立を意味するのであるが故に、此の意味に於ては歴史は一の學たり

得るわけであるが、又その個性認識のみを考察すれば藝術とも極めて關係深くある如く見えるのであるが故に、個性認識記述といふ事は一面藝術的の仕事でないかといふ疑問も起つて來る。

歴史なる言葉は我國に於ても古くより用ひられて居る。獨逸語ではゲシヒテ *Geschichte* とし、事件の學を意味する。即ち *Geschehniss*, *Ereigniss*, *Begebenheit*, などと同義に用ひられる。同様に物語 *Erzählung* といふ義にも用ひられた。拉丁語の *res gestae*, 即ち「既に成し終へたる事件。」が特にゲシヒテを意味する。尙又獨逸語にてはゲシヒテをお伽噺といふ意にも用ひて居るが、又只單に話といふ意味にて *Das ist eine schöne Geschichte* 等と用ふる。尙 *Romane*, *Novellen*, *Mythologien*, *Märchen*, 等の意義をも表し、更には自然の叙述に於て *Naturgeschichte* といふ使用法もある。要之歴史は如斯種々多様に用ひられるが、嚴密に科學的にいふならば歴史は國家史を指すものと見て良い。今少し廣くいふならば人類に關する事件の歴史といふ用ひ方が適當であらう。レオポルト・フォン・ランケ *Leopold von Ranke* が

「ローマノ・ゲルマニック民族の歴史」の大著に於て此の *Geschichte* の意味を確立した。同書改版に際しては *Geschichte* にかへて *Ereignisses* の言葉を用ひたが、外題は矢張りもとのまゝにして保存されてあつた。(彼は「ゲルマニアの歴史紀念」 *Monumenta Germaniae Historica*. に於ては表題は *Historica* としふ言葉を用ひて居る。)

ヒストリー *History*, (*Historique*, *Historisch*) としふのは希臘語から出た言葉であつて、總て深く研究して得られたる知識を意味し、現今に於ては一般に學的には *Geschichte* と同様に用ひられて居る。其の言語の起元を研究すれば各々その依て來る由來を異にするが、現今に於ては學的には一般に略同義に用ひられて居るのである。

却説歴史を研究する學を史學 *Geschichtswissenschaft*. としふが、歴史學が對象とする世界、換言すれば歴史學の内容、歴史の概念は如何なるものであるか。今之を大要研究して次に進まうと思ふ。先づ歴史は人類の活動の大部又は一部をその對象と

して居る如く思はれるが故に、歴史より人を除外する事は出來ぬ。而して吾人は半神半獸半人の時代を想像すると雖も、しかも一の整然たる社會的集團を作るには必ずや此處に人格的の結合を要するが故に、歴史には人間の人格を除外する事は出來ぬ。

更に吾人は地球上に棲息して居るが故に、歴史は土地を除外する事は出來ぬ。神話に現れた天界の事件もあるが、それでも矢張り天界に於ける土地を想像されて居る。吾人は土地の上に生活し、土地の生むものを食ひて生き、遂に土地に歸する。人類は實に土地の産物といふべく、吾人々類の活動は土地を離れて現れる事はない。即ち歴史の背景は土地である。

吾人々類は土地の上に生活し、人格的集團を作つて發展して來た。今日の文化も一朝一夕に出來たものでないとすれば、此處に歴史が時間的過程を意味するといふ事も認められ得る。即ち歴史は時間換言すれば時代を除外する事が出來ない。次にその時間の流れに起る事件の因果關係は歴史の最も重要なる内容をなすものである

かゝる歴史の内容素材は幾らかの方法によりて研究され、幾多の素材を考證して記録するのであるが、「歴史」の文字が既にその意義を語る如く「歴」は「歷程」であり「史」は「フミ」であつて記録を意味する。歴史の素材は種々の方面又は補助學科に依て提供される。例へば古文書學、考古學、古泉學、等の如きである。而して歴史は一の記録であるが故に古文書學と混同する事がある。古文書學といふのは歴史の素材たる古文書の研究を意味するのであつて、歴史即ち古文書學とはならぬ。斯くして幾多の方面の研究を綜合統一して此處に或る一つの系統ある歴史が作らるゝのである。此處に注意すべきは、歴史は吾人々類の活動を全部包含した遺漏なき記録とする事は出来ぬ。歴史の模寫説はその意味に於て成立するものでない。何故かならば吾人の活動は總てが價值あるものではない。尙一日中の出来事と雖も之を漏れなく描出する事は不可能である。されば歴史は歴史的素材より歴史家が自由に撰擇したものであるが故に、そこにその目的に依て撰擇の對象素材は異なつて来る筈である。文明史といひ文學史といひ、さては風俗史、文籍史、法制史、經濟史といふが

如き皆その目的を異にするのであつて、従つて撰擇さるゝ對象素材もあつと異なるつて来る。特に政治史乃至は國民史といふものは最も重要視さるゝのであるが、幾多の歴史は國民史を中心とし、基礎として、之にならひて研究され記録さるゝのであつて、實に歴史の中心をなすものである。かゝれば各々の國民はその集團なる國家の存立基礎を堅固にし、更に外的には他國にほこらんとして自國史の爲には十分の努力をするが故に、何れの國家史を見ても總て美しき過去の祖先の記録である。然しながら過去の國家は偉大なる中心勢力即ち主權に依て統率されて居たが故に、多くの國家史は君主中心史である。かゝれば世界の從來の歴史は國家的に、對外的に、主權者に對する或る心理的制約の爲に、又は有權特權階級の爲に、おそらく信をおくに足るものはあまり無いと言ふべきである。如斯にして從來の歴史、所謂既成歴史なるものは學的にもあまり價值なき國王國民の讚美歌となり終つて居るのである。

次に歴史は記録さるゝ事に依て歴史的たり得るのであるが故に、歴史の方法學と

しては文學藝術と關係するのである。
 余は今歴史なるものにつきて一般に哲學的に如何に觀察され來つたかを研究し、それに依て余の考察を述べたいと思ふ。次に叙述するは史觀として重要なるものゝ内、近世に於ける極めて大要である。

第二 近代史觀主潮

一、唯物史觀

唯物論的史觀 Die Materialistische Geschichtsauffassung. と云ふのは、普通にカール・マルクス Karl Heinrich Marx. の經濟史觀を指す。オツペンハイマーは此のマルクスの史觀を生産的經濟史觀といふて居る。然し嚴密にいふならばマルクスの史觀は經濟史觀に包括され、經濟史觀は唯物史觀に包括される事となる。テイン、バツクル等が經濟的條件以外の物質的條件をも重んじ、所謂廣義の物質的史觀を説いたのに比較して、マルクスは經濟的條件を極めて重大視して居る。

今發生論的に唯物論的史觀を觀察するならば、先づ之を二つに區別して考へるのが妥當であらう。第一は生存競争、自然淘汰、適者生存、等の根本的法則、根本的概念を有するダーウイン Charles Robert Darwin. の生物學上の進化論 Theory of descent. Abstammungslehre, Descendenztheorie. を、國家及び社會に於ける人類發展の考察に適用しやうとする生物學的唯物史觀であつて、第二は經濟學的の唯物史觀マテリアリスティック・ゲシヒテと稱するものである。

ダーウインの進化論は何人もよく知れる通り、それ自身は決しす唯物論的史觀でも何でも無い。彼は社會や國家の人類史上に於ける史觀として何等の説明もしては居らない。それ自身は必ずしも一の史觀として成立して居るわけのものではない。然し自然及歴史に於て人類史の對象たる諸現象の説明の法則として斯論を適用する場合に於ては、それは大抵唯物史觀とならざるを得ない。

彼はエヂンバラ、ケンブリッジ等の大學に學び、志願して軍艦に乗り南米海岸の探險に向つた。歸航するまでの五年間に於て得た所は實に大なるものがあつた。後

年ケント洲ダウンに居を構へ、探險より得た暗示により観察研究にのみ従事した。

彼はマルサスの人口論にも多大の影響を受けた。自然淘汰 *Natural selection*. と適者生存 *Survival of the fittest*. の理に想到し之を生物進化の事實に適用して種の起元を説明した。彼の著 *On the Origin of Species by Means of Natural Selection*. 1859 は正に彼の理論を述べ盡したものと云ひ得られる。所謂ダーウィニズム *Darwinismus*. *Darwinismus*. の理論は自然淘汰を種の發生の起派とする。此の自然淘汰が適應の原因ともなり種の變化を起し、新しき種の生成にも重要であるといふ。彼の思想は前述主著の他に *The Variation of plants and Animals under Domestication*, 1862.

Descent of Man and Selection in Relation to Sex, 1871. *The Expression of the Emotions in Man and Animals*, 1872. など是非讀むべきものである。自然淘汰説は彼以前に於てもあつたが、之を高調したのは彼の功績であるといひ得られる。ヘルムント *Friedrich V. Hellwald* の *Kulturgeschichte in ihrer Natürlichen Entwicklung bis zur Gegenwart*, 1875. やゼーグ *Otto Seeck* の *Geschichte des Untergangs der*

antiken Welt, 1894. などは之を實際に適用したものと云ひ得られる。

生物學的唯物史觀に依れば世界の歴史は進化論的の原理に依て觀照される自然淘汰の歴史であり、適者生存の歴史であり、生存競争の社會に於ける優勝劣敗の歴史である。進化論それ自身としては必ずしも史觀ではなく、ベルンハイム *Bernheim*.

の *Einleitung in die Geschichtswissenschaft*. に於てさふ如く、それ自身としては無神論又は唯物論たるを要しない。然しその原理が應用さるゝ人類史の一面は確實にダーウインの法則に依て説明せられない事はない。要之ダーウインの原理は必ずしも生物學の範圍に止まる事なくして、人類史の觀照に重大なる意義を與へるものと考へざるを得ない。

總ては力である。大なる力である。適者は生存する。生存競争に於ては優勝劣敗である。自然淘汰である。遺傳(ダーウインはラマルクと同じく獲得性の遺傳を信じて居た)及び馴化の根本的法則たるダーウインの原理は之を證明するのである。生物進化の法則に従ふべきは唯に一般の動物のみではない。人類も動物である以上、

人類の史乗も又その一般法則に左右さるゝは無理からぬ事であらねばならぬ。一匹の蛾は一小鳥の爲に征服されてゆき、小鳥は大鳥の爲に征服されてゆき、大鳥は動物の爲に、動物は人類の爲に、而して人類は萬物の長となつたが、その萬物の長たる人類も互の内に於ても、貧者や弱者は富貴や強者の爲に虐げられてゆきつゝあるのであつて、優勝劣敗、適者生存の理法は人類史の一部を確に説明せるものといひつべきである。總ては力である。總ての力である。一人の貧民は到底一ブルジョアの敵ではない。然し一人のブルジョアも多數のプロレタリアに對しては力なきものであらねばならぬ。

次には經濟學的唯物史觀 *Die Materialistische Geschichtsauffassung* であるが、之はカールマルクスに依て創唱され、エンゲルス *Engels* ラファエルグ *Lafargue* ベーベル *Bebel* カウツキー *Kautsky* 等に依て完成せられた社會民主主義的史觀である。經濟學的唯物史觀を研究するには當然マルクスの思想から入らねばならぬ。然しマルクスの思想の全般をそのアウトラインだけでも記述する事は到底本書の如きの

よくすべき處でない。又日本にも此の方面の紹介や譯本も澤山出版されて居る事であるから、本書は極めて大要を叙述するに止める。

十九世紀の中葉頃迄はドイツの社會主義は未だ英佛の如く政治的經濟的に完成されて居らなかつた。系統的學說も實際的勢力もなく、文學的藝術的乃至は一部の學者の理論に止まり、大なる勢力を認める事は出来なかつた。マルクスは實に此の時にいで、社會主義に根本的學術的基礎を與へたのみならず、英佛に於ける純理社會學を改造し、世界的なる一個の強固なる社會主義を創造したのである。マルクスは從來の迂遠なる社會主義に反し、現實的社會主義を高調した。ローマンチック哲學の思想を受けて社會を歴史的に觀照し、社會の歴史發達は只だ只だ經濟生活のみに依て左右せらるゝものであると考へ、此處に唯物史觀を立て、その史觀を社會の現實界に適用し、社會問題を現實的に解釋せんと試みたのであつた。

彼は一八一八年プロシヤ王國ラインランドのトリヤ市に生れ、一八八三年ロンドンに歿した。高等教育を受け、後ライン新聞の記者となり、一八四四年プロシヤの

警察から保安條例に處せられ、巴里に逃れたが、プロシヤの通牒に依て國外に放逐せられ、後ドイツに入りバクーニン等の運動に加はつたが、革命が失敗に終るや迫害を免るゝ爲にイギリスに渡り、ロンドンに永住して世を終つた。

彼の思想はヘーゲルの辯證哲學、ダーウインの進化論と相並び、十九世紀に於ける三大思想として、世界思想界に對して偉大なる感化を及ぼした。彼はドイツのロマンチック哲學の最高點たるヘーゲルの哲學形式とイギリスのサンヂカリズム後に曝露された社會現實とを結びつけて、現在固有の經濟的社會主義の原則を立てた。彼に依れば世界の歴史は經濟的條件に左右さるゝ事となるのである。

社會主義 Scientific Socialism は先づ之を二つに區分して考へられる。第一がユートピアニズムであつて、之は空想的感情的社會主義と呼ばれるものである。第二はヒストリカルソシアリズムであつて、所謂マルキシズム又はサイエンテフィックスシアリズムである。前者は一定の理想から割出して、所謂ユートピア的な社會を立てやうとするものであり、後者は今日の社會の進みゆき方、特に經濟組織の發達

が必然的に此の主義の内容となるものであつて、科學的なる社會主義である。マルクス以前、十八世紀よりこのかた、ユートピアニズムは比較的現れては居たが、マルクスに依てサイエンテフィックスシアリズムが科學的に基礎づけられたものである。今日歐米に於て最も勢力を有するものはマルキシズムである。

カウツキはマルクスの主要なる原則を唯物史觀、剩餘價值説、資本積集説、資本主義倒壞説、階級闘争説であるといひ、エンゲルスは特に唯物史觀と剩餘價值説とをマルクスの二大發見であるといふた。

剩餘價值説とは何か。彼はいふ。労働者の労働力は彼を雇ふ資本家に對しては一個の商品であるといふ。労働者は他に衣食住を得る方法がないから、當然此の労働力といふ商品を賣らねばならぬ。然して如何なる商品と雖もそれは價值に依て決定せられるから、労働力といふ商品も自然價值に依て賣買される。その價值は被雇者の衣食住を生産する爲に必要な社會的労働の分量に依て決定せられる。例へば三時間の作業は労働力と價值を等しうする富を生産する事が出來るとすれば、労働者は

日々三時間の作業で良い事になる。然るに事實は八時間乃至十時間の作業に従はなければならぬ。此處に於て雇主は三時間以外の作業といふ富の生産に對する剩餘價值を利潤として得る事になる。つまり今日の資本家は労働者の剩餘價值を掠奪しつつあるのである。之が剩餘價值説 *Mehrwerttheorie* の根本問題である。如斯は道德上許さるべき事であるか、彼は彼自身絶對的に之が道德的に善惡の批評を下さない。要するに剩餘價值は労働者の労働力に依て生産され、而して資本家の所有となるものであり、資本家は此の剩餘價值を得んが爲に生産業を営み、機械や石炭や労働者の労働力といふ商品を購入するのである。而してマルクスは剩餘價值の生産と、それが何故に資本家の所有になるのであるかを明にして居る。

此處に問題が起る。生活の根據が資本階級にありては財産所得にあるから、労働者の如く自己の労働に依て生活する事は不用になる。然るに労働者にありては自己の労働力を賣る事に依て一定の所得を得る。それは労働力の代償として受ける賃銀又は給料が唯一の所得である。然るに彼等は日々苦しい労働に従事しながらその得

る所の報酬は極めて僅少である。之は要するに剩餘價值が資本家の所有に歸しつつある爲であつて、爲之資本家は益々富を増加し、労働者は相變らず一定の給料に甘んじなければならなくなる。かくて社會の貧富の懸隔は益々不平等になり、今日の如き富の分配が平等を缺く社會を出現したのである。

然し此の剩餘價值は流通行程に於ては生ずるものでない。それは物の賣買は價值の上下を互に相殺するものであるから、社會全體には賣買に依て何等の剩餘價值も生じない事になる。然らば剩餘價值は如何なる場合に生じるものであるか、それは生産行程に於て、即ち貨物製造の行程に於て起るべきものである。何故ならば勞力は無形の商品であるから、労働者の五の力を購入して之に十の生産をなさしめるとする場合、當然此處に剩餘價值が生れる事となる。つまり労働力といふものは五の労働に依て生産されたものを消費して十の労働をなす力をもち得るに至る。之を要するに資本家は労働者に向つて賃銀として使拂ひしものよりも遙に以上の價值を有する生産物を自己の所有となし得る。資本家が一定の労働する事なく、その富を

益々増加してゆく事を得る根本的原因は、彼等労働者をして一定の時間内無報酬で労働せしむるに基くものである。例へば労働者が資本家より使拂はれつゝある賃銀三時間分は、之を一日十時間位の代償の如き表面上公平な如くに支拂はれて居る。而してその残部の七時間といふ剰餘價值は公々然と資本家が掠奪して居るといふ事になる。つまり七だけの生産に對して労働者は無報酬の労働を強ひられて居るのである。如斯にして剰餘價值は資本階級によつて所有され、その一部は化して資本となり、その資本は更に剰餘價值を生み、それが更に資本に繰込まれ資本は益々膨大となる。マルクスの所謂 *Altkumulationstheorie* が生れるわけである。此處に於て資本家の數は減少し、その資本は益々膨大し、自由競争に代りてトラストが現れ、それに止まらず農業に於ても地主の數は減少してゆくに反比例してその財産は漸次に増加してゆくのであるといふ。如斯にしてブルジョアとブルジョアの階級が、お互にその陣營を接近せしめ、所謂階級闘争が起るといふのである。

マルクスの有名なる「共産宣言」の第一節 *Bourgeois und Proletarier* と題する部

分は唯物史觀の立場より最も注意すべきものである。それは有名な句に依て起筆されて居る事は何人もよく知れる所である。即ち「總て從來の社會の歴史は階級闘争の歴史である。」—— *Die Geschichte aller bisherigen Gesellschaft ist die Geschichte von Klassenkämpfen.* とす句である。人間が左右し得る自然生産物と、之を使用する爲の技術上の手段とを基礎として、生産必需品を供給する方法程度、生産物が如何に専有され消費されるかの方法程度、要するに之等生産關係の支配を中心として、從來の歴史はそれ等一般の民族闘争、集團闘争、貧富闘争、貴賤闘争、有權無權の階級闘争となつて表れ、今日に残された闘争の記録が歴史である。マルクスは *S. v. Freier und sklave, Patrizier und Plebejer, Baron und Leibeigener, Zunftbürger und Gesell, Kurz, Unterdrückte standen in stetem Gegensatz zu einander, führten einen ununterbrochenen, bald versteckten, bald offenen Kampf, einen Kampf, der jedesmal mit einer revolutionären Umgestaltung der ganzen Gesellschaftendete oder mit dem gemeinsamen Untergang der Kampfenden Klassen.* 即ち總ての從來の歴

史は前もいふ如く階級闘争の歴史であつて、自由民と奴隸、貴族と平民、大名と農奴、親方と職人、換言すれば壓制する者とせらるゝ者とは、古來より相反目し、絶ゆる事なき闘争をつゞけて居る。それはいつも全社會革命を以て、又は兩階級の共倒れを以て其局を結ぶに至る所の闘争である。昔の時代の歴史に依れば吾人は殆んど至る所に於て社會が種々なる身分に等差づけられて居り、社會的地位にも等差が認められて居つた。古代ローマの貴族、騎士、平民、奴隸の如き、中世に於ける封權の諸侯、家臣、同業組合の親方、職人、農奴、等があり、且つ之等の間に於てもその殆んど各々に更にそれぞれ等級があつた。マルクスは歴史を如斯に見て居るのであるが、經濟的唯物史觀はヘーゲルの思索方法に基礎づけられて居るとはいへ、總て宗教的精神的に動機づけられて居る觀照とは根本的に極端に相容れざるものである。而してマルクスは現代の資本主義的社會も亦同様である事を述べて居る。即ち封權社會の没落と共に近代の有産者社會も起つたわけであるが、それは階級の對立を廢したわけではない。我國に於て例を取るならば明治維新の如きものである。

それは古きものゝ代りに新しき階級と新しき壓制の條件と新しき闘争の形とをもたらしにすぎないのであつて、今日の *Bourgeoisie* の時代はその階級の對立を簡單にしたゞけである。今や全社會はいよいよ益々二つの相敵視せる二大陣營に互に間近く對峙する事となつて來たのであると云ふ。

マルクスの唯物史觀は一八四八年共產宣言、一八七七年資本論、一八五九年經濟學批判等を参照する必要があるが、唯物史觀といふ名は一八七七年に於てエンゲルスが名附けたものである。エンゲルスの *Der Ursprung der Familie der Privateigentums und States.* 又カウツキーの「トーマスマムアとそのユートピア」我國の書物では河上博士の大著「社會問題研究」(個誌)及び「唯物史觀研究」等は此項の是非参照すべきものである。

却説今日の資本的社會組織は如何にして封權の社會より生れ出たか、といふ點を深く研究した後マルクスは次の斷定を下して居る。即ち現在の資本主義的組織が階級闘争に於ける無産者の勝利に依て遂に社會主義の新組織に移りゆかざるを得ざる

運命にある事、而して有産者の没落と無産者の勝利は共に避くる能はざるものなる事を力説して居る。而して歴史發展の最も根本的のものは經濟である。歴史が科學なる限り、歴史の使命は之等の根底を探究し、表現するにあるのであつて、經濟學的唯物論は眞に科學的なる歴史考察法であるといふのである。

要之唯物史觀の根本をなすものは階級闘争説であり、總て多數の社會の人間が集つて組織し維持して居るのであるから、その社會組織の變更は矢張りその社會に生活する若干の人々の發動的行爲に依て成就さるべきである。然るに總て過去の社會は階級的社會であつて、同一社會に利害を異にする二個以上の階級が存在して居り、其の階級の或る者は現状維持を自己の爲に利益であると考へ、現状打破に反對する事となり、之に反して他の階級に於ては現状維持を自己の爲に不利益であると考へる事に依て、現状打破を主張する。此處に於て闘争が起るのであるが、若し現状維持を主張する階級が勝利を占めて居る場合に於ては、例へば有産者有産者階級が勝利を占めて居る場合は、社會は彼等の都合次第で自由に彼等が利益をはかつてゆく

事が出来るのであり、かゝる場合には法律なども彼等に都合よく作られ、彼等の權力は次第に子孫に遺傳してゆき、之等をとる巻く無産者も、事實は社會革新を希望しながら、無産者現状打破者の力が尙之等に打ち勝つべく十分でない事を見て取つて容易に離れないのである。次に現状打破を要求する階級が勝利を占めた時、此處にはちめて社會組織の變革が實現さるゝ事となるのである。而してマルクスに従へば經濟上の支配階級は、又同時に政治上の支配階級であるから、近代の多くの國家又は政府は、支配階級の全體の共同の仕事を取扱ふ所の一の委員會であり、共同の營利會社であり、權利保護會社である。今や吾人の眼前には一つの大きな運動が行はれつゝあるのであつて、マルクスに従へば有産者團がかつて封權の制度を倒すべく用ひたる武器は、今や一整に有産者團そのものに向けられつゝある。而して有産者團は自己を死に到すべき武器をみがきたるのみならず、その武器を振ふべき無産者團をも生み出した事になる。

此處に注意すべきはマルクスが歴史を階級闘争史であるといふ即ち *Klassenkampf*

Pftherie を主張してゐきながら、一方に於ては歴史を動かす根本動力を社會經濟組織に歸して居る事である。之は一見不合理のやうに思へるであらうが、深くマルクスの思想を考へて見るならば、決して相互に矛盾するものではないのであつて、社會の經濟は階級對立の上に於て構成されて居る。つまり社會の經濟組織は階級的對立の上に發展して來た。社會は生産力の變動に伴つて變動する、そして常に社會組織變更運動の基礎となる勢力はいつもその當時の社會組織に於て不利益の地位にある階級である。その社會に於て利益相反するといふ事は、それが社會に二つの對立を作り、それが相闘争するといふ事は自然の情である。對立がなければ進歩はない、生産力は要するにかゝる階級對立の支配を根底として來たのであるから、階級闘争そのものも要するにマルクスの經濟史觀としては當然かくなければならないわけである。而して總て從來の歴史は如斯ものであつたが、社會組織の進化と共に剩餘價値を掠奪され、總ての點に於て壓制され、唯是れ勞働力に依て日々生活して居る無産階級者は、之等虐げられた社會を根本的に一變して、所謂階級戰に勝利を占める

事に依て自己を開放し、平等自由の社會を作らん事を希望する。而して此の階級戰こそは人類歴史に於ける最後のものであつて、彼等將來の社會に於ては、他人を壓迫し掠奪する爲の手段となるべき總ての生産手段は社會の公有に歸し、經濟上に於ては全然階級の區別を認めざる社會主義的經濟組織が實現され、血のにじみ出るやうな闘争の歴史は幕を下され、社會改造の成果を見るといふ。

階級闘争は、それ等の眞の原因や目標は、乃至はその理想は多くの場合参加者は自覺されず、當時に於て行はれる不都合な生活事情、法律や秩序の壓制による辛さ耐え切れなさに依て理解されてゆく、而して先づ第一期に於ては甲階級に對して自己が乙階級であるといふ自覺をするに至る。從來はかゝる階級的自覺を有して居らなかつた乙階級も、自分以外に甲の階級ある事を認めて來る。即ち甲を認めるといふ事は自分が乙である事、即ち階級的自覺をする事になる。而して甲乙相容れざる事、利害相反する事、闘争のさくべからざる事を知る。此處に於て經濟的利益を相奪ひ合ふ事を以て第一期は終る。第二期に及んでは政治的の權力を争ふ。所謂經

濟的闘争なるものが要するに根本的の勝利を期すべく十分でない事を自覺し、此處に政治闘争の形となつて現れる。即ち國家の權力を自己の手に收め、最後の勝利を得やうとする。

以上はマルクスの史觀の大要であるが、要するに彼によれば社會の變革が歴史である。換言すれば人類を横に見たものが社會であり、それを研究するのが社會學であり同時に經濟學である、然らばそれを縦に見たものは何であるか、即ちそれが歴史である。つまり歴史の變動は經濟的基礎の變動であり、それ故歴史は經濟的關係の上から説明しなければならぬ事になり、それが眞の科學としての歴史であり、要するにマルクスの考は歴史を法則學とするものであり、科學的の價値づけをするのである。

要之他の社會主義と等しく彼も又貧民救済にある事明であるが、之を達する爲には資本主義を全廢し、生産制度を貧民化共產化すべしといふ點に特徴をもつて居る。而してそれには階級戦は必然的のものであるとするのであつて、純理社會主義に對

しては歴史的であり、ユートピア的社會主義に對しては現實的であり、又更に無政府主義に對しては社會的である。要するに彼は從來の社會主義者が空想的斷片的に構想したる社會主義に對して、之に科學的基礎づけをしたものであり、歴史的心理的現實的に組織した處に彼の偉大なる功績がある。一九一七年のロシヤレボリユーションの如きは彼の思想の影響であると見得られる。

二、實證主義的史觀

實證論的史觀 Positivismus は實證論的哲學 Positive Philosophie の立脚の上に建てられた一の自然科學的なる史觀といふ事が出来る。元來實證論的哲學といふ言葉は獨逸に於てはシェーリング Friedrich Wilh. Jos. v. Schelling(1775—1854)がベルリン大學の講演に於て用ひた事がある。それは一八四一年であつて、ヘーゲルが非理性的な現象を非定し、總て論理に基き理性以外のものを哲學の領域より追放しやうとしたのに反し、理性以外にも吾人の認め得る哲學の領域がある事を力説したのであつて、一種の實證主義の哲學である。然し此處に述べんとする處はシェーリン

グの哲學ではない。それより幾分意義を異にするコムトの實證主義的哲學に立脚した史觀である。

オーギュスト・コムト Auguste Comte (1798—1857) は佛國のモンペリエに生れた。父母は加持力教の信者であつたが故に、彼は幼少の時から信心深き家庭に人となつた。十七歳の時パリーの高等工業學校に入學し數學物理學等を學び秀才の譽高かつたが、學校騒動の起るや教師に反抗して退校に處せられ、十八歳頃より既に家庭にあつて數學等の教授をなしつつ、生計を營むべき運命に立ち至つた。一八一八年社會主義的哲學者サンシモン Saint Simon (1760—1825) の説を聞き大に感ずる處あり以後約六年あまり熱心にその説を信じたが、一八二四年絶交して以來自己の哲學系統を立てん事に努力し、一八二六年實證哲學の講義を始めた。次で一八三二年から四十二年に渡つてそれ等講義を系統的に改訂して出版したものが有名なる大著「實證哲學講義」六卷である。此の「實證哲學講義」 Cours de Philosophie positive. は實に彼の代表作であつて、實證主義の史觀は遺憾なく説明されて居る。

Positive philosophie と云ふのはコムトが自ら自己の哲學に名附けたものであつて唯物論的なものゝ如くであるが唯物論とは異なつた自然科学的なものである。神又は超自然的なる事物に對しては、吾人は何等確實性 Positive を知る事が出来ぬ。哲學的なる抽象的考察は現實的な知識を導來し得ず。神學的形而上學的なる空想的原理で以て自然現象を説明する事に反對し、只飽く迄現實の現象の觀察を嚴密なる科學的方法に於て行ひ、諸現象の本質を把持し、諸現象間の法則を認識する事に努力しなければならぬ。即ち神又は形而上學は消極的な假定のもとに現象を説明するにすぎざるものであるが、實證哲學に於ては單に實驗と觀察に依て達せらるべき確實嚴密なる知識の上に於て進みゆくものであるが故に、神とか宇宙の本體起元の如き無益なる探求は捨て、實際的積極的なものであるといふのがコムトの考であつた。實證といふのは事實に基づく知識であつて、自然科学的哲學といふ如き意味を有する。が然しコムトの實證哲學は社會學をも含むのであるから、それよりも廣い意味を有して居る。彼は特殊の分科研究に對して、その間に一般的共通なる法

則を定立するのが實證哲學の目的であると考へ、此の考に依て *Cours de philosophie Positive* を系統的に述べたものである。彼は此の著述に於て彼が根本的代表的なる科學と認められたものを系統立て、居るが、それは科學分類の項に於て簡単に述べて居いたのを参照してもらひ度い。特に社會現象を自然科學的に論じた點は彼の最も努力をした處であつて、後の社會學者の参考となる點が多い。

コムトに依れば人間精神の發達に三つの階段があるといふ。而して實證的なる階段は純科學的なる思索方法として最高のものであるといふ。有名なる三時期説 (*Lois des trois etats heortiques*) は即ち次の如くである。

1. Theological. (神學的, 假想的)
2. Metaphysical. (形而上學的, 抽象的)
3. Positive. (實證的, scientific)

第一の時代は Theological な時代又は假想的の時代であつて、人は自然現象を説くに超自然の原因を以てし、例へば怪事奇蹟を説明するに神の如きものを以てする

が如きである。第二の時代は所謂形而上的抽象的の時代 *Metaphysical* であつて、此の時代に於て人は超自然力を以て説明する事に満足せず、擬人的思想を排斥して抽象的説明を要求するやうになつて来る。此處に哲學的實體を立て、先天的主觀的解釋を自然界に試みるやうになつて来る。次に進んでは第三の實證論的時代 *Positive* であつて之が最高階段である。此の時代に於て人は觀察實驗により、現象の理法を説明し、事象間の連絡を明にするを以て満足する。即ち絶對的なる理法は吾人の知る能はざる處であるが故に、現象の法則を立て、その共通的なる普遍法則を立つる事を目的とするやうになつて来る。是れ近世科學の發達の順序であつて、從來の形而上學時代に變りて立つものである。故に社會は形而上學の時代から追々と進んで科學の方へ導來せられて来るのであるが、實驗的説明の不可能なるものは何事も科學外へ追放すべしとするのであつて、近時の科學と雖も總てが必らずしも此處に到達したるものではなく、又總てが完全なりといふ事が出来ないものである。即ち彼の有名なる科學系統案 (*l' hierarchie des sciences*) は此處に出發して居るのである。

コムトに依れば實證的科學の順序は、單純な事實を取扱ふ所の科學より、複雑な事實を取扱ふ所の科學に及び一の系統を作る。即ち科學が叙上の三階段を經過するには各々遅速がある。天文學が先づ第一に實證的なる階段に到達し、次第に物理學化學生理學(心理學を含む)を経て社會學に至る順序である。單純なる現象は複雑なる現象構成の要素となるものであるが、複雑なる現象は單純なる要素の合成たる以上他の新しき要素を含むが故に、唯單に單純なるものから複雑なものが導き出されるのではない。社會學は未だ實證的階段に達しては居らない彼の。「實證哲學講義」の目的は先づ第一に社會學を自然科學的基礎の上に置かうとする事と、第二に科學を一の系統に組織しやうとする事とにあつて、第一の部分は彼の最も力を入れた點である。今之等を極めて簡単に述べて見やう。

實證哲學を組織する第一歩としては科學を系統立てねばならぬ。而して自然現象には無機と有機との二大區別があるのを基礎として、無機的現象科學としては天文學物理學化學であり、有機的現象科學としては生物學社會學であるが、以上五科學

は科學として基本的のものであつて 其の系統順序は科學發達の順序に當る。故に先にもいふ如く、或る科學を研究するには、發生的にそれ以前の科學の研究が必要である事となるのである。

併し上記五つの基礎科學の後には數學といふ形式科學が構成されて居る。數學は自然研究の具として最も必要なものである。數學は彼に依れば次の二つに區分される。

1. 抽象的數學——微分學, 積分學,
2. 具象的數學——幾何學, 理論機械學,

されば上述五個の基本科學に數學を加へて、都合六種の基礎科學が成立するわけである。數學は量の間接的測定と相互決定の學である。即ち現象の方程式を發見するのが具象的數學の目的で、その方程式の答を出すといふ事が抽象的數學の目的である。

次に天文學は天體に現れた幾何學的機械學的現象の法則を發見する學である。天

文學上の法則を發見するにあつては、單に視覺と推理力に依て研究するより方法はないが、推理力は他の科學よりも天文學が著しく要求する。即ち視覺的な方法だけでは諸星の形態も運行も分らない。唯その角度とか時間とかを測定する事に依て始めて法則が發見されるのである。是等の法則の發見に依てフイクターフ、メタフエジトク思想から解放され、社會の混亂は救はれる。

物理學は分子的の變化なき一個の凝集個的な物體の一般的性質を支配する法則を研究する學であつて、それには一切の感覺が要求されると同時に、數學的な實驗と觀察によつて完成される。物理學に於ては人工的に現象に變化を與へて研究する事が出来る點に於て天文學と異なる。物理學は靜學動學音學光學及電氣學等に細分されるが、今尙形而上學的な概念に拘束されて居る點が多い。

化學は自然的又は人工的の諸種の物質の分子作用及組織分解の現象の法則を研究する學である。

次に生物學であるが、生命の現象は化學的の組織と分解に結合して居るが故に、

生物學は化學と最も密接な關係にある。要するに生物學は有機體の組織及び環境に關する有機的動學の法則を研究する科學である。心理學は生物學中に包括せられる。

社會學は彼に依れば靜學と動學とに區別せられる。靜學は即ち形態學であり、動學は即ち發達學である。靜學は社會の形態組織を論じ、社會全體の作用が部分に及んで個人や家族の協同が生れ、職業的調和により思想感情の分裂並に利益や活動の衝突を防ぐ、此の統一の爲には權威が要求され、此の權威は精神的には學問、社會的には産業となつて現れる。動學は社會の歴史的發展を論じ、此の發展の本を知識の進歩に見、從つて神學的の期には武斷的社會現れ、形而上學的の期に於ては官僚的社會現れ、最後に實證的の期に於ては産業的社會が現れる。此の動學に於ては生物學的的心理學的方法によらず歴史的方法に依るとするのである。彼の實證哲學は要するに一種の社會哲學であり、歴史哲學であるといひ得るのである。

コムの考察に依れば歴史上の文化發展は心理的諸要素で限定される。而して此の發展的法則は相異なる諸時代を比較考察するに依て發見される。即ち歴史的比較

法である。従つて彼は實用主義的歴史考察法を排斥し、個人心理的歴史考察法に反對し、社會心理學的方法を採るのである。即ち集團現象として、全體現象として、心理的社會學的方法に依る認識を採用するのである。而して唯之等のものに限り科學的たる事を得るとする。個別的の動機とか事件とか行爲とか觀念とかは、如何程偉大なる天才者のそれも、それ等の周圍の雰圍氣の全體的影響、即ち環境に依て限定される。而して吾人の時代は先に述べた如く、形而上學的の時代から實證主義的の時代への過渡期に於てあるが故に未だ隨處にその過渡性の性徴を表して居る。多くの科學分科は既に實證主義的なる時期に達して居るが、吾人の知識國の内に於ける最も重要な複雑なる社會學、他の總てのものが依て以て前提とし基礎としなければならぬ社會學に至つては、未だ形而上學的の時期を脱しないで居る。而して彼に依れば歴史は一種の社會心理學であるが故に、之も又未だ眞に實證期に到達したものとはいひ得ない。

コムトの考察は要するに歴史を一種の社會心理學と見るのであつて、現今に於て

は未だメタフジークの域にあり、吾人に何等ポジティブエースとしての何物をも與へないといふ事になる。故に歴史乃至は社會學をして一の實證科學たらしめる事は吾人の現代に於ける重要な任務であるといふて居る。要之コムトの史觀を要約すれば、歴史發展は社會心理學的に限定されるといふ事、比較考察に依て諸種の文化時代を演繹する事、個人は總て全體的に包括される事、故に單個の事件は科學ではなくなり藝術的領域へ追放する事、そこで歴史が眞に實證科學としての位置に進められ、嚴密なる因果認識の要求が出来るといふ事である。

叙上のコムトの諸觀照は多大の影響を社會に與へたのであつた。特にコムトの思想をして社會に感化あらしめた人々はジョン・スチュアート・ミル John Stuart Mill.

ハーバート・スペンサー Herbert Spencer. アンソニー・トーマス・ビッケル Henry Thomas Buckle. ヒミール・リットン Emil Littré. アンリ・テイヌ Henri Taine. 等だ

あらう。其後佛國に於ては新しき社會學者又は歴史家等に依て集團現象の統計的知識は一段と偏重されそれが歴史の全總量であると見做さるゝに至つた。アンソニー・

ブールドー Henri Bourdeau. の如きは一八八八年 L'histoire et les historiens. を著し、集團事象をば只統計の數と公式とに依て表現する事が歴史の究極の理想であるとし、普通行はれて居る歴史の如きは好奇的なる文學に依屬するものであるといふて居るのである。バツクルは又コムトと等しく發展の諸法則を集團的觀照に依て認識しやうとするのであるが、然しコムトの如く社會心理學的考察に依らずして、統計的觀察に依り、集團行爲の統計に於て外面的形式的に傑出する合法性を根據とする。バツクルに依れば歴史は一般的諸法則の認識に依てのみ科學たり得るのであつて、一般的ならざる個々事件の知識、單個の認識は科學上の價值を有しないといふ事になる。

晩年に於てコムトの思想は幾分變化した。そして淋しき生活に彼の一生は終つた。彼は一八三五年工業學校の試験委員に擧げられ十年間その職にあつたが、一八四五年職を退いてからは主としてその崇拜者から集つて來る獻金に依て生活を支へるべき運命にあつた。遂に一八五七年九月五日六十歳にして此の世を去つたが、晩年の

彼は矢張り宗教に歸らざるを得なかつた。それは彼の生活に於ける一事變が原因となつて、理性に重きを置いた實證主義がやゝ變化し、心情の勢力を認めて人道教 Religion de l'humanité. を唱ふるやうになつた。それは實に彼の思想としては革命的のものであるといひ得られる。彼は一八四五年他人の妻クロチルドと戀に落ちた。その戀愛は一年で女の死に依て幕が下りたが、彼の感情の價值を認めるやうになり、自由なる科學的精神を離れて宗教的態度を取るに至つたのも、彼女の交際に依てある。彼に「實證論者の教理問答」Catechisme Positiviste. の著書がある。

三、心理主義的史觀

心理主義的史觀といふのは獨逸ライプツヒ大學の教授であつた故カール・ランブント Karl Lamprecht. (一八五六一一九一五)の史觀である。彼は純粹の史學者であつたが、ヴェントの心理思想の影響を受けて歴史を精神科學的に(ヴェントと等しく)建設する事に努力した。彼の史觀は精神科學的であり、心理主義的であるが故に、之を心理主義的史觀と名附け得らるのである。此處に一言附加すべきは前にもい

ふ如く彼は歴史家であるが故に、記述史派の史観中に包括しても良いわけであるが、心理主義的に一の史観を建設して居るが故に、便宜上項を改めたまでである。

ランブレヒトの心理主義的史観は一の實證主義的史観である。彼はコムトの思想を受けたのか否かは知らないが、極めて似通ひたる説と見るべきであつて、ベルンハイムは彼の史観を次の如く批評して居る。「ランブレヒトはコムトの最も本質的な思想をその獨逸史 *Deutsche Geschichte* に於て最も力強く描寫し、其他多くの論文に於て發表して居る。然しそれはコムトの主張と一致して居るのであるが、彼自身それを知らず一般世人もそんな事とは氣がつかかなかつたのである。近代専門史家に於て、集團的なる觀照方法を取りながらその根本的立脚を明にしない者が多い。ランブレヒトはその集團的現象を過重した爲に彼自ら矛盾の論理に陥つたばかりでなく、カントなどに依つて創められた觀念説を彼が原理として排斥した爲にランケ派の史學者の攻撃を受けた。而も又彼自身その同一哲學に出發して歴史の發展の内容が人間精神の發達による自由意識であるといふ思想より、諸文化時代を社會心理學

的に區分する事を極端にまで適用した。」と。此の批評は大體に於て首肯する事が出来る。

彼の史観を實際に適用したものは前述せる彼の大著獨逸史 *Deutsche Geschichte* である。彼の史観は大體に於て此の大著に依て知る事が出来るが、最も簡単なもので便利なのは *Die Moderne Geschichtswissenschaft* であつて、特にその第二章に於て明瞭に主張されて居ると思ふ。尙同書の卷末に獨逸の初版と同時に英語で *What is History?* と云ふ名でニウヨークのマクミラン會社から出版した事が書いてある我國に於て和辻哲郎氏の譯された「近代歴史學」といふのが岩波書店より出版されて居る。和辻氏の明瞭な流暢な筆に依つて原本に優るとも劣る事なき表現である事は我學界の爲に幸福であるが、余は特にその譯本の卷頭に於ける、和辻氏の序文を讀み、大に利益を得たものである。序文は極めて簡單であるが、そこに或る大なる思想が含まれて居る事を斷言する。尙ランブレヒトの著述は多いが、此處には略する。

ランブレヒトは彼の著述に於て心理主義的史観を主張して居る。彼によれば歴史

は一の眞の精神科學として建造さるゝものであつて、社會心理的科學である。それはベルンハイムのいつた如くコムトを立脚としたゲントの思想を扱んだものであつて、一の應用心理學といつて良いわけである。かゝれば歴史は一の自然科學としての位置を有する事になり、一の法則定立的の經驗科學となる。即ち一回起的個別的なるものに非ずして一般的普遍的永久的なる持續性を發見する事にある。さればかゝる法則は如何なるものであるかといへば要するに歴史法則は即ち同時に社會心理的法則であるといふ事になる。換言すれば歴史學の目的は個人心理の法則を應用して發展の社會心理的法則を發見せんとするものであつて、要するに文化發展であるが故に、之を換言すれば文化的社會心理的法則發見にあるといふ事が出来る。彼は近代歴史學の卷頭に於て、「近代の歴史學は先づ第一に社會心理學的學問である。現在歴史學の新舊傾向の間に絶えず行はれて居る論争の内で、歴史に於ける社會心理的要素 Sozialpsychische Faktoren を個人心理的要素 Individualpsychische Faktoren に對照して意義づける事が最も重大な問題となつて居る。少し嚴密でないかも知れ

ぬが歴史的進程の原動力を社會的狀態であるとするか乃至は英雄であるとするかといふ問題である」と。而して前者は新しき進歩的な又攻勢的な強い位置にあり、彼自身も又その見地に立つて居る。後者は舊式的であつて、長くその見地より史書が生み出されて居るといふ。彼はいふ。「各文化時代の特性及連續に對して經驗的判斷の一總計を得る事が出来る。その判斷は使用されたる經驗の範圍内に於て無條件的に有效である。而してその判斷は質的に決定されたる對象全體の充分なる實在性に結びつけられる。此の判斷は吾人之を法則と名づく。」と。

彼は獨逸國民を以て文化的發展に極めて順當なる發達をして居るものであると假定し、その文化的區分をする事が方法論的に極めて必要であると考へた。即ち彼は六つの時期に區分した。(但し後、原始期を省略して五時期とした。)

A. 原始期 Animismus.

B. 象徴期 Symbolismus.

C. 模倣期 Typismus.

- D. 因襲期 Konventionalismus.
- E. 個性期 Individualismus.
- F. 主觀期 Subjektivismus.

彼は經濟生活方面に於て右の六期に對應する次の六時期を建てた。

- A. Kollektivistisch—Okkupatorische Wirtschaft.
- B. Individualistisch—Okkupatorische Wirtschaft.
- C. Naturalwirtschaft mit Kollektivistischem Vorgehen.
- D. mit Individualistischem Vorgehen.
- E. Geldwirtschaft mit Gemeinschaftlichen Bewältigung des Handels.
- F. Geldwirtschaft mit Individualistischer Basis

前者は精神的文化區分であり、後者は物質的文化區分であるが、その間に如何なる關係が存するものであるかは彼は説明して居らぬ。が然し彼は右の文化區分が法則定立に進む第一歩であると考へ、總て獨逸のみならず日本の歴史も研究して、此

の文化時代別を確立しやうと考へた。余の記憶を以て正しとするならば、彼は生前東京帝大の史學會の會員であつたと思ふ。彼は兒童の繪畫を研究し、發生的に此處にも人間の發展につれて此六文化時代を經過してゆくものである事を主張した。彼の指導のもとに教育者レビンシュタインは小學校の圖書教育に成功した事は教育上有名な話である。

彼は右の六期につきては政治經濟のみならず社會の總ての現象は此の區畫を以て現はるゝものとし、普通の歴史家が個々の偶然なる現象と見る事も彼に於ては時代精神より出でたる現象と見るのである。アニミズムといふのはラテン語の Anima より出た言葉であつて種々の現象の原始的民族に於ける思考態度などをいふのである。靈とか生命とかと譯すべきか、要するに總ての現象中にアニマの存在を認める事であつて、余は便宜上原始時代として置く。靈活時期としても良いわけであるが、原始期といふ言葉はあまり確實でないかも知れないが、よくわかると思ふ。

獨逸史に於て言へば、象徴、模型、因襲の三期は十五世紀迄にて終り、十六世紀

より十八世紀の半ばまでは個性期以後現今迄は主觀期であるが、彼に依れば主觀主義時代を前期及び後期に區分して居る。桑木博士の説に依れば我國の古代より奈良時代過半迄は象徴期であり奈良時代の過半より鎌倉時代迄は模型期、次にそれより徳川時代の初までは因襲期、徳川時代及明治の大半は個性期、現代は主觀期であると彼は近代歴史學に於て、第一章に歴史學の發展と現代に於ける特性の題下に彼の主張の立脚點を説明して居る、而して第二章に於て獨逸史の心理的經過を論じ、第三章に於ては右五時期の經過につき心理的過渡時代の一般的力學を述べ、次に第四章に於て各文化時代の一般的心理學、第五章は社會心理的立場より世界史問題に論及して居る。彼に依れば文化發展は民族精神の必然的生産物である。而して此の民族精神は最初に於て象徴的形式を以て表れる。此の時期に於ては象徴的特質が藝術的自然的又は社會的の總ての方面に現れて居る。此の時期に於ては個人は團體の一例一標本にすぎず、人格的に獨立なる存在を有しない。次に自然的象徴的統一が消滅し、一の民族的意識が發達して此處に模型期が表れる。藝術に於ても實在に進む傾向

向を持て來るがそれは模型的復現に止まる。次に中世紀の末に於ては因襲的精神が發達して來た。藝術に於ても一の因襲的性質を帯びて居る。此の因襲的傾向は十六世紀までつゞいて居るが、此の期の末に於ては個人主義的なる性質が現れて居る。それは十八世紀に連續して居る。即ち藝術に於ては新自然主義が現れて居り、又宗教改革の如きは中世に於ける束縛より解放して個人を自由ならしめた。次に十八世紀の中葉に於て個人主義的思想に反する主觀期が現れて來た。そして政治的には佛蘭西革命、獨逸民族の解放戦争、獨逸國の建設等の大事件が起つて居る。その第二期に於ては主觀的傾向が經濟、社會、思想、藝術等の各方面に強くなり、所謂過度昂奮性の時代を出現して居る。

彼は民族の六文化時代を區分し、何れの民族と雖も此の連續發達の順序を取るものであるといふ。而して此の六分類された各文化時代の別及びその連續發展は個人心理の法則に従つて自然的必然的に現れるものであるとする。而してその文化の時代が次の時代に遷る過渡期につきての心理的一般的力學を研究して居る。最後に世

界史の問題に論及して結ばれて居る。詳細は *Moderne Geschichtswissenschaft*. に於て見てもらひ度い。

ランプレヒトの史観は要するに記述史派の史観であるが故に、哲學的論理的立場より批評するならば無論缺點を多く存して居る。而して特に西南獨逸學派のリツケルト等の思想に比して論理的意義を有するや否やは疑問である。然し彼は何處迄も記述史家である。此の近代歴史學に現れた處は彼が史的研究を基礎として生れた史實の總括的史観であつて、論理的に徹底せしめんとする哲學者の見地からは物足りない。和辻哲郎氏は同譯本の卷頭に於てランプレヒトの史観につきて批評して居られるが、特に傾聴に價すると思はれるのでその一部を次に引用すれば「余は此の書——近代歴史學——が歴史の理解や記述の仕事の全部を覆ふて居るとは思はない。歴史の理解は種々なる個人や時代の心生活の直觀的な把握をも必要とする。そこにはあらゆる人間の心奥に没入し得る鋭い才能がなければならぬ。さうしてそれは科學者よりも寧ろ藝術家の任務である。ニイチエがドストイエフスキーを偉大な心

理學者と呼んだのが正しい如く、「戦争と平和」の著者トルストイを偉大な歴史家と呼ぶ事も亦正しい。彼等は人間の實際の心生活の知者であり、その心生活の推移の鋭い把握者である。然し之等の人間知者の共働を待たずして心理學が存在する如く、歴史學も又それ自らの任務を有する。藝術家が如何に鋭い心理學者や歴史家であるにしても、その直觀は局部的断片的であつて、複雑な人心の状態全般の組織的敘述に至つてはほとんど手をつけて居ない。寧ろそれは個人の直觀の能力を越えた廣汎な仕事である。それをなし得るのは概念的認識の他にない。さうしてそれを心理學や歴史學が目指すのである。かく見る時はランプレヒトの歴史學も充分その存在理由を持つと思ふ。リツケルト等の説は人間の史的生活的特徴を明にしたものとして勿論正しい。個性の顯現は歴史家の仕事として重大なものである。がそれは歴史の仕事の内では右にいつたやうな藝術家的な活動の範圍に屬するものではなからうか。若し藝術と歴史との相異が、「個性を握つて後表現の材料を求めること」と。「與へられたる材料を明にする事に依て個性を表はさうとすること」との間にあるとすれば、

此の相違の消失する場合がある事も考へなければならぬ。即ち嚴密な材料研究を前提とする藝術もまたあり得るのである。自然主義以後の「事實」を描くと稱する小説などにはその事實の「眞」に就ての關心が科學にも劣らないものがある。もとよりそれは藝術としての特徴をなすものではない。然しまたそれは藝術たることを妨げるものでもない。然らば歴史は事實の「眞」についての強い關心を持つところの藝術の一派であることも出来やう。余の考では個性の唯一性を歴史の對象として強調する以上は、そこまでゆかなくてはおさまるまいと思はれるのである。即ち史的生涯の理解と叙述の仕事は、學問と藝術とにまたがつたものであつて、いづれの方面も共に重要である。さうして歴史書はこのいづれの立場からも生れる事が出来、又二者を混合する立場からも生れる事が出来る。歴史學と歴史書とが必らずしも同一でない所以は此處にある。ランブレヒトが嚴密な科學的態度を取らうとするに關らず、その底に藝術家的な直觀を隠して居るやうに思ふ。そこに恐らく彼の優れた素質があるのであらう云々。「以上和辻氏の近代歴史學の序文の一節であるが、余は此の序

文中に於て一二の部分を除く他大體余も賛成する者である。右はランブレヒトの史觀の正面からの論理的哲學的批評ではないが、間接的に彼の史觀を認め特に藝術と歴史との關係につき述べられた點は大に考察を要する重大問題であらう。ヴェンデルバントが歴史は藝術に近いものであると考へたのに比すれば面白い結論とも見られやう。和辻氏が史的生涯の理解と叙述の仕事は學問と藝術とにまたがるといはれたのは面白い見方であつて、その當否は別問題としても、歴史の根本的基礎、換言すれば哲學的立脚を研究するには一面文藝の本質と文藝と科學との關係につき調査する必要があると思ふ。

四、論理主義的史觀

余が此處に論理主義的史觀と名附ける者は、科學分類論の項に於て説明せし西南獨逸學派の史觀である。ヴェンデルバントの主張する處をリツケルトに於て大成した文化科學としての史觀である。彼等科學分類派の史觀は要するに歴史の而して又一般の文化科學としての諸分科の論理的性質を強調したからであつて、余が論理主

義的史觀と名附けるのはかゝる意味に於てある。

彼等の史觀は歴史を一の經驗科學に建造する事にあつた。而してそれは自然科學とは全く反對の方法に依て基礎づけらるゝものであると言ふ立場より、個性記述を中心とする文化科學の建設に努力したわけであるが、此の邊の事は第二章第二に於て大要説明して置いたから、此處には略する。

五、記述史派の史觀

余の此處に記述史派と言ふは、別にかゝる史觀主潮のあるわけではない。只現今に於ける主潮の重要なものを研究した後に於て、所謂純粹記述史家が歴史に對して如何に觀照して居るかと言ふ點を二三調査して見たい。此の意味から言ふならば前述心理主義的史觀に於て述べたるランブレヒトの史觀の如き、一面記述派の史觀と言ひ得られる。何故とならばランブレヒトは純粹哲學者に非ずして史學者である。故にその史觀を歴史家の史觀と言ひ得られるのであるが、特に心理主義的立脚の史觀として項を分ちて叙べたわけであつて、實際には一の記述史派の史觀に包括されるわけである。

いわけである。

實際歴史家の史觀について述べやうとするには、随分澤山な記述史家の思想を考へ、その主潮を論述する必要がある。然しそれは到底此處に出来ない。若しかゝる研究をするとなれば、それだけでも十分に大冊を成すであらう。けれ共そんな事は本書の目的ではない。特に記述史派は純粹史學者であつて、あまり哲學的に批判的に史學の何物たるかを考へて居る者が少ない上に、あまり重要視すべき史觀がない。先づ前述したランブレヒトや、其他ベルンハイム、マイエル位なものであらう。獨逸に於ても有名な史家は多いが、多くは御用史家が多く、所謂ホーヘンツォルレルン家の爲めに筆を取つたものが多い。かゝる御用史風も一の史風として主潮をなして居ると見れば見られるが、それは別問題として、我國に於ても所謂御用史風が多く、歴史家などは殆んど歴史の批判的考察を等閑視して居り、只自己の興味にまかせて史實の穿鑿に餘念なしと言ふ有様であつて、眞に學の本質について思索をして居る者は哲學者であるが故に、それが又學者の仕事として當然なのでもあらうが、

此處に特に問題とする程の史観は先づないと見ていい。故に此處には極めて簡単にベルンハイム、マイエルの二人につき大要の史観を記して見る。

ベルンハイムは獨逸グライフスワルド大學の教授である。(Dr. F. Bernheim) 氏の史観を研究するには氏の大著 *Lehrbuch der historischen Methode* (史學研究法教科書) に依るが便利である。尙此の書の抄約本 *Einleitung in die Geschichtswissenschaft* (史學概論) が出版されて居る。前者は夙に學界に知られて居り歐米諸國に認められて居るが、後者は著者が前著發行者ドウンケル・ウントフンプロート *Duncker und Humblot.* の許可を以て短縮した抄約本である。(ゲツシエン叢書二七〇卷に收む) ベルンハイムの史観を深く研究せんとすれば前者が良い。然し、此處には本書の必要とする點のみを紹介する。

彼は歴史的認識の發達に三階段を分ち得ると言ふ。而して此の三階段は史的方面のみならず一切の知識の發展につきての階段と一致する。即ち三階段とは、

I. A. Erzählungの時期

I. B. Pragmatischeの時期 I. C. Entwicklungの時期

第一は物語歴史の時期である。エルツエーリングとかエルツエーランゲンとか言ふのは物語を意味する。此の時期に於ては時の順序に史實を物語り又は數へあげるのを以て満足する。即ち奇蹟的傳說的冒險的なる歴史であり、一の美的興味より歌謠史詩が起る。かゝる種類の歴史は何れの民族史に於ても最初に逢着するものであつて、ホーマーの史詩の如きはまことに歌はれたる歴史である。我國で言へば古事記、日本書紀の如きであつて、萬葉集の如きはまことに歌はれたる歴史と言ひ得らるゝであらう。此の歴史は名譽心などから或は偉大な人物の業績事件を後世の記憶に止めたいと言ふ希望から、又は後世に主権者の榮光を傳へる爲に物語りとして言ひ傳へられ書き傳へられる。それは次第に宗教とか政治とか祭祀とかの目的の爲に諸事項を完全に確保しやうとする關心となつて現れて來る。彼の歴史の父と稱せらるゝヘロドトスは紀元前四百四十年に於て、希臘人と波斯人との戰爭を記述して物

語歴史の模範的作品を示した。

第二の時期は實用的の期である。ブラグマチッシュと言ふのは實用主義の歴史期であつて、彼は別にレールハフテの時期即ち教訓的歴史の時期と言ふて居る。ブラグマチッシュと言ふのはギリシャ語のブラグマータ即ち國家の事件と言ふ意味であつて、ギリシャ人ポリビオスが彼の世界史 *Universgeschichte* に於て、呼んで居る。此の期の歴史としてはツキヂテスがペロポネソスの戦役を書いたのが代表的な最初の作品と言ひ得られやう。彼自ら言ふ所によれば、自分の書いた書物が實用的に役立つと言ふ事は、それが過去の事件につきて明確なる表示を與ふる事である。又今後人事現象の發展進歩に伴つて、此の事件と同じやうな又は類似したやうな現象の起り得るについての表示を與ふるに在るのである。即ち類似共通の事件より、過去の知識から實用的なる又教訓的なるものを要求するのは、すべて人間の現象は一般に類似して居るが故に可能であらねばならぬ。彼は如斯考より此の期の歴史として最初の代表作品を残したのである。

此の期に於ては、總て實用的傾向によつて、事件を限定する心理的衝動即ち個人が一般に抱く所の人間的な動機及び目的に向けられ、それ等人物の情熱及び思慮から一切を證明しやうとする。即ち此の期の歴史の特徴は人物の動機及び目的に對する回想、道德化的政治化的判斷にあるのであるが、斯くて歴史材料の内的原因及び條件を深く研究する事に依て歴史に本質的な一進歩を齎したが、此の實用的歴史には一面に缺點を有する事を認めねばならぬ。即ち心理的動機を觀察するに偏して、その研究叙述する人が自己の觀照に依て直接それ等の人を示さうとする。かくて道德的政治的に偏し、特に愛國的傾向に偏しやすいためである。即ち一切の現象を自己の衝動から説明せんとする傾向は、動ともすれば、偶然なる且つ副屬的な動機を過重するに至り、例へば一君主や一民族の運命すら一人の奥女中の陰謀に依て左右さるゝ如くに表現される。凡そ此のブラグマチッシュの史風は或る文化民族のうち個人意識即ち主觀性が勃發する場合に現れるのがその常である。ローマに於てアウグスツス時代以後特別に養成されて發達し、タキツスのアナレーヌに於て模範的

代表的作品を見るを得た。中古に至つて一部は物語的覺書的の歴史に逆進し、他はキリスト教の觀照が入つて發生的の歴史認識法に進むのである。

第三は發展的 *Entwicklung* 又は發生的 *Genetisch* の歴史であつて、此處に於て始めて歴史が一の科學に建造されたのである。何故かなれば茲に初めて歴史家は特性的に因果聯絡する諸現象の一の個有なる知識の領域として、かくの如き材料につきての純粹認識を目標とする事になる即ち各種の歴史現象は如何にして發展したか、而して如何に生成したか、換言すれば發展の概念 *Begriff der Entwicklung* を知らうと欲するのである。

ベルンハイムは如斯史觀の發達に三階段ある事を論じ、現今の史觀主潮を總括した上で、史學の概念及びその方法論に及んで居る。彼に依れば史學は社會的存在として種々活動する人間發展の諸現象を價值に關係せしめたる心的物的因果關係に於て研究し表現する所の一の科學である。彼は重ねて言ふ「吾人はかくの如く定義して歴史を一の科學と名附ける」と。何故とならば彼に依れば歴史は或る一定の事實

領域をば因果關係に依て認識するからである。之等の認識に於て從來屢々藝術的な著作形式を以て表現される事があるが、歴史の表現に於て藝術的天稟は必要である。さればとてそれを以て直ちに歴史を藝術だと考へる事は出来ない。何故かなれば歴史的表现は全然科學的研究にもとづきて、何處迄も歴史認識の目的にあづからなければならぬからである。故に歴史は藝術表現の從屬的な手段ではなく、假令藝術的形式の援助なくとも、それ自身に於て専門科學としての任務を果し得る。無論歴史を美的藝術的に表現すると言ふ事は、又は歴史素材に對する美的感興につきては、それは忽かせにすべきものではないが、藝術的な美的な感興のみを標的として觀點とするならば、それは歴史の退歩である。

彼は更に實證的史觀や唯物論的史觀につきて説明して居る。而して之等の史論に於ては、單個の事件、社會先覺の個人研究の如きは眞に科學としての價值を有せず、かゝる事象は科學的要求としての一般的因果律に依て説明さるゝ事は到底出来ないが故である。只類型的集團的一般狀態に於てのみ一般因果法の實現が出来るのであ

るが故に、之等のものゝみが眞に史學の對象たり得るのであると言ふ。之等の唯物論的又は實證論的史觀については、實は誤れる前提により、概念の混同によるのである。吾人も又因果認識を要求する。然しそれは自然科學的方法のみに限らず、單個の事件につきても、そこに差別的そのものが研究の對象をなすのであつて、單個の個物の個性と言ふ事を考へなければならぬ。

歴史の對象は人類の活動である。人類の活動には二方面がある。一は外的原因により一は内的原因に依てその活動が限定される。而して歴史に於ては内的制約つまり心的因果認識なるものが特に重きをなすのである。何故かなれば外面的現象と雖も、それが吾人の意識に入りて心的動機となる事に依て始めて活動するからである。而して自然科學のそれは漸進的又は果進的 *Progressiv* に、何回でも同様に限定され豫覺され得る原因よりの作用として説明するのに反し、逆行的又は退歩的 *Regressiv* に、單個の特殊的事件としての現象を説明するのである。而してバックル其他の人々の如く、一般的法則又は統計的に歴史現象が制約されるものではない。何人か亂

民蜂起を數量的に豫見し得るものぞ、しかも又彼等の内的心的のそれを、如何にして一般法則を以て限定し得るものぞ。議員の選舉や投票が常に意外の結果を齎す事のしばしばある事は人のよく知る所であるが、それは人々の氣分である。所謂この氣分なるものは個人の心的動機であつて結果に於て始めて認識され得るのである。而して單個の現象の差異を顧みざるが如き認識は、史學としての仕事ではなく、現象の發展が特種の有様に於てあると言ふ事に於てこそ吾人の感興を惹起する。唯物史觀の如き、上述歴史の本質を無視する事を以て、歴史を科學的に價值づけると考ふるは概念の混同も甚しい。自然科學的なる觀察が、眞に歴史の内容本質を把握する能力を有せざるものなるに、それをば史學の本質と考へ、歴史を一個の自然科學として建造すると言ふ事は概念差別を無視するものである。ベルンハイムは如斯論じて自然科學の法則定立的目的に對し、史學の概念を明示して居る。即ち「歴史を一の自然科學に建設する事」*aus der Geschichte eine Naturwissenschaft zu machen*」に反對して居るのである。彼は言ふ。集團の現象や活動を取扱つたからとて眞の歴

史とはならぬ。單個の事件を物語つたからとて科學的歴史でないと言へない。要は之等兩様の活動が相互に權威を有すると言ふ意味の認識對象となつて始めて歴史科學が成立する。彼れに依れば歴史の觀察上重要な差別は、單個的、類型的、集合的に諸現象諸活動を區分する事であつて、單個的觀察に於ては個別的特殊的特質の研究に興味を有する場合、類型的觀察は同様に反覆する諸活動であつて、風俗習慣の如きその例である。此の場合に於ては單個の活動は吾人の感興を惹かずあらゆる活動の類型が認識に役立つ。次に集合的觀察は個體でも類型でもよい。とに角多數の全量としての觀察を考察するのである。戦争とか、言語とか、宗教の如きは此の例である。而して之等の三つの差別は結合されて居り、集團活動は個々の活動から成り、個々の活動は集團活動の根柢の上に立脚する。集團と個人とは何時も交互相關的に存在する。

ベルンハイムは如斯にして史學の本質及職能を述べ史學の領域を規定し、史學研究のメトデイクに論及して詳細を極めて居る。以上はベルンハイムの史觀の大要、

特に重要な點を *Einleitung in die Geschichts wissenschaft.* に依て叙述したのであるが、要するにベルンハイムの史觀は發生論的史觀である。而して唯物史觀に反し、更に又實證主義的史觀に反し、大體に於て西南獨逸學派の史觀に似通ひたる處がある。彼は歴史を一の科學に建造する事を力説し、歴史の自然科學的又は藝術的建設に極力反對して居る。彼が同書史學のメトデイクの最初に於て歴史の懷疑說に反對し辯護して居るが、今その一節を引いて見ると、次の如くである。

茲に注意すべきは史料の批判學が史料の捏造を確證し出した事である。かくて從來すでに承認されて居た確實なりと認められて居た多數の史實を葬り去つたのであるが、それが爲に歴史の懷疑に落ちてはならぬ事である。それは歴史認識の不可能を意味するものではないからであつて、成程十六世紀以來、報告は屢々信ずべからず遺物は偽造され傳説は捏造されて居る事が發見せられて居る。かくて歴史批判學が歴史は信ずべからずと言ふ思想を生み出した。特に十七世紀の末葉十八世紀の初葉佛蘭西で最も盛に、彼の詩人コルネーユの甥にあたるド・フオントノール Bernard

le Bouvierde Fontenelle が言つたと傳へられて居る「歴史は一の假作的小説にすぎなす。」「L'histoire n'est qu'une fable convenue」と言ふ流行語が一般に行はれたのであるが、近代に於ては世上の觀照が穩健に保持されて來て、あまり重要でない飛び々々の懷疑が散見するのを除いては、人々はかゝる臆病になやまされない。史料の報告が如何ばかり混濁されて居るかを判別し、眞物と偽物を確定し、何れの場合でも、常に積極的に確實なる標準を獲得して進むべきであると。

以上ベルンハイムの史觀が哲學的見地より如何程の價値を有するものであるかは別問題として、彼の發生的見地は輒近記述史派の史觀として重要な位置にあるものと言ひ得る。

アイエム Eduard Meyer は「歴史の原理及方法學」Zur Theorie und Methodik der Geschichte に於て自然科学的歴史哲學的史觀に反對し、唯物主義的史觀、實證論的史觀、心理主義的史觀等は正當なる史觀と言ふを得ない。特に歴史に於ける偶然的要素又は自由意志を排斥せんとするが如きは誤りであると言ふ。即ち自然科学的史

觀は歴史及びその方法の存在する意義を説明し得ない。かくの如き史觀即ち實在界に存在しない歴史を工夫せんよりは、存在するものを、そのあるが儘に摘出して、その本質を分析すべきである。

歴史法則なるものはどうかであるか。歴史法則なるものは今日に於ても未だ発見されて居らぬ。而して又集團的現象に於ても存在して居らぬ。只そこには類型的なる通則が存するだけである。然し歴史法則が発見されて居らないと言ふ事は、歴史家の知力が足りないが故でもなく、資料の缺乏でもなく、歴史の本質性の然らしむる處である。歴史に對して自然科学的及人間生活上の法則なるものは、單にその前提であつて、それが歴史の本質ではない。若し歴史法則なるものが発見されたと假定したならば、その時はすでにそれは歴史と名附け得ないものとなり終るのである。それは歴史の目的物ではないが故である。即ち彼によれば歴史の目的物は何處に於ても個別的なる現象又は過程、即ち吾人が個別的特殊的なるもの、名の下で最もよく包括し得る處のもの、研究及び記述にある。されば歴史家は先づ如斯現實に現れ

た事實を確實に叙述する事が本分である。

歴史は過程の叙述である。故に過去の認識である。さればその対象はすでに過去にあつて現在して居らない。只結果が残されて居るが故に、その結果以前に於ての現象である。然しそれは吾人が總てを知り得るものではない。而して又歴史としてはそれ等の總ての現象が皆同等の價值を有するものでもない。即ちそれ等の現象に於て有效なる又は有效なりしものゝみが歴史の対象となる。(Historisch ist, was wirksam ist oder gewesen ist.) 此處に対象を選択する必要が起る、而してそれは興味に依つてある。されば歴史の興味は個人的なるものに限らない。一民族一國家一文化でも良い。要之彼の考察は、A、歴史の重要點は個別的過程である。B、普遍的なるものは歴史認識の対象ではない。C、歴史の興味は文化人民に向けられる。D、歴史に効果あるものゝみ歴史の目的となる。E、集團的全體的現象は歴史の前提となる事はある。それは個別過程又は現象の理解に必要な限りに於てのみ考察される。

以上マイエルの史觀の大要である。彼は集團現象を排し、特にランプレヒトの心理主義に極力反對して居るのであるが、結極は彼も又社會的心理又は個人心理的機制に求めて居ると言はねばならぬ。彼は自然科学的史觀に反對して居りながら、西南獨逸派の如く根本的に旗色鮮明なる文化科學をも建設し得て居らない。然し記述派の史觀としては重要なものと信ずるが故に此處に略説した。

第三 個性認識學としての歴史學

余は以上近世に於ける史觀主潮とも言ふべきものゝ大體を叙述したのである。以上の叙述は近世史觀の極めて一小部分に限られて居る。然し此の小部分の史觀も實は近世史觀の主潮をなす重要なものであつて、之に依て従來考へられて居つた歴史の概念の大要を知る事が出来ると思ふ。余は此處に以上の史觀を回顧し總括して余の考を述べ度いと思ふ。

史觀の主潮として擧げた前項の叙述を回顧すれば、何れも歴史を一の科學として

基礎づける事に向けられて居る。而して學問系統の上より如何に位置せしめるかにつきて問題が分れて居る。余は大體に於て之を次の三つに區分し得ると思ふ。第一は學問の研究方法は總て同じものであるが故に、總ての學問に於て方法的に差はないものである。而して歴史も一の自然科學的方法に依て研究すべきが當然であるとする自然科學的歴史觀である。第二の見解は學問を分類して自然科學に對し精神科學を對立せしめやうとする史觀である。之に依れば歴史は精神科學として位置する事になる。即ち心理主義的史觀である。第三は歴史を文化科學として自然科學に對せしめ、經驗科學を全く相反する兩方向の認識として區分する論理主義的史觀である。而して多くの史觀は先づ何れも皆此の三者に包括する事が出来得ると思ふ。勿論その間に各々幾分の特色を認めぬわけにはゆかぬが、大體に於ては此の三つの主潮に於て包括さるゝと考へて誤りはないであらう。第一の見解を取る者にマルクス、コト等を數へる事が出来、第二の見解を取る者にヴント、ランプレヒト等があり、第三の見地に立つ者にザインデルバント、リツケルト等がある。記述派の史觀と雖も

又此の三者の何れかに屬せしめられ得る。余は前述史觀につきては大體説明し得たりと信ずる。特に論理主義的史觀としての西南獨逸學派の史觀は、最も徹底的なるものであつて、哲學的論理的に殆んど遺算なき迄に論及して居るのであるが、余の發生論的科學觀に於ては、結果に於ては大なる相違はないが、その意義に於て異なるものゝある爲、之を大要第二章に於て説明したのである。

却説個性認識とは如何なる意義を有するか。而して歴史は個性認識の科學であると言ふ事は如何なる理由に依るか。即ち歴史の本質及科學系統中に於ける位置更にその科學の方法論である。大要は前に叙述したが此處に今少し遺漏せる問題を拾ふ必要がある。而して此の點につき余の考察を叙述する事は一面には一般の史觀主潮の批評ともなり得ると思ふ。

余の考察に依れば總ての科學は發生的に一の系統案に連續するものであつて、一元主義的のものである。此の考に依て西南獨逸派の根本的對立としての二元主義的分類に反對するものである。何故とならば如何なる科學も方法論的に絶對反對なる

兩極端の異方向に進行する二途の認識差別が存するのでは決してないと斷言し得るからである。無論通俗的に觀察するならば、個性認識一回限りの一回起性、反覆せざる空前絶後の單個の事象を他と差別的に獨特のものとして研究する方向に對立して、普遍必然の法則定立の認識が、前者と根本的極端に存在する如く見える。然し論理的發生的見地に立ちて觀照する場合、此の見解は科學分類の要素として確實なりと言ふを得ない。むしろ此の兩極對立の見方は科學分類に於ける見方に非ずして科學と藝術との區分對立の見方の要素となるものではあるまいか。余は科學の二元主義的區分に反對する理由は、要するにかゝる科學の方法的區分が絶對不可能である事を信ずるが故である。科學とは何ぞ、それは真理の追求である。眞理性とは何ぞ、それは批判的に普遍必然性を有する妥當なる構成概念である。而してリツケルト等の主張する自然科學に對立するものとしての絶對反對なる個性へのみ進む文化科學の眞理とは如何なるものとなるかを疑ふ。何故かならば、批判的に普遍必然なる妥當性はかくして得らるゝものではないと信ずるが故である。科學の目的は總て

一元的一系統的に普遍妥當なる眞理性の確立に存する。而してそれと根本的反對に進行する文化科學なるものは、科學の目的と反進行を取るものである。科學の異端者でなければならぬ。勿論余は先に叙述したる如く科學と雖も個性の認識を離れて成立しない事は縷々述べた通りである。然しそれは個性にのみ進む目的を有するものではなく、普遍必然な法則に進む前段としての仕事であるが故に、個性認識を自身を目的とするものではないのである。無論普遍なるものが單に存在する理由はない。それは個物に内在して居る。個物なくして何の普遍ぞや。論者或は言はん。普遍なくして何の個物ぞやと。然しながら吾人の認識は先づ個物に出發する。發生的に普遍に出發した個物ではなく、個物に出發した普遍ではないか。常識的階段に於ても之と進行する方向を等しくする人あり。故に我あるに非ず、我あり而して人ありと言ふ思考は最も發生的原始的であると考へ得られる。無論研究の便宜上普遍あり而して個物ありと見る事は悪いとは言はぬが、論理的にはしか考ふべく正當である。而して科學は此の個性認識に出發して普遍必然の法則定立に進むものであるが

故に、個性の認識は科學成立の根本になるものであるが、それで科學の目的は達し得られたりと言ひ得ない。

果して右の叙述が正當なりとするならば歴史は個性認識科學であつて、次第に高度の科學に進まんとする傾向を有するものであるが故に、現今に於ては未だ普遍法則の發見が出來て居らないとは言へ、それはその點に進まんとする傾向に向つて努力されつゝあるものと見られ得る。更に、歴史が藝術的色彩を有すると言ふ論争も、此の點より考察するならば、當然起り得べき問題であつて、事實兩者の區別要素に判然せざる點多々ありと言ふ事が出来る。それは發生論的に疑ふ餘地はない。發生論上藝術に最も近接せる科學は歴史なりと斷言すべく躊躇せぬ。和辻哲郎氏が歴史は科學と藝術とにまたがつて居ると論ぜられたのは或る意味に於て正當である。ツインタルバントが歴史は極めて藝術に近いと言つたのも十分理由があり得る。何ぞ知らん藝術は科學の母である。先づ發生的に原始的考察をするならば、原始民族に於ては先づ藝術あり、而して科學は次第にその原始的藝術域より發達したものであ

る。而して更に極論するならば、藝術も科學も共に最初は人生に必要な爲にあつた。有用な目的に生れたのである。

果して然らば歴史は藝術と等しきか。余をして言はしむれば藝術と等しき歴史も過去には多々あり得た。而して現在に於ても尙あり得ると信ずる。我國に於て引例すべく多々あるではないか。古事記は一の藝術性を有する我國最古の歴史である。萬葉古今の歌集は歌はれたる歴史に非ずして何ぞ。而して更に後世に於て源氏物語の如き、以下物語、鏡の類より太平記、源平盛衰記に至るまで、何人かそれを藝術に非ずと斷言し得るものぞ。歴史の父と言はるゝヘロドトスの遺著をはじめ、ポーマーの史詩、其他ポリビウス、ツキヂデス等を數へあげるならば、歴史が嘗て藝術なりし事を如何にして疑ひ得るものぞ。而して歴史はゲシヒテの名にたがはず、エルツェールンゲンの名にそむかずして今日の發達を見たのであるが、其の文化の進展に於て、科學は藝術と次第に分れて來た。而して科學は科學として發達したのであるが、歴史の如きは今も尙その色彩の幾分を持つ科學として存するわけである。

何人か歴史と藝術とを根本的に一絲亂れず區分し得るものぞ。勿論區分し得らるゝ特質は互に持つて居るとは言へ、又そこに分つべからざる共通點のある事を發見する。

余は此の思想を二つに區分する事が出来る。第一は個性域であり第二は科學域である。第一の個性域にふみ止まり、個性としてのみ發展したものは藝術であり、次に科學域に移り、遂に種々の科學の成立を見たのであるが、尙個性域と科學域との境界線にあるものは歴史である。故に科學の方法論的區分をすれば、總ての科學は總て異なる。故に科學分類は發生的系統案を取るのが最も確實なる又方法の發生的に正常な手段である。

歴史は如斯今尙個性認識の域にある。而してそれは次第に科學的色彩を濃厚にして來る傾向を有する。故に歴史は科學である。が然しその一部又は大部分は今尙個性域にのみ踏止まるが故に藝術的色彩を過度に有するものもある。此處に和辻氏の所謂科學と藝術とにまたがつて居る。此の意味に於て言ふならば前述した總ての從

來の史觀は皆誤つて居る。が一面又皆正常である。何故とすれば余の發生論的科學觀は之等一切の史觀を包括するが故に、一面その部分をなすとも言ひ得られるが、一面はその部分に止まるが故にである。歴史は繰返すと言ひ、前車の覆るは後者の戒と言ひ、更に殷鑑不遠と言ふが、歴史をかく見る事も出来る。が又一面一回起性空前絶後性をも持つと言ひ得る。其の前者は歴史の科學性を認めたものであり、後者はその藝術性を認めたものである。而して余の史觀に於てはその何れをも認め得らるゝ大包括的史觀であると思ふのである。

リツケルトがランプレヒトの史觀を批評して、時と處とに關せず繰返し得る發展のみ示す事が出来るか、又自らかゝるものを示して居るかと言つたが、余は示し得る可能性を有すると思ふ。又彼自身も示して居ると思ふ。何故とすれば歴史より抽象する通則性は繰返し得る發展である。ランプレヒトの歴史の五期の區分の如きは繰返し得る發展を示す文化の流れである。リツケルトの史觀は一面に於て正常である。然し歴史の法則性を没却した事は缺點である。無論現今かゝる法則は發見され

て居らぬと言ふかも知れぬ。然し發見されて居らなくても良い。それに進む傾向を有する。然し此處に注意すべきは歴史を右の理由に依て不完全なる科學なりと言ふ事は出来ぬ。何故とならば眞理性の追求に進むが故である。物理化學と雖も果して完全なりと言ひ得るや、而して又絶対普遍なる眞理法則を定立せるやと。物理化學と雖も一般的普遍法則を定立したりと言ひ得ないのであつて、それは程度の問題である。歴史の個性域を強調する場合はリツケルトの如くなり、科學域を強調する場合はランプレヒトの如くなる。而して要するにその何れも正當であるが、何れもそれのみを強調すれば偏重にすぎるが故に、歴史は個性域と科學域とまたがるとも考へられ得る。

如何なる科學も個物の個性を顧みずして普遍にのみ進む事は出来ぬ。それは土臺なき建築に等しい。而して歴史が何處迄も個性化の方法に依て目的を達し得られると言ふ事は誤であつて、個性認識は科學としては普遍必然の法則認識と同方法に依てのみ可能である。此の理由は科學分類論中に詳論したが、個性認識と言ふ事と普

遍認識と言ふ事とか、科學的に根本的に別々の方法に於て存すると言ふものではなく、何れも同じ意味に於て相關的に存するものであるが故に、歴史と自然科學とは同方向に進む科學であつてそこに差はない。

然らば或は言はん。歴史も一の自然科學なるかと、自然科學と言ふ言葉を廣く解するならば吾人々類の活動も自然そのもの、内に包括されるが故に、對象的には自然科學なりと言ひ得らるゝであらう。然し方法的に言ふならば如何なる科學も各々科學獨特の方法を要求するが故に、方法は各科學に於て總て異なる。西南獨逸學派は方法的に科學を分類すると言ふが、同じ文化科學と雖も必ずしも歴史と同様であり得ないではないか。價值關係を没却した普遍的の自然科學と雖も、その各分科は同一の方法と言ふを得ない。まして歴史と法律學、經濟學、宗教學等が皆寸分異なるなき方法に於て認識を要求され得るかと問はゞ、皆否と答ふるならむ。即ち科學の方法は各學皆異なり、之をその類似に依て共通的に包括するが故に西南學派の主張も生れるわけであるが、根本的に之を嚴密に言ふならば、同一と言ふ事はあり得

ない。故に余は歴史を一の自然科学に建造せんとするものではなく、自然科学に接近せんとする傾向を科學の性質として居ると言ふのであつて、そこに尙十分科學的色彩の鮮明ならざる發生的の點も存すると認むるのである。

歴史は發生的には現今個性認識の階段にあるが、然し歴史の法則が可能であると假定するならば、その瞬間すでに歴史でなくなり、その法則は社會學の如きものとなると言ふ人がある。然しそれはさしつかへない事である。その生れた法則が心理的であると社會的であると又は物理的であるとは問題ではない。目的を達する爲の方法であるが故に、抽象された法則がすでに歴史と名附けられなくても、その目的たる法則に依て科學の目的的完成を見得られたのである。アナトール・フランス Anatole France が歴史を三語に納めて抽象した。「人は生れ——人は苦しみ——而して人は死す。」と。Les Opinions de M. Jerome Coignard, pp. 226—229 人は生れる、人は苦しむ、而して人は死ぬと言ふ事は歴史的には眞理である。が然し之は歴史の法則に非ずして生物學の法則であると断定する人もあらう。然しそれが生物學

的法則であつても學としての歴史には何等矛盾するものではない。學としての歴史法が一面生物學の法則と見られ得ると考察すれば、その歴史法は更らに重大なる意義あるものとなる。歴史の法則が歴史に止まらず、他の分科にも及ぶと言ふ事はその法則性の意義を強くするものであつて、ランブレヒトの五期の區分の如きが兒童心理學として應用され、藝術發達論に引用されるもならば、それはその法則性を益々意義あらしめ得るのである。何ぞ歴史の學としての立脚と矛盾するものぞ。總て科學の定立する眞理性法則は、その法則が普遍的なればなる程、つまり普通の度の高ければ高き程、それは各科學に通ずる筈である。歴史の對象たる爲にはナポレオンは人でなければなるぬ。即ちナポレオンは人なり。と言ふ事は歴史としては眞理である。而して人の定義は歴史も生物學も等しいと考へられ得る。次に水は物理學的に H_2O である而してナポレオンののみたる水は H_2O に非ずと言ひ得るものぞ。歴史の方法は歴史に限らず自然科学にも哲學にも用ひられ得る。逆に自然科学の方法と雖も歴史に用ひられ得る。漢鏡はその製作につきて歴史的に知るを要する。漢鏡の合金

を知るは歴史の一の方法である。然しそれは分析する物理的實驗と方法に於て等しい。日本武尊の薨去は脚氣なりと言ふ。然らばそこに病理的方法を以て研究する必要が起る。如斯歴史の物理的病理的研究、換言すれば自然科学的研究を以て、歴史學の本質と矛盾すると言ひ得ない。哲學は哲學史に於ける重要な位置部門を占める。而してその哲學史が歴史的方法に非ずと言ふ事は出來ない。然らば哲學の學として成立する上に歴史方法は重要な位置を占める。

或は言ふかも知れない。右に叙述した如きは歴史的事實として誤りなからんも、そんな事は歴史として何等の價值を有するものでないと。又ツインデルバントが言つた如く、ゲーテが一七八〇年に呼出鈴と鍵を注文したと言ふ事は、錠匠の勘定書に依て知る事が出来る。それは疑ふ餘地なき事實であるが、それは傳記としても文學史としてもはた又歴史としても價值はないのである。然しそれが價值ありやなしやと言ふ斷案は如何にして可能であるか。余は價值なしと言ふ事が出來ぬ。或は價值がないかも知れない。又重大なる價值を歴史的に有する事件であるかも知れな

い。歴史の認識目的に依て、史家がその目的に依て對象を選択するのであるが故にかゝる事件が價值なしと斷定を下す何等の理由も存しない。史學の資料を自由に選擇すると言ふ事は史家の權利である。而してかゝる一見歴史的價值なきが如き資料も、それが今後如何なる價值を有するに至るや知るべからず、右に叙述せし例の如きと、ナポレオンの遠征とは歴史的に何れが價值大なりやと言ふ事は絶對的に斷定し得ざる事である。日本史の記述史家にはナポレオンの大業もビスマルクの政治も何等の價值を有するものではなく、ゲーテの呼出鈴を注文した事實と何等輕重ある事なしと言ふべきであらう。余は史實の價值なしとかあるとかは此處には問題とはならぬと思ふ。

前に科學や藝術は、人生に有用なるが故に發生したと言つた。之について今少し説明を要する。先づ藝術について言ふならば、例へば裝飾の如きである。裝飾の爲の裝飾として生れたものではなかつた。それは有用であり必要であるが故に發達した。太古の藝術は皆然りと言つて良い。太古野蕃人が刀の柄に彫刻をした。それは

美を表現するのが本質的な目的ではなく、武器を手より滑り落さぬ爲の役に立つ目的であつた。如何に美的なりとは言へ生活の出来ないやうな家を建てる事は出来ない。腰掛は腰を掛ける必要を缺く事は出来ない。藝術の發生的研究に於て、そこに人生に有用と言ふ事が根本の目的をなして居る。歴史は如何であるか。例へば我國で言ふならば日本書記以下六國史の類は總て有用なるが故に生れた。勇壯なる史詩は戰士を鼓舞する爲又はその戰勝を祝福する爲に生れた。書記以下の六國史は官廳のメモアールンとして必要であつた。對外政策の上から生れた。發生的に言ふならばそれ等はプラグマテツシユゲシヒテである。官廳のノートツシエンとしての目的がその大部分を占めて居る。我國の記紀以下の史乘は皆その例である。現今に於てはかゝる色彩がないと言ふかも知れぬ。然し發生論的にはかゝる目的に生ひ立つた以上、今日と雖も全然その色彩をなくしたとは思はれない。幾分かはその間に有用と言ふ意義が含まれて居る。何人か自國の爲に不利益な國史を編纂するものぞ。殊に歴史は直接國家の政治や主權に關するが故に、既成歴史は此處に大なる難點があつて、

それ等大なる権力や勢力の爲に左右されて居る。之等の史學上の問題に立ち入りて、其の方法論上の疑點は余の別著に詳論したが故に此處に略するが、要之有用と言ふ目的より發生したと見得る。

却説歴史は叙上の如く個性認識の學であるが、それは發生論的に極めて低度の科學である。所謂一般の自然科學殊に物理化學は數學的基礎の上に立つて居る。而してその法則として定立する處のものも多くは數理的公式に依て表現される。勿論説明科學と雖も全部が數理化されて居るとは言へぬが、説明科學の大部分は數理化されつゝあり、而して數理化される傾向を有する。然るに歴史に於てはかゝる數理化的傾向がない如く見える。カントが精神科學はその對象たる精神現象が時間中に現れ、而して時間は一次元を有するのみであるが故に、三次元の幾何學の如き、一般に數學の如きは關係せしめ得ないと言ふ理由に依て、精神科學の科學的成立を疑つたのであるが、精神科學のみならず歴史に於てもかゝる關係上科學として不完全なものである如く見える。然しながら必らずしもしか考へられ得ない事は精神科學に

於てはヘルバルト、フエヒネル、ザント等に依て論破せられた。歴史が數學と關係が乏しいと言ふ事は、尙精神科學のそれ以上である。余は前に縷々述べたるが如く、法則が數理化せられざるの故を以て科學の成立が不完全であると言ふ事は發生論的科學系統に於ても言ひ得ない。勿論法則の數理化はその法則が普遍的性質を有する上に大なる力でなければならぬが、然し總ての法則が數理化され得ずと言ふ事は何等科學としての價值に關係するものではない。只數理化の可能程度の問題でなければならぬ。

然し此處に發生論的に考察するならば、論理的には數理化の可能程度の如何と言ふ事を以て一の科學系統を作る事が出来る。而して數理化は説明科學に於て最も多く個性認識學に於て最も少ないと言ふ現象は何人も認め得るであらう。然らば發生論的には、數理化の多きに從ひて高度の科學となり、數理化の僅少になるに從つて低度の科學たる事となる。只此處に言ふ低度と言ふ事は論理上しか言ふのであつて人生に價值なしと言ふ意味ではなく、又有用とか無用とか言ふ根據は科學上問題で

はないのである。

却説以上説く如く、而して又前の學問大系に於て叙述した如く、歴史は一個の個性認識學であつて、それは次第に高度に進まんとする傾向を有するものと認め得るのである。歴史が一個の科學たる限り、それは發生論的には個性認識にのみ進むものに非ずして、個性認識は普遍認識に進まん爲の個性認識なるが故に、西南獨逸學派の如く個性へ進む事を以て普遍進行の反對と見る事は出來ず、しかも尙一回限り空前絶後なる現象と雖もよく理化學乃至は數學の對象たり得るのである。對象が一回限りであるとか反復するとか言ふ事は、それは對象の問題であつて方法の問題ではない。

第四章 記述科學

第一 記述學につきて

記述學とは何ぞ、記述學 *Beschreibende Wissenschaft* と言ふのは普通に動物學、植物學、礦物學等の如く、事實の分類記述に止まつて未だ説明の域に達せざるものである。科學の發生論的見解によれば、個性認識科學が一步を進めて、對象の特徴を分類記述する域に存する學であつて、説明科學なる物理學、化學等の前段をなすものである。但し此處に注意しなければならぬのは動植物學が直ちに理化學の前段であり豫備であると言ふ意味ではなく、その科學方法が發生論的には前段をなすと言ふのである。哲學上にて記述 *Beschreibung* と言ふのは、科學分類派の説明に依れば、經驗事實の要素關係を斷定に構成する事であつて、經驗せられたる事實以上に超脱する事が出來ないのであるが、余の發生論的見地より言はゞ、それは説明科

學に進まんとする傾向を有するものとして、經驗以上に超越したる法則を立てる事が可能である。只法則そのものは普遍でなければならぬが上に、それが直ちに經驗を規定する權利を有すると言ふ點に於て超越と言ふのである。而して如斯に進むべき爲には先づ經驗せられたる對象を共通類似に依て一の類概念にまとめなければならぬが、それを普通に分類 *Classification* と言ふて居る。即ち類概念を種概念に區分 *Unterscheidung* するのとは反對に、種類に共通なる性質に基づき、一層大なる種類にまとめゆく事であつて、更に各類が相互に共通性を有する場合に於ては一層普遍的な類の系統に組織してゆく事を分類と言ふのである。然しながら特殊と言ふものは總て普遍的要素の種々相の結合關係にあるが故に、共通的な屬性は之が二は類に統一さるゝが他方に於ては類の種々相がその特殊を成すものであるが故に、絶對に一義的の特殊と言ふものはなくなる。然し一面實在界は總て個性としての存在であるが故に、そこには特殊的なものばかりであつて、その個性その特殊は、總ての種々相の結合の多小又は状態に依て、特質づけらるゝが故に、分類とは不變化

的なるものと變化的なるもの、換言すれば一義的なるものと否とを分ける事ではなく、若し總ての實在が一義的存在ならんには分類も區分も不可能になり終るのである。

抑々吾人が特殊を區別すると言ふ事は、一義的なる個物を見る事ではない。又かゝる一義的なる個物は存在しない。何故かならば總ての個物の個性は、普遍に結合せらるべき要素の種々相が或る状態と多少に依て結合しての存在であるが故である故に分類とはその特殊の個物の個性より共通點を抽出し、その共通點に依て特殊の所屬を明にする事である。かゝれば對象の如何に依ては種々の類に所屬すべきものとなるが、それは止むを得ない事である。學としては對象を區分する事は不可能であり、方法の差別に依て、對象が何回も所屬的位置を變化するやも知れぬ。例へば動物學にも植物學にも屬する對象も出来るのであるが、それは學の方法論的區分としては當然の事と言はねばならぬ。

從來哲學者は此の個物の種を類に、類を更に一層大る類に統一する事であるとし

たが、その個物より種への思考が誤つて居る。一の個物は個物として獨特であるが、個の個として獨自であると言ふ事は一義的であると言ふ意味ではない。ライプニッツの差別にまつまでもなく、葉一枚同じものはないが、その一義的存在の如く見ゆる木の葉も、それは普遍なる種々相の結合である。その一義的存在の如く見ゆるものも、結合の如何に依る。普遍性の種々相の結合は總てその結合の状態を異にするが故に、それを一義的と名づくる迄にて、絶対に一義性と言ふものは、絶対に類に統一さるる事は論理上不可能でなければならぬ。

之を科學の組織論的見地に立ちて考察すれば、普遍的類概念の外延を分割して個に達する逆と見得るのであつて、學的には彙類とも言ふのである。普通に任意的に偶有性に基つて分類する Artificial classification とは異なり、自然的なる Natural classification でなければならぬ。かゝる自然的分類は本質的屬性に基づき區分し分類さるゝのであつて、かゝる本質的屬性は根本的屬性に結合さるゝが故に、之を稱して科學的分類 Scientific classification と言ひ得るのである。かゝる結合の結果

は自然的種類 Natural Kind 又は實在的種類 Real Kind に一致する事になる。例へば生物學的分類 Biologische Klassifikation の如きは、かゝる本質的なる屬性による Scientific classification であつて、記述科學はかゝる分類に依て定義に定立してゆく科學である。

記述學は叙上の如く定義定立の科學である。如斯個が類に統一せられた共通なる對象の屬性は、之を命題に表す事に依て、概念の内包を明にするが故に、之を記述と言ひ、その内包の概念を規定する事を定義と言ふのであるから、逆に定義とは一の概念を規定し、概念を明にするのである。D は定義さるべき概念、G は D が屬する類概念、sd は D が G 中に於て他の概念と區別さるゝ特質要素とすれば、即ち定義 Definition は $D = G + sd$ の公式に依て表す事が出来る。

以上叙述する所に依て明なる如く、定義は記述學の目的である。かゝれば定義は經驗學に於て最初に立せらるべきものに非ずして、最後に立せらるべきものであるが故に、その屬性の如何と言ふ科學認識は定義に至る前段をなすものであるが故に

科學の進歩にとまひ、屬性も又新しき内容に変更せられ、定義も又改廢をまぬがれ得ない事となるのである。

發生論的科學系統案に於ては、直觀から經驗へ、經驗から個性認識へ而して分類記述へ、更に説明から抽象へと進展するものであるが故に、その各々の階段は要するに一の發展的なる系統的階段をなすものであると言ふのである。

記述學の如何なるものなりやは略説明し得たりと信ずるものであるが、所謂自然科學なるものも、その最初は分類記述にはぢまるものであり、個性認識學より高度にして説明科學の前段をなすものである。動物學、植物學、礦物學、又は生物學、心理學、化學の一部分は將に此の域にあるものと言ふべきである。

生物學に於ては生物の精神現象は直ちにその對象となり得るものではない。何故かならば精神と言ふ對象は單獨に個物として存在するものではなく、さればそれをそのまま認識の對象とすべく不可能である。常に精神現象とか生命現象は物質的肉體に並行する現象であると言ふ假定に依て研究される。若し精神現象又は生命現象

が肉體と又は生物體と現象が並行しない限りその學は不可能に終る。かるが故に精神科學、心理學や生命學(生物學と稱するもの)は物質的現象として、經驗的に記述學に屬するものである事が認められ得るのである。

第二 輓近生物學界の進歩

輓近生物學界に於ける進歩の跡を尋ねんとすれば、必らずや指をダーウイン Charles Robert Darwin に屈しなければならぬ。彼や實に十九世紀思想界に於けるニウトンとして將にその中心人物と目されて居たのである。今彼の思想乃至は輓近の進歩の跡を略記せんとするに先立ち、彼以前の生物學的發展の輪廓を追求すべき必要がある。

一六五一年、ハーヴェイ William Harvey はその著「生物の生殖」に於て胎生學を正確な基礎の上に置き、一七〇〇年代の末葉ウォルフは顯微鏡を用ひて細胞を研究し、其の性質を同じうせる胚種に於ける諸機關の進化及分化を示し、近代學說を豫

示した。今や細胞の増加と分化とが一切の發生的發達に共通せる過程なること及び有機的發達が動物生成の總てに於て一致せる線上に進みつゝある事が認められるに至つた。しかも高等動物の發達が或範圍内に於て一段と低度の諸動物の經過せし階段を反覆すべきは明である。

宗教的迫害の爲にウエルテンベルグ地方にのがれたる新教官吏の子として、靜に研究に耽りつゝ、革命時代と恐怖時代をすごし、晩年パリに歸りコルレージュ・ド・フランスの首席教授を占めたるジョルジュ・キュヴィエー Georges Cuvier は化石化する諸生物につきて現今のそれと比較研究する事に依て、生物學に一の新しき方面を開いた。十八世紀の後半に於ては探檢研究盛に起り、クック Captain James Cook の如き此の方面に著名なる學者にして、彼は日蝕に關しての研究を公にし、探檢研究の功果大なる事を示せるなど、此の方面は次第に進歩の跡を示した。

此の當時フンボルト Von Humboldt は五ヶ年の長期を南米大陸やメキシコ灣の諸島の探檢に費した。彼はプロシヤの博物學者として旅行家として有名であつたが

彼が自然地理學及氣象學に確實なる基礎を興へたのも、彼の探檢に依て得た觀察にもとづくものであつた。彼は地球の表面の等溫度を連結せる線即ち等溫線を引く事に於ておそらくその最初の研究をした。更に彼は之に依て諸國の風俗を研究し、又は海拔の進むに従つて溫度低下の比率を研究し、更には熱帶に於ける暴風大氣激動の原因等を考へ、火山地帯の研究、さては兩極赤道間の地球磁力の強度の相違、自然的境遇に依る動植物の分布等あらゆる方面にその研究の歩を進めた。彼の一切の事業を蒐集したる大著「コスモス」(Kosmos)は、彼が居をバリーに定めて以後その編纂にとりかゝつたものであるが、彼の一八五九年の死に至るも尙公にせられなかつた。彼の歐洲學界に興へたる刺戟は實に大なるものがあつた。斯の如くにして科學的探檢は次第に發達し、一八三一年英國より派遣せられたビーグル號は全然科學目的の爲に探檢の途に上りチャールズ・ダーウイン Charles Darwin は官遣博物學者として之に搭乘した。

其後有名なる博物學者ダー・ダブルユー・ジエー・フリーカーの子ジョセフ・フリーカー

は南極探檢に加入して海水中に於ける植物の研究を完成し、ハツクスリは濠洲海上に於て測量し、海圖の製作をした。一八七二年より數年間チャレンジャー號は太平洋の海洋を巡航し、大洋學、氣象學、博物學方面の一太記録を得んとした。かくて科學的探檢はおそらくその頂上に達した。

動植物の體內にある複雑なる實質につきての化學は主として炭素と言ふ元素に關するのである。炭素の原子は相結合し又他の元素とも結合する性質を有して居り、かくて極めて複雑なる分子を形成する。然しながら吾人の生活作用は遂に生活力と言ふ不思議なる作用として、之を機械的に説明すべく不可能であるとされて居たのであつたが、一八二八年フリードリヒ・ウエーラーに依て尿素が人爲的に作られ、此處に機械論は一段と力を強うし、引いて一八八七年フィッシャー、ターフェルは諸元素より砂糖を製出し得た。かくて不可思議なりし物體の生活作用は着々と化學的に研究さるゝに至つた。

かくて多くの生活作用の變化が化學の範圍に入り來ると同時に、生理學上の物理

的解釋が一段と進歩して來た。ハーヴェイは血液の運動を説明し、それを心臓の機械作用に歸した。然るに此の生理學上の物理的説明は尙十分なる進歩を見ず、此處に活力説勢力を示むるに至つたが、前述尿素の發見化成、ヘルムホルツのエネルギー不滅の原理を生活有機體に適用する等の研究に及んで物理學的に促進され、生活々動の一切は要するに攝取されたる食物の化學的乃至は熱的エネルギーに歸す事となり若しエネルギーが物理的法則の支配を受くるとすれば、此の方面も又物理法則の支配に依て説明するを得べしとする傾向に至つたのも蓋し當然の歸結と言ふべきであらう。かくで自然論的機械的立脚地はシュライデン、シュウアン等の有機體が生物的單位としては生ける細胞より成る事を發見せしと、細胞の構造機能に關する他の研究により一段と勢力を加へた。而して膠質の溶解より引いて、生理學は「膠質に關する物理學にして且蛋白質に關する化學なり」と考へらるゝに至つた。

第十九世紀に於て特に發達したのは微生物學、細菌學であつた。シュウアンの酸酵の研究に次で、之を擴大せるルイ・パストウル Louis Pasteur の研究、ビュヒナー

の酵素發見、ジエンナー Jenner の種痘法の發見、更にマラリア熱の研究、マルタ熱菌の發見等は吾人々生に對して大なる價值を齎した。而してそれは外科手術に於ける麻醉藥の發見と共に醫學の進歩を促す事の大なるものがあつた。

化石は人類の信仰を爲さん爲惡魔が土中に埋めしものとは十九世紀に於ても尙信ぜられて居た。かゝる際にラブラースの太陽系の起原に關する研究は一般の興味を引いた。然し聖書無誤謬説が勢力を有して居た當時、一のかゝる説明は一般の論争の的とならざるを得なかつた。ジエームズ・ウッドワード James Woodward の地質學的大採集は化石が眞に生物より來るものなる事を確證するに力があつた。然し聖書の記載と一致すべく強ひられた當時の思想界に於ては了解に困難であつた。

一七八五年「地球論」Theory of the Earth を公にして近世地質學の基礎を建てたるジエームズ・ハットン James Hutton は岩層を生じ、又は其中に化石を包有する事實は現に河湖海水に於ても行はれつゝありと認めた。其後ウイリアム・スミス William Smith が化石の年代研究に力を入れ、キューヴィエー Georges Cuvier が

現在及過去動物の比較研究をなし、化石と骨とよりバリー地方に於ける既に消滅せる哺乳動物を再造し、ラマルク Jean Baptiste de Lamarck は化石貝類の分類を完成しライエル Sir Charles Lyell は地球が今日も尙改造の途上にある事、並に彼の著「地質學原理」に於て化石の研究をして以來、此の方面に一段と研究が進んだ。

人類の年代に關する研究は吾人に特別なる興味を興へた。而して古代の遺物の研究、野蠻人種の研究、さては下等なる動物より、類人猿の種族等が研究さるゝに及びて人類が次第に進化し、而して恐らく今後とも變化するであらうと想像さるゝに至つた。

近世に於て生物學界に特筆すべき思想はダーウイン Charles Robert Darwin、
 ルサス Thomas Robert Malthus、及びメンデル Gregor Johann Mendel、等の學說である。それより先、サンテイレール Etienne Geoffroy Saint-Hilaire、チエンバース Robert Chambers 等は進化論者として個體に對する環境作用を認めて居た學者である。特にチエンバースの匿名の著述「創造の跡」 Vestiges of Creation は時好に投

じ、此の當時の思想をダーウインに向はしむるに力があつた。

ダーウインの思想の中心觀念の指導を興へたのは、マルサスである。彼はサーリに於けるアルベリの牧師であつた。彼は偉出せる經濟學者であつて、彼の時代に於て國家の財源は膨張し、その結果國民が生存競争をなすべき必要生じ、茲に人口の大増加が可能となり、且それが必要となつた。

今此處に彼の思想の一部を要約するならば、人口は制限なき時は幾何級數の比を以て増加するが、食物は算術級數の比にて増加するに過ぎない。之を換言すれば人口の増殖力は土地の食物産出力よりも無際限に強大である。然るに人間の生存には食物が必要不可欠であるから、此の不平均なる二力は何等かの方法で以て平均を保持せしめる必要がある。而してそれは過剰人口を既生後に刈る積極的方法が之を未然に防ぐ豫防制限(産兒制限)かを問はず、歸着する處の結果は貧窮か罪惡かの二者何れかを問でない。されば食物を増加する事なくして人口を増加せしめ、勤勉なる者の得分を減少せしむる事に依て貧民の状態を不良ならしめる。彼は大著「人口論」

The Essay on Population, 1798 第一版に於て之等の説は詳細に論じられてある。

彼は此の理由に依てゴッドウィン William Godwin の平等豊富幸福な理想社會の到底出現する事なき空想である事を論證しやうとした。即ち斯の如き社會に於ては人口増殖は最も急速に行はるべきが故に、食物の不足とそれにともなつて争鬭と不平は忽ちにして最初の世界に逆轉する事とならざるを得ない。かゝればゴッドウィンの説は一の空想にすぎず、その大誤謬の眞禍因は人生そのものに存して人爲の制度に存せざる事を忘れたるに因ると言ふのである。

然るに彼はその後五年「人口論」第二版を出すに及んで第一版に重要な訂正を加へた。人は自制的に貧窮罪惡の何れにも陥らざる事を得ると言ふのである。即ち道德的抑制と言ふ事は是れである。人がその子女を養育し得る見込が確實になるまで結婚せず、併せてその獨身生活を清淨に守ると言ふのであるが、彼は此の道德的抑制が一般に行はるゝ時は、醜汚なる貧窮は社會にその後跡を絶つに到るか、或は少くとも如何なる用心先見もそれに對して備ふる事能はざるが如き不運に陥れる極めて少

數の人に限らるゝに至るであらうと、而して彼は貧窮罪惡の原因を人口原則なる自然法則に歸し、是より脱するは各個人の責任であると主張するのであつて、社會共產主義の如き是等原因を社會制度に歸し、マルサス主義に反對するのも理由なしとは言ひ得ない事となる。所謂新マルサス主義はマルサスが晩婚をすゝめたるに反し結婚しつゝ人爲的手段に依て産兒を制限せうとするのである。

マルサスがその經濟的見地と人口増加の原理に於ける生物學的論據は確に一の大問題であるが、その之を道德的抑制に於て結ばんとする事は誤つて居る。而して生物の増加、殊に人口の増加は之を道德的に抑制すると言ふ事は不可能であり、必らずや新マルサス主義の消極的人爲手段に出なければならぬ事はサンガー夫人の主張する如く、正しいと言はねばならぬ。而してかゝるマルサス主義を此處に詳記する事は出来ぬが、ダーウインの思想に偉大なる感化を與へた事は事實である。(J.

Bonar, Malthus and His Work.)

ダーウインはマルサスの「人口論」を讀んで次の如く言ふて居る。「一八三八年の十

月に、自分はほんの慰み半分にマルサスの「人口論」を讀んだ。そして動植物の習性を觀察する事によつて、隨處に行はれつゝあるところの生存の苦闘を十分に了解するや、かゝる事情のもとに於て、之に適應する種類のものは保存せられ、不適應のものは破られると言ふ事實は眞に自分を驚かした。かくて自分は此處に自分の研究の指導となるべき學說を知る事が出来た。」と。

ダーウインは一八三一年ビーダル號に登乗して南米の海洋に五ヶ年の航海をし、博物學者として充分の教養をした。生物に充ちて居る熱帯に於て、彼はあらゆる生物が相依り相助けつゝある事實を目撃した。かくて歸國するや直ちに南米の化石に依て得られたる種の變質につきての論文の編述に着手した。而して後彼はマルサスの論文に依て自説の根本的基礎を發見した。偉大なる彼の進化論は實に指導をマルサスに得る處が大であつたと言つて良し。

一人種中の個人は天賦の性質に於て互に相異なつて居る。若し生存の壓迫又は配偶を得んとする競争に於て大ならんか、かゝる闘争に有要なる一切の性質は殘存の

價値を有し、之等の性質を有するものには、子孫を永續せしむべき機會を有すると見られる。故に此の特殊の性質はそれを有せざるもの、滅亡に依て、其の種を通じて漸次擴大するの傾向がある。種族は變じ他の恒久的なる種は徐々として建設されるのである。而して之等の説は實に新しき思想であつた。ハックスリ Thomas Huxley に依てそれ等の思想は十分に完成せらるゝに至つた。

ダーウインは叙上の思想を有力なる假説として種々の事實を蒐集し、種々の實驗を試みつゝ二十年を過ごした。一八四四年までに彼は種の不變でない事を證明したが尙更に確實なる證據を得んとして研究を進めた。かくて一八五九年十二月二十四日彼の有名なる大著「種の起原」(自然淘汰法に依る種の起原) The Origin of Species by Means of Natural Selection. は初めて世に公にされた。

ダーウインは生存競争に基づく自然淘汰の理法を以て進化の主要なる原因とし、雌雄淘汰及び器官の用不用、外界の影響等を補助的原因となし、極めて包括的説明した。ダーウイン説は實にその影響する處大にして、總ての科學は殆んどその影響

を受けないものはないと言ふても良いのである。ハックスリはダーウインの「種の起原」につきて「種の起原は吾人に提供するに偉大なる假説を以てした。自分自ら今日まで斯かる思想に思ひ及ばざりしは何たる愚ぞ」と。實にダーウインの説は當時の科學に對し、あたかも暗中電光を見たるが如き影響を與へたのであつた。ハックスリはダーウイン説に對して各方面より集中せる攻撃の矢面に戰つて幾度か逆襲を加へた。一八六〇年オックスフォード會議に於けるウイルバードフォースとの論争の如きは、その有名なるものであつた。反對論の或點に於ては、人類の腦の構造が類人猿のそれと若干相違せるに多大の根據を置いた。ハックスリは彼自身の所謂「ダーウインのブルドック」として、終日頭蓋骨測定に従事した。以てその事實の上に光明を與へんと努力した。彼は近代人種學の上に貢獻する事が多大であつた。事實近代人種學は「種の起原」より勃興せりと言ひ得られる。人類の頭蓋骨に關するハックスリの研究は、科學の大多數が今日據て立てる肉體的形質の精細なる測定の端緒であつた。

ダーウインの晩年の事業と同じ時に種々なる研究を重ねて居た者があつた。それはアウガスチン派の僧侶グレゴール・ヨハン・メンデル Gregor Johann Mendel. であつた。彼は自然淘汰に關するダーウインの説のみを以て新しき種の形式を説明するに十分なりとせず、寺院に多くの豌豆を栽培して、その雜種に關する幾多の實驗を試みた。彼は研究の結果をその地方の科學協會々報に依て公にしたが、何人も之を顧る者がなかつた。かくして四十餘年間空しく埋没せられて居た。ペートソン William Bateson. に依て彼の研究の結果は發見せられ、學界を驚異せしめた。

メンデルの發見の要點は、遺傳に於て或種の性質が不可分的であつて、且不變的なる單位即ち生物學的原子概念とも言ふべきものを齎した點である。有機物の或る物は之を有し或る物は之を有せず、而して之を有すると否とは性質上の確然たる對照をなすものである。丈高き豌豆と丈短き豌豆とをそれぞれ同種のものを受精せしめる時は、各々その本來の形を備へるが、若し異種のものを受精せしめる時は悉く丈高き豌豆を生じ其の外形も其親なる丈高きものに似る。即ち丈高きものは丈低き

ものに對して優勢であるが故に、之を優性^{ドミナント} Dominant と呼び、他を劣性^{レセッシブ} Recessive と呼ばれる。(此の二語はメンデルが遺傳法則に用ひし語である)。而して是等の雜種をして普通の如く自ら受精せしむる時はそれが外觀の類似を有する兩親と其種族的特性を異にするを發見する。而して純粹なるものを生ずる代りに其發生せるものは各々その形を異にし、四分の三は丈高く四分の一は丈短し、かくして丈短きものは次第に總て純粹なるものを生ずるが、丈高きものは僅に三分の一のみ純粹の丈高き種を生ずる。然るにその次の時代に於ては殘の三分の二は最初の雜種時代の現象を繰返し、再び純粹の丈低きものと雜種の丈高きものとを生ぜしむる。

是等の關係は本來の植物胚種が其對照的特質として「長大」及び「矮少」を有すると假定すれば、簡單に之を説明する事が出来る。丈高きものが丈低きものと交る時、其の生したるものは外形に於てその親に類似して居るが、其の胚種には「半長大」と半矮少とが潜在する。各胚種は各々何れかの性質を現すが決して兩者を共に現す事はない。かくて是等の雜種に於て、男性の細胞と女性の細胞との偶然の結合に依て

新しき個體が形成さるゝ場合、長大と矮少との性質に關し、二個の相類似せる細胞に接するか或は類似せざる細胞に接するかは之亦偶然の機會に依るものである。若し其細胞が相類似せるものならば、丈高きか低きかも要するに偶然の機會に依るものである。されば次の世代に於て、吾人は四分の一の純粹なる丈高きものを有し、同じく四分の一の純粹なる丈低きものを有する。而して自餘の二分の一は雜種にして「長大」が優性であるが故に、純粹の丈高きものに類似し、其外形に於て實生の四分の三は此の性質を有する。

遺傳の方法は「優性」の特質を有する場合と劣性の特質を有する場合とで趣を異にする。一の個體がその「優性」を有する場合に於て、その性質は兒孫に傳はるが、二個の個體がたとへ外形にあらはさずとも胚種中に「劣性」を有するものと配するとき、其系統中に「劣性」は隨時に出現するを得るのである。されど大多數の場合に於て遺傳の條件は豌豆に於ける單に二個の單純なる對照的性質の研究より發見する所に比して遙に複雑なるもの存する。例へば種々なる性質は其性に從ひ若しくは其他

の條件に従ひ或は優性として或は劣性として作用する。

かくてメンデルの法則は植物のみならず、動物界にも又人類にも追究せらるゝに至つた。(William Cecil Dampier Whetham, Science and the Human Mind. 大日本文明協會譯、科學思想發達史は同書の譯書である。同書は極めて廣き範圍に於ける科學思想の發達を叙したものであつて、極めて趣味深きものである。)以上生物學發達の大要を叙述したものである。

第三、生物學問題

生物學 Biologie, Biology. とは如何なる科學であるか。トレビラヌスが一八〇二年に *Lehrbuch der Biologie oder Philosophie der lebenden Natur* に於て始めて *Biologie* なる語を用ひ生命の科學的研究の學であると考へられた。從來生命は形而上學としての對象であるとせられて居たのであるが、此處に至つて生命を自然科學的に研究される事になり、Lamarck もまた *Hydrogeologie* 中に *Biologie* の語を用ひた。

抑生物學は叙上の如く生命學なりと解する場合は一の獨立學となるわけであつて動物學植物學の總合稱と言ふ事にはならぬ。然しながら動物學は生命學にまで及ぶ事が出来ると思ふ。何故ならば動物學はその對象たる動物に對して絶對の權威を有すべき筈である。而して吾人は生物を對象とする科學に於て、動物學はその現象論的科學として唯二つに限る筈であると考へる。されば動物學は分類記述以てその學の方法とし、普遍必然の法則定立科學に進まんとする傾向を有する筈である。何故ならば發生論的科學系統に於ては、總ての科學は真理の追求に存する。而して科學の眞理追求は批判的に普遍必然の構成概念に存する以上、生物現象學も、一の普遍妥當なる眞理に進まんとするものであるが故に、目的論的説明に進まんとするものである。

余は生物學なるものを認められぬ。若し生物學が生命學なりと言ふならばそれは如何なるものを對象とするかと問ひ度い。何故かならば生物學が對象とすてふ生命なるものは、吾人は動植物の現象的なるものを對象とするに止まり、特別なる對象を

豫想する事は出来ないのである。

或る人は言ふ。生物を薬品で殺し、アルコール漬となし、或は紙に貼付して枯草となし、又は剥製の標本となし、解剖して顕微鏡にて研究するの類は死物學でこそあれ、生物學と言ふ事は出来ぬと、然しながら此の論は誤つて居る。生を研究すると言ふ事は一面死物の研究である。死物が何故に死物なりやは生物をして生物たらしむる所謂ではあるまいか。美學に於ける美の判断は同時に醜の判断でなければならぬ。死物が何故に死物なりやは生物としての研究でなければならぬ。然しそれは生物體に生命を豫想しての事であり、假令それを豫想してもそれは動物學や植物學に於ての研究範圍に止まる。何故ならば單獨に生命の對象を如何にして求め得べきぞ。余は今此處に哲學的見地を離れ、しばらく自然科学的の生物學者の研究を調査して見る事としやう。生物學者の調査する處に依て知る生物の種類は實に百萬を越える。而して大は大洋に王たるクヂラより顕微鏡にても尙見る能はざる細菌があると言ふ事である。

かゝる無数の生物を普通に動植物に區分して居るのであるが、然し動物と植物との區別は果して可能であり得るか。動植物の區別を如何なる定義に依て可能ならしむるか。

生物學の教ふる處に依れば動物界と植物界との區分は判然しないと言ふ。ムラサキホコリカビの屬する類を植物學では植物菌と言ひ、動物學では菌虫類と言ふのである。更に例擧すれば赤潮を起す生物は、動物學では渦鞭毛類と言ひ、植物學に於ては鞭毛藻と言ふ類に包括する。實際に於て此類の中には動物の如く食物を求めて生活して居るものもあれば、植物と同じく自分で蛋白質を造つて生活をして居るものもある。然しながら方法論的科學系統に於ては、對象の如何は問ふ處でない。同一者が甲科學の對象となる事もあれば、乙科學の對象となる事もあるが故に、植物學の對象となり、同時に動物學の對象となるべきかゝる種類の實在があると言ふ事は科學として決して必らずしも不思議とは言へない。

生物が生活すべき根據として種々の官能が營まれて居ると考へられる。即ち綠葉

植物又は葉綠素を有する海藻等に於ては體外より炭酸瓦斯を吸入し、炭酸兩素を分解し、炭素は澱粉となり、根より上り來る硝酸鹽類と合して蛋白質を構成する。動物に於ては更に消耗作用としての排泄作用がある。而して動植物は體中に酸化作用を營み、炭酸瓦斯が體外に出る。即ち呼吸作用を營む。かくして生物は生長する。生長すると同時に繁殖する。

生物は外的刺戟に對して反應作用を有する。之が更に進めば運動を起す事となる。かゝる生活をすべき爲には一定の部分が一定の仕事をして有機的結合をするのであつて、若し此の有機的組織を破壊すれば生活は不可能となり死に至る。何故に死に至るかは別問題として、現象論的には右の事實が考へられ得る。

却説生物の體を造つて居る原形質は核を有する。核のない原形質をサイトードと名附けられ、かゝるものより出來て居る生物をモネラ Monera と呼ぶ事はヘッケルが言ひ出したのであるが、研究未だ發見に至らなかつたのである。尙原形質を取り卷く細胞膜 cell-membranae がある。(Haeckel. Die Lebenswunder 第二篇参照)

如斯にして生物學者は生物を極めて微細なる細胞に歸し、その細胞に依て分化 differentiation 生殖、組織 tissue 發生變化 development 等を説明しやうとする。然し生物學が生命學なる限りに於ては、かゝる方面の研究を以て完成するや否やは疑問である。何故とならば之等の研究方面は廣義の生物學に屬し、動植物學の研究範圍に屬するが故に、更に又動植物學なる記述科學も又此の範圍に入り込む可能を有するが故に、特に動植物學より引き離ちて生物學を之等と獨立の位置に置く事は、方法として便宜であると言ふ理由の外に、論理的意義を有しない。若しかゝれば生命學なる生物學は生理的心理學とも言ふべきであらう。普通心理學は人間の精神を研究する精神科學なるが故に、心理學を廣く解するならば生理的心理學とも言ふて不可なきものとなる。

吾人は此處に生物學に於て相對立する二方面の立脚地を見る。即ちA、活力説(生氣説) Vitalismus. B、機械論 Mechanismus である。前者に於ては生物に目的的な特別なる働きをする活力を假定し、之に依て生活活動を説明しやうとするのであ

つて、シユタール、ワグネル、シャール、ウルツチ、リービツヒ、シユテンダール等此の派の主張であるが、生物の自然科学的研究が目的論的原理を除去して因果原理の徹底を期する方向に發展して來て、此處に勢力を失ふやうになつたが、生物の生活々動が純粹に物理化學的に研究し得るや否やは解決されたわけではなく、此處に新しく新生氣論 Neovitalismus が起つて來た。後者の機械論はその名の示す如く生活機能を機械的に説明しやうとするものである。

機械説は十六世紀以後生理解剖學の進歩にともなひて、此處に科學的根據を得る事になつた。即ち生物の生命は物理化學的なる一の現象にすぎざるものとし、醫學的根據に立脚した生命の機械觀が成立する。彼の佛國の醫者哲學者にして有名なるラ・メトツール La Mettrie は此の派の代表的なる著述 *L'Homme machine* (人間機械論) を著して機械觀的唯物論を主張した。彼は佛國の啓蒙時代の學者であつて、醫學者として哲學者として著述家として唯物論的無神論的思想を有して居たに依て迫害され、和蘭ライデンに逃れて前記の著述を公にしたのである。彼はデカルト、ロ

ツクなどの思想の影響を受け、デカルトが「動物即機械」を主張したのを「人間即ち機械」と進めたのであるが、それはデカルトと全く異なる方向に進んだものである。彼は軍醫在職中に熱病の研究に依て思惟が身體に依屬するを認め、生理的病理的方面より發して懷疑論的唯物論的無神論的感覺論的思想に達し、一切の精神現象を腦の分泌作用に歸した。彼は一切の思惟は感覺に依て生じ、而して感覺は物質的機能なるが故に靈魂は物質的感覺的のものである。即ち靈魂不滅などは彼に依れば一種の迷忘にすぎざる事となる。要之醫化學的醫物理學的基礎に立脚すれば生物學は機械的唯物論とならざるを得ない事になる。

最初活力説に對して反對を主張したのはデカルトであつた。彼は一六四四年に「哲學の原理」*Principia philosophiae* を公にして生命の物理學的解釋より、「生命即ち運動」と見た。次第に物理學的なる生命説が勢力をなし、ハツクスレー、デュボアレーモン、フェルボルン、の如き此派の主張者であつた。他方に生命の化學説を主張する派の人々も出た。ラボアジエー、ソービツヒ、ウエーラー、の如きである。

彼等は生命を化學的現象即ち原形質の新陳代謝作用そのものであるとし、觀念の如きも神經細胞より分泌せらるゝものであつて、あたかも尿が腎臟細胞より分泌さるゝが如きであると考へた。

獨逸の生理學者ハルラー Halter は刺戟説をとらへ、生物特有性を生理的實驗的に究明し、筋肉に於ける刺戟性及び神經に於ける感覺性なるものを以て生命と考へた、彼は一面機械的唯物的論者と考へられるが、彼の極めて皮相なる機械觀ではなかつた。有名なる生理學者ヨハンネスミューラー Johannes Müller は生活現象を物理化學的に説明し得るものと考へ、生命を一種の筋肉的神經的なる物理現象と思つた。然し全然機械説とも成り得ず、一種の活力が生物に瀰漫し、その内に行はるゝ化學的作用を調節すると考へたのであつた。彼は一八五八年に此の世を去つたが、彼の門下にエミール・デュ・ボア・レーモン Emil du Bois-Reymond 出で全然生氣論を排斥し、ヘルムホルツのエネルギー恒存則と一致して純然たる機械論が勢力を占めるに至つた。然るにミューラーの去つて翌年、即ち一八五九年、彼の有名なるダー

ウイン Darwin に依て『種の起元』Origin of Species by means of natural Selection 出で、生物學上に一大革命を興へた。生物學上に於て謎と考へられて居た生物の適應を自然淘汰 Natural selection 適者生存 Survival of the fittest の結果であるとする機械的に説明した。即ち此處に機械觀は一の堅固なる基礎の上に確立され、爲に前記の目的説は學界より追ひ掃はれるの運命に立ち至つた。

同じミューラーの門にヘッケル Haeckel があるが、彼は自然淘汰を以て生物界の總ての現象を明にしたものであると考へた。如斯にして機械觀は次第に勢力を得て、一八二八年ヴェーラー Wöhler が人工的に尿素を成すに成功して以來、生物でなければ製造する事が不可能とされて居た有機化合物が人工的に出来る事になり、活力説も次第に排斥されて行つた。

然しながら實際現今に於て、生命を何處迄も物理化學的に説明する可能は疑問である。新生氣論の生れたのも無理からぬ事である。ドリーシュ Driesch ベルグソン Bergson の主張する處は、舊生氣説の如く、生物に特有なる特種の力を認めないが、

生物の中には特有なるエンテレキエーentelechesがあつて、それが生命の諸現象を起すものであると主張するのである。生物の表はす總ての作用は細胞元素の機械變化であつて、唯生物が無生物と異なるは力、及び物質の交互作用の方法運動の形式が無生物に見る能はざる一種特有なる趣を有すると考へ、その原理を生活能力エンテレキエーと言ふのである。ベルグソンの如きは活力の源とも言ふべき力、エランピタール Elan Vital が發現することに依て生命を導き起すと言ふて居る。

要之新生氣説は生活々動の自律性を力説し、生命の理化學的方面を認めるが、そのみに依ては生命を研究闡明する事を不可能とし、之が新原理を求めんとするのであつて、現今に於ても尙統一的世界觀を形成する迄には至つて居らない。例へば唯物論を否定し、生物と無生物との絶對反對を主張し、生物の内面的合目的性を説明する新原理を求め、淘汰の原理に依らずして新生活原理に依て順應を説明する如きであつて、その新生活原理の何物なるやは一一致せしものがないので、ドリーシエの如くエンテレキエーを主張し、ベルグソンの如くエランピタールを主張する等未だ

定説がないと言ふべきである。

實際に於て理化學に依て説明し能はざる點がある。ロツヂ Lodge も言つた如く、旋風が如何に曲つて吹くかと言ふ事は、數學的に研究する事が出来ても、蠅が如何なる方向に飛びゆくかは解らないのであつて、アメーバの運動ですら物理や化學で十分説明しつくす事は不可能である。而して又自然淘汰説に於ても、それは成し能はざる處でなければならぬ。デカルトが「自分が働くと言ふことは物理的に働くのであるが、考へると言ふことは物理的に考へるのではなす』 Je pence metaphysiquement, mais on vit et on agit physiquement. とは道理である。ロツヂは「生命なるものを理化學にのみ依て説明せんとする者は生命、心、意識をその範圍外に置いて居る。若し生命が理化學的法則に依つてのみ出来て居ると言ふならば、生命はなくなる。それは單に生命の物理化學的方面への現れを見たに過ぎない。生命はそれ以外のものでなければならなす。』 I detect nothing in the organisms but the

Laws of chemistry and physics, it is said. Very well, naturally enough. They are

studying the physical and chemical aspect of life-life, mind and consciousness, they are not studying and they exclude them from their purview. 現今に於ける此方面の學者は生命が物理化學的に説明する事が可能であるとは思つて居らない。只物理化學的に説明し得る範圍を明にし、依て以て説明し得べからざる範圍を縮少せん事に努力して居るものゝ如くであつて、現今の新活力論者も、物理化學的のエナジーとして見られ得る以外に何物かゞ存在して居る、そしてそれが生命を導くと見て居るのである。かるが故に生物の生命現象は、悉く物理化學的の説明に依て闡明さるゝや如何の問題は尙未知數に屬する事ながら、然し研究の方法としては生理學的、物理化學的、動植物學的に進むより他にない。畢竟生物學の大部分は生物に應用したる理化學であると言ひ得られる。而してそれは人間の精神に對して述ぶる心理學の如く、生物學的の心理學とも言ふべきものであつて、動物と植物との區別を捨て去り、共にその生命の問題を研究するのである。ダーシー・トマン D'Arcy Thompson は『生物學上の大問題の上に於ては動物學と植物學との區別はなくなる。之は姉妹科

學として共通の問題を取扱ふが故である。動物學者が一旦死物の研究より脱して活物研究に入る事が生理學者になる事で、生理學者になる事は即ち物理化學者になる事である。』 before the great problems (of biology) the cleft between zoology and botany fades away; for the same problems are common to the twin sciences. When the zoologist becomes a student not of the dead but of the living, he becomes. once more a physiologist and the gulf between these two disciplines disappears. When he becomes a physiologist, he becomes, ipso facto, a student of chemistry and physics. と言つて居る。

却説生命の起元を考へて見ると現今の科學の力にては、到底之を解決すべく十分でない。生命の起原、それは要するに生物の起元と同問題である。而して此の問題は更に遠く地球の生成問題にまでも及ぶのであつて、現今に於ては凡ての生物は生物から *Omne vivum ex vivo* と言ふ事は疑ひなき事實の如くであるが、然し大初に於ては無生物から生物が出来たと考へなければならぬ運命にある。此處にも又生

命の本質についての二途の問題の鍵がかくされてある如く見える。

自然科学の進歩にともなひ、生命論も機械論的になるのは當然の事である。機械論的立脚に依れば活力的なる或る力を認めると言ふ事は、根本的に許さるべき事ではない。生命を有する生物なるものも、一個の物質には疑ひない。従つてそこには物理化學的法則が行はれて居らなければならぬ。然しながらロッチも言つた如く旋風が如何に曲つて吹くかは物理學的に研究する事を得るが、一匹の蠅が如何なる方向に飛ぶかは、物理的に規定する事が不可能である。若し生命現象を物理化學的に説明し得とすれば、生物と無生物との區別はなくなり、物質的説明以外のものではあらば、現今の自然科学的生物学の根據は不明である如く見える。而して又かゝる方面に於て生命を見出す事も不可能となるであらう。然し方法論的學問體系に於ては對象の如何は別問題である。現今の生物学の如き方法を用ひて生命を究明し得るや否やは未知數に屬するが、只現今に於てはかゝる方法を取るより他にないのであつて、而してそれは生物學的に動植物學的に更には理化學的に行はれて居るのであつ

て、かゝる生命學なるものは動植物學の内に包括さるゝ内在科學か、又は混成科學であつて、特別に一の分科をなすべく今尙十分に完全して居らない。動物學も植物學も共に生物を對象とする有機的の科學なる上は、その二つの共通せる生命につきての研究は其の兩科に渡りて共に研究される筈であつて、混成科學と見る事も出来るし、兩者に内在するものと見る事も出来る、而して又生命の如何と言ふ問題も、動植物學の入り込む能はざるものではないと思はれる、何故ならば現今の所謂生物學なるものは、動植物學的方法に依るものなるが故に、そこに大なる區別も發見し得ないのである。

吾人々類に於ける精神を生理學的生物学的に研究する精神科學に生理學的心理学 *Physiologische Psychologie* があるが、生命學なる生物学も、之を廣めてゆけば、生物學的心理学と言ひ得る。要之、心理学は人間に關し、生物学は生物全體に關し共に精神を研究するものであつて、生命の發見が即ち精神現象なるが故に、共に生命の如何を問題とするものである。只植物の如きは生命ありて精神なしと言ふかも

知れぬが、かゝる事は未だ不明に屬する。要之、生物學の如きは之を動植物學の總合稱と見ても良いし、更にはその内在的混成的科學と見ても良いわけである。ダーシートムソンの所謂大なる生物學的問題の前には、動植物學はなくなると言ふが、科學の方法論的區分としては動物に對し又は植物に對し、その對象に依て學が成立するわけではなく、一の科學目的に依て學の方法が規定さるゝ以上、動植物學の區別がなくなつても敢てさしつかへない事である。

第四 心理學問題

心理學は動物學植物學等と同じく記述科學に屬するものである。それは後述するが、精神に關する研究は希臘時代よりあつたが、それは主として精神の性質起原等を思辨的に考察し、精神を特殊の實體と見る形而上學的心理学と稱すべきものであつた。此の傾向は中世に於ても變る所なく、靈魂問題がその主要なる研究題目であつた。思辨的考察より獨立して一の科學としての心理學は近世に於ける發展であつ

て、デカルトが生理的機關と精神作用との相互關係を考察し、今日の生理的心理学の基礎を作り、ホッブズ、スピノザ等が心身兩者の相關を説きたる如き、近世心理学の最初と言ふ事が出来る。近世に於ける科學としての心理學は之をA、經驗的、B、生理的、C、實驗的の三方向として考察する事が出来る。

精神過程の經驗的考察としては英國に於て發達した處のものであつて、ロック、ヒューム、ミル等の哲學者は又精神の構成發達に留意し、その極所謂聯想派なる一派を生じた。獨逸に於てはヴォルフ、經驗的心理学を著し、合理的心理学と相並んで心的生活の精密なる記述を試み、次でテーテンス Tetens は始めて精神現象を知情意の三方向に區分し、カントは之を採用し、此處に精神現象の記述に對し、一の標準を得る事が出来るやうになつた。

生理的及び精神學の神經系統的考察は十九世紀に於て發達した。ウェーベル E. H. Weber. は生理學及び醫學の方面より、皮膚感覺及び有機的感情を研究し、ロツチ R. Lotze は一八五二年『醫學的心理学——精神生理學』(Medicinische Psychologie,

ober Psychologie der Seele.) を著し、身體と精神との關係より精神活動を研究し、其後ブローカ Broca に依て言語の中樞、フリッツシュ Fritsch ヒツチヒ Hitzig 等に依て運動中樞の發見あり、かくて次第に生理的基礎の上に發展して來たのである。

實驗的研究は十八世紀の初葉バークレ George Berkeley が『視覺新説』 Essay towards a New Theory of Vision. を著し、此の方面の研究に一新紀元を作つたが、十九世紀に入るやウエーベル、フェヒネル等に依て大成せらるゝ事となつた。フェヒネルの有名なる著述『精神物理学』Elemente der Psychophysik. 1860. 出で、之より精神の實驗的研究次第に進み、ヘルムホルツ、ヴント等相次いで、ヴントの大著『生理的心理學』Physiologische Psychologie. シエームスの大著『心理學原理』Principles of Psychology. 等斯界の權威と言ふべき大著現るゝに至つた。(J. M. Baldwin. History of Psychology. Hartmann, Die Moderne Psychologie. villa, Contemporary Psychology. Klemm, Geschichte der Psychologie, 其他一般心理學史参照せよ)。

以上縷説する如く心理學も精神現象の學である。古來に於ては哲學の一部として考察研究せられて居たのであつたが、叙上の如く次第に近世心理學の新しき方法が開け基礎も又ようやく明瞭になつて來たのである。此處に注意して置くが、先驗心理學は純粹に哲學に屬するものであつて、リツケルトに依れば認識論には二つの途がある。一は事實上の認識作用を一の心理過程と見做し、其分析に依て次第に超越的對象に進まんとするものと、一は端的に超越的對象の領域に侵入して之を認識の心理的作用とは全く引き離ち純粹論理的に取扱はんとするものである。前者は所謂先驗心理學であり、後者は先驗論理學である。要之認識論に屬し、記述學としての心理學とは全然別である。(先驗心理學につきては此處に詳記する事が出來ぬが、リツケルトの Gegenstand der Erkenntnis. 第三版に於ける叙述参照。尙リツケルトが『カント研究』に於て發表した論文『認識論の二途』Zwei Wege der Erkenntnistheorie を参照せよ。前著は山内得立氏譯『認識の對象』がある。此の譯本は第二版の譯であるが、『認識論の二途』が附録として譯載されてある。)

却説精神現象はその對立する自然現象との區別に依て決定さるべきものである。

然しながら自然現象より精神現象を區別すると言ふ事は容易な事ではあるまい。兎に角精神現象と自然現象との比較に依て決定さるべきであるけれども、對象の區別は困難である。科學が對象に依て區分さるゝ事の不可能は前述したので明であるが故に、その目的と方法とに依て區別すべきである。方法に依て考ふれば精神學は自然科學的であつて、特別に自然科學より分離さるゝ特質を有して居らぬ。さればソントのなしたる如く精神科學は自然科學に對立するものでなく、むしろ自然科學に包括さるゝものでなければならぬ。之は第二章に詳述したから此處には略するが、兎に角心理學は精神科學としての代表的のものであり、それは自然科學的方法に依るが故に、之を自然科學に包括せしめて誤らないと思ふ。

心理學は上述した如く精神現象につきて研究する學であるが、意識の語は精神作用と同義に用ふるとすれば心理學の對照は意識であるとも言ひ得る。然し意識は自然現象と如何に區別さるゝかと言ふ事、又は自然科學的方法を用ひないか否かと言

ふ事は對象論になるが、余は前にも言ふ如く科學分類は對象區分に依ては不可能なる事、又は非論理に陥る事を説明した。かゝれば心理學はその目的とする處意識の究明に存するが、それは方法論的のみ考察して自然科學なりと言ふ事が出来るが、更には心理學は一般科學と等しくその對象を論理的方法的に整理選擇する必要が起る。そこで所與の對象を確定記述する事が必要になつて來る。之には當然分析を豫想する。即ち心理學は一の記述學に屬する事となり、次第に説明科學に進まん傾向を有すると見るべきである。

心理學者の内には心理學は分析記述に止まり、それにて心理學の任務は盡きたりと論ずる人もあるが、現今の心理學はたしかに記述的科學の範圍に止まつて居ると言ひ得る。然しながら更に一步を進めて、與へられたる對象の分析記述に依り、其の要素間の必然的關係を求めんとする理由律に依る結合を考へやうとする者もある。が要するに心理學は自己省察なくして成立する事は不可能である。

心理學はその對象を整理する事に依て次の如き種類に別れる。

- A. 個人心理學 Individualpsychologie.
- B. 民族心理學 Völkerpsychologie.
- C. 兒童心理學 Kinderpsychologie.
- D. 動物心理學 Tierpsychologie.
- E. 變態心理學 Pathologischepsychologie.
- F. 犯罪心理學 Kriminalpsychologie.

個人心理學は民族心理學と對立する時は普通心理學 Allgemeine P. となり、(普通心理學は特殊心理學に對して用ひらるゝ事あり)。個人一般を對象とする普通心理學に對して差異心理學 Differentielle P. となる。(差異心理學については William Stern, Differentielle psychologie. E. Meumann, Vorlesungen über experimentelle Pädagogik.)

民族心理學と言へば從來社會心理學と言ふと同義に用ひられて居たが、ウントに依て限定せられ、實驗の範圍外に於ける複雑なる精神作用を研究するのであつて、原始的文藝及起元、神話、風俗、土俗、言語等の如きものを研究して居るのである

が、文化現象の内面的精神作用を研究すると言へば適當であらう。(Wundt, Elemente der Völkerpsychologie.)

兒童心理學は兒童の精神現象をその對象として居るのであつて、一般に青年期の心理學も考へられるから青年心理學も出来るわけである。彼のスタンリー・ホール博士の『^{アドレセンス}青年期の研究』S. Hall Adolescence, 1905. の如きはその代表的のものであらう。

動物心理學は人間以外の動物の精神現象を研究し、引いてその進化の跡を考察し、更には引いて人間の精神現象に及ぼさんとするのであつて、客觀的觀察である。變態心理學は意識の異態について、犯罪心理學は犯罪精神について研究するのである。

然しながら此處に疑問が起る。之等の心理學特に動物心理學の如きは直接之を知る事が出来ぬ。只その行動や解剖上の事實に基づき類推する外はない。かく言はゞ一般に心理學は成立しない事となる。所詮之等は自己省察に依る個人心理學の基礎

の上に成立し、他の領域の意識は或外的徴候に依る内的構成であるが故に、それは觀察者自己の意識に俟つ外はない。故に之等を抱括して比較心理學 *Vergleichende Psychologie*. と言ひ得られる。

心理學を方法的に區分すれば又多様になる。即ち、

- A. 實驗心理學 *Experimentelle Psychologie*.
- B. 發生心理學 *Genetische Psychologie*.
- C. 生理的心理學 *Physiologische Psychologie*.
- D. 精神物理學 *Psychophysik*.
- E. 分析心理學 *Analytische Psychologie*.
- F. 構成心理學 *Structural Psychology*.
- G. 差異心理學 *Differentielle Psychologie*.
- H. 比較心理學 *Vergleichende Psychologie*.

心理學の研究を物理學の如く實驗的に研究せんとするものを實驗心理學と言ふの

であるが、ウントの説の如く、心理學を二區分して實驗心理學と民族心理學とにすれば、民族心理學を除外せる一般心理學は總て皆實驗心理學と言ひ得る。然し狹義の實驗心理學は松本博士の『實驗心理學十講』。又は上野、野上兩氏の『實驗心理學講義』等の如きものとなる。

發生心理學は單純な意識より次第に複雑な意識に發達する經路を明にし、進んでは精神の發達につきての一般的法則を研究するのが目的である。生理的實驗解剖を主とした心理學を生理的心理學と言ふ。ウントの *Grundzüge der Physiologischen Psychologie* は此の方面の代表作であらう。『醫學的心理學』なるものも、又此の内に屬する。精神物理學はフェヒネル *Fechner* の *Elemente der Psychophysik*, 1860. にその代表作を見出す。然し要するに實驗心理學として物と感覺との關係を研究するものである。

以上心理學につきての一般分科の大要を説明したわけであるが、要之心理學は一般に精神科學としての最も純粹なる代表的のものである。而してそれ等一般心理學

は科學として記述の外に出でないが故に、之を記述科學中に包括せしめるべく妥當であるが、然しそれは一般の科學の傾向の如く説明科學に近よらむとしつゝあるのであつて、發生論的に觀察すれば又それが當然であると考へられる。

心理學は以上説く所に依て明なる如く、一の記述學である。而して此處に一言すべきは前項生物學との關係であるが、心理學は精神の存在を假定して、その物的現象を對象として進む事に依て、精神現象、即ち意識の問題に解決を與へんとするものであるが、生物學が動植物學の總稱に非ずして生命學なりと言はんには必ずや心理學の一分科に包括さるゝ性質を有する。何故とならば生命學としての動植物學は(其の總稱は)必ずや生物學的な心理學であるからである。由來生命とか精神とかを區別して考へる事は出來ず、而して又、それが形式的物的現象以外に於て獨立に考へる事すらも不可能であり、現今の總ての心理學の諸分科と雖も必ずやそれが物的現象と相關的に存在し、物的現象に比例する現象なる事を假定しての上で成立するものであつて、物的現象を根本的に除外し、單獨に之を研究する事は不可能である。

るが故に、生物學が生命學なりと言はゞ、それはおそらく心理學に包括さるゝものとならざるを得ぬ。

心理學は一般に人間の意識の學であると言ふ。而して動物心理學の如きは一見人間以外の諸動物に關するが、然し歸する處は之を人間の心理に引き來るが故に、心理學は之を人間に限定するならば、生物學は生命學とすれば、當然生物心理學となる。かゝれば普通の心理學に對して存在する處の一種の精神科學と認める事が出来る。

先に精神現象が物的現象と比例して存在すると言ふたが、此の假定は心理學一般に極めて必要である。例へば實驗心理學に於ける疲労の測定の如き、若し精神現象が相關的に物的現象と比例する事を認めないならば、その意義を失ふ事とならざるを得ぬ。何故とならば實驗心理學が精神疲労を何に依て測定するか、それは必ずや精神そのものを直接取り出して測定する事は不可能であり、そこに肉體的測定所謂物的現象の測定が行はれる。而してその物的測定を以て間接に精神測定をしたも

のと決定するのである。生物學に於て、若し生命の現象如何を測定せんは、その生命が相關的に物的表現を比例して取るものとの假定のもとにのみ可能である。而して之は必ずや數學的に確實に比例するものとしてのみ認め得らるゝが故に、此の假定を除外しては心理學も生命學も、一般に精神學は不可能になるわけである。

此處に説明した事は極めて大要である。心理學の一般的に説明したものには著名なる著述が多くある。特に我國に於ては高橋穰氏の『心理學』が哲學叢書第十二篇に收められてある。此の書は極めて新しく、學界に取つて貴重なものである。余は此の書を以て我國に於ける此の方面の代表作としたいと思ふ。

第五章 説明科學

第一 説明學の意義

記述學が如何なる意義を有するものであるかは前述した通りである。而して發生論的には更に高度の説明科學を考へなければならぬ。科學目的が目ざす最後の月桂冠は普遍必然の構成概念であるとするならば、科學は個性認識記述に止まる事なく、更に高度の科學に進むべきものであつて、物理學や化學は此の所謂説明科學 *Erklärende Wissenschaft* として今日その代表的のものと見得られるのである。

Erklärung と言ふのは特殊事實の認識に對して何故に然るかと言ふ充足理由を與へ

る事である。經驗的個々の事象を因果法則に依て説明するのである。その因果法則なるものは必ずや個々の經驗的現象の特殊より抽出して來たものではあるが、その法則は逆に個々の事象を説明する權利を有するが故に、一般に特殊の認識の根據となる事が出来る。然しながら法則と個々の經驗とは不可分離にあるが故に法則は個に於て改廢さるゝ事はあり得る。

法則とは如斯普遍必然の關係を表はし、未經験なる對象に對しても説明し支配する事が出来るのであつて、かゝる絶對的なる普遍必然の關係に達するには歸納法に依るのである。かくて歸納的に立せられた法則は逆にその經驗的事項を支配する。如斯に法則は因果的必然關係を表し、甲の現象に因して乙の現象を規定するのであるが故に、乙現象は法則に依てその原因たる生起の理由が與へられ得る。説明とは要するに法則に依て一般的特殊の理由を説明する事である。而して物理化學は此の域に於ける代表者である。

勿論説明は記述學に於ても不可能ではあるまいと考へられるが、又記述學が説明

する程度が物理化學の如く一般的でないが故に、余は從來の用法に従ひ説明科學と名附けて置いたのである。之は發生論的にしか考へられ得るのであつて、根本的に區別する事は出来ない。只記述學よりも説明の度が廣くしかも高きが故にである。

法則は如斯個より抽出した歸納物であるが、個々の共通關係を歸納して如何にして絶對普遍的な法則を定立し得るか、之につきは只次の如く答ふるより方法はない。絶對的普遍に進まんと努力するのみ。その成否の如何は別問題なりと。共通關係を抽出するものが、その經驗を超えて、未知の對象にも及ぶ事を主張するのである。對象は自由に選擇され得る。唯一個の對象に依ても普遍を見出す事の可能性がある。何故ならば吾人は普遍に依て特殊を見、特殊に依て普遍を見る事が思惟の本質上可能であるが故である。普遍は特殊に内在して居るが故に、對象の多少範圍は別問題でなければならぬ。然しながら經驗科學としての法則は可成多數の可成一般的な可成廣い範圍の歸納を要求する。それは經驗的科學として當然の事と言はねばならぬ。

自然は整然たる一の齊一組織をなして居るものであるが故に、吾人が若干の特殊より歸納したる結果たる法則に絶対普遍の意義を持せしめ得ると言ふ説がある。一の經驗せられた關係は又他の關係に於ても存する。かゝれば法則は一般的に意義づけらるゝ事となるのである。

然るに法則は更に一般的なる假説(臆説)より演繹される事を要求する。假説とは實際に經驗せられざる内容を以て構成されて居る。即ち法則とは異なりて更に一般的であるが故に、法則が一の經驗的現象を抽出したものであるに對し、未だ經驗せられざる内容を含み、如斯にして法則をして系統的に連続統合せしめ、且つは法則をして益々普遍化しやうとするのである。尙法則及假説につきては次の項を見よ。

科學の最初の階段に於て個性認識に存する事は既に前に述べた。而して科學の要求は只に此處に止まる事なく、分類記述に依て更に高度の認識に進まんとし、記述學は更に一層高度の階段たる説明學に進まんとし、此處に如斯發生的經過を取るものであつて、要するに認識の要求發達の階段に於て如斯分けて見る事が出

來ると言ふのである。而して説明科學の意義は前述する如く、一般的法則をたて、之によりて經驗界を又は未經驗界に於ける或る部分を説明するが故である。余は法則及假説につきて今少し説明し、説明科學の意義を確立し、物理學をその代表的のものとして簡単に叙述し度いと思ふ。

第二法 則

法則 Gesetz とは何であるかの大要は前述した通りであるが、今少し深く入つて置く必要があるから、此處に項を改めて書く。吾人が普通に法則と言つて居るもの内には經驗科學の法則と規範學の法則とある。然し規範學の法則と言つても、吾々が意志に對して命令的性質を有する法律とか道德的法則の如きものと、美學的法則の如く、更には他の規範的法則の如きそこに幾分の差異を認める事が出来るであらう。

道德法の如きに於ても吾人の目的に依て規範たるべきものでなく、法則それ自身

規範的たるべきものであつて、要するに意志そのものゝ法則である。意志に對する命令に非ずして、そのものそれ自身命令的であるといふ所に規範法の特質が存する。當爲 *Sollen* と言ふ事は己自身を現す爲の一般者 *das Allgemeine* の努力である。理想それ自身に於て實現力を有する。倫理的當爲に於ては道德法の理解そのものが直に我々の動機となる事が出來て、そこに道德的當爲があり、論理的當爲であつても、論理法が直に我々の觀念結合を動かす事が出來て論理的當爲がある。

次に經驗科學的法則と言ふのは經驗的事實に基づく法則であつて、物理學や化學、更に一般に數學の公理的法則を指す。數學先驗論に於ては數學的法則は經驗に依存せず、純粹先驗的なるものとするのであるが、余は數學と雖も發生的には經驗より抽象せられたるものであるが故に、總て先驗なるものはないと信ずるから、數學の公理的法則と雖も、存在の法則であり、經驗の法則であると思ふ。之は詳細に後述する豫定である。

經驗科學的法則と言ふのは、普通規範法とは別々なるものと考へられて居るので

あるが、之を嚴密に考察するならば、經驗法と雖も主觀的作用に基づいたものであり、そこに經驗的法則も全然規範的性質を脱する事は出來ない。吾人が普通に經驗とか事實とか言つて居るものも既に一種の判斷であつて、論理的規範的當爲に關すると考へられる。即ち經驗科學的法則と言ふものは事實關係を自然の齊一 *uniformity of nature* と言ふ如き假説に依て一般的妥當と考へたものである。而して斯如自然の齊一と言ふが如きは吾人の主觀的要求にすぎないのである。

既に前述した如く經驗的判斷と言ふものは、既に一種の當爲に基づけるものであつて、法則は總て不許不の性質を有する。然し經驗的不許不は論理的當爲に依て生ずると言ふ意味ではなく、共に經驗の自發的要求に存するのである。然らば事實と事實との關係を定め、永久に反覆し得ると考へる經驗的法則も矢張り一の命令的判斷であつて、それが一般的妥當性を要求する事が出來るのは、同様の場合には必ずや同様の結果を生ずると言ふ、自同律の根據に依つて一般性が要求されるのである。ポアンカレの如き事實法則 *loi brute* と人爲法則 *Principe* とを區別する事は

意味をなさぬ。自然科学的一般性の要求は、唯一の場合に於て内面的驗證し得る要求を持つ、内面的驗證とは直接經驗上に於て自發自展的當爲を經驗する事である。數學の如き公理的法則に於ても、美學的法則に於ても同様である。以上論ずるが如く、經驗的法則も公理的又は規範的法則も共に直接經驗の内面的當爲に基づきたるものであつて、此の點に於て根本的區別はない。而して法則は總て規範的なる性質を有し、内面的當爲に存する以上規範的法則は法則そのもの、規範的なるものと言ふ事も出来る。

此處に一言すべきは美と眞とである。美と眞とは各々經驗の全然異なつた兩面であるが、従つて美的價値と知的價値とも異なる。然し此の兩者は全然無交渉に於てあると考へられぬ。美的眞は知的眞と極めて深い關係に於て存する。美的眞は吾人に最も直接的なる心理的眞であつて、知的眞も此の外に根據はない。藝術は物を統一的に見、知識は物を關係的に見ると言ふけれども、知的見方の内面には藝術的見方が存し、關係的見方の根柢には統一的見方が存する。

却説科學の認識に於いてその中心をなすものは法則である。而して余の發生論的科學系統に於ては、個性學や記述學はそれ自身として價値を有するものであるけれども、科學體系全體の上より考察すれば、それ等は終極的のものに非ずして、法則定立的説明學に至つて確實なる基礎を得る事になる。説明學の法則は事實の經驗と合致するに止まらず、超經驗的なるものにも及ぶべきものであつて、法則は絶対普遍を要求し、必然を標榜する。

一般に自然科学に於ては、前にも言ふ如く自然の齊一と言ふ事を假定して居る。自然は整然として無規律なものでなく、不秩序ではない。吾人が個々の特種な經驗より法則を立てると言ふ事は、かゝる自然の一樣なる整齊に依て可能である。或る事實と事實とが經驗せられ、その關係が他の類似的事實間にも存すると言ふのは、一に此の自然の齊一に存する。然しながら經驗は思惟が構成するのであつて、自然は如斯にして存在的意味がある。即ち自然は經驗の根柢たる思惟の構成に存するが故に、自然の整齊と言ふ事は、要するに思惟そのもの、一定の法則に従つて存する

と言ふ事になるのであるが、然し思惟も人間の心理作用であると考へられるから、此處に自然の整然は思惟法則に依て説明が出来ぬ如く考へられるが、然し此處に言ふ思惟法則とは心理學的にあらずして、論理的規範的法則を指すものである。自然法則的なるものでなくて規範的なる意味に於てある。

法則は如斯普遍的である必要があるが、逆に普遍的要素がなければ法則定立は不可能である。経験は若干の特殊なものであるが、それより普遍を抽出すると言ふ事は、経験的特殊の内に普遍性が内在して居らなければならぬ。具體的なる特殊の経験内容が夫々個々の特殊でありながら、普遍性を有すると言ふ事は経験そのものに普遍性があると考へなければならぬ。特殊の経験より法則を歸納すると言ふ事は、かく普遍性の特殊の内在を肯定する必要がある。かくて始めて特殊を通じて一般的法則を見る事が出来る。故に普遍があるのでもなく、特殊があつて普遍があるのでもなく、論理的に相關的のものである。若し特殊のみが一義的に與へられるものであるならば、吾人は到底超経験を規定する事を要求する法則も普遍も発見し

得るものではない。

法則は経験に一致するから眞理性を保持する。若し経験と矛盾するならばその法則は誤謬であるか又は経験が亂雑でなければならぬが、経験科學に於ては法則の眞理性は之を驗證する事に依て保持される。法則は無條件的に普遍必然を要求する。

然るに驗證は無限ではないが故に、普遍必然なるものを有限なるものが保證する事が可能であるかと言ふ問題も起る。故に驗證が普遍法則を生むのではない。只相對的に之を保證するに止まるのである。故に眞理は絶對的に存在するものであると言ふ要求のもとに追求されるが、それは理想であつて、永久に相對的にのみ存するものであるかも知れない。経験は一回であつても、普遍を発見する事は可能であると考え得られるが、比較的多くの驗證に依て保證する事は法則の確實性を増す事になるのである。個々の特殊が如何に重疊しても、それは普遍ではないが、経験より抽出した法則はそれが確實なる爲には一回でも多くの保證を要求する。故に経験の反覆と驗證の種々が必要になつて来る。

以上自然科学、一般に科学の根據たる認識の本領なるものは、次第に高次の科学従つて法則科学に進まんとする發生論的傾向を有し、而して物理学は説明科学の代表者として存する事になるが、更に物理学は數學化されやうとして居る。即ち説明科学としての物理学は更に高次の數學に向つて進み、發展しやうとして居るのである。今後物理学は追々益々數學化されてゆくであらう、而してそれは當然の歸結と言ふべきである。

第三 假説

假説 Hypothese は別に臆説、假定とも譯する事が出来る。希臘語 hypothesis 羅典語 suppositio など皆下に置き定める事を意味する。即ち假説は法則の背後に存して法則を意義づけるものである。されば法則は前述せしが如く現象より歸納抽出したものであつて、何處までも經驗に翻譯する事が出来ると言ふ處に眞理性があるが、假説は經驗とは直接に關係なく、間接の關係に存し、直接は法則に關して背後

よりそれを意義づける性質のものである。されば假説の眞理性は經驗的に證する事が不可能である。

抑々法則は科学目的の最後のものではないか、然るに法則の背後に向假説を要求するとは如何なる事であるか。而して又科学の最後の目的は假説に非ずして法則なりとすれば、假説と法則とは如何なる關係に於て存するかと言ふ點が疑問になつて来るが、假説は科学の目的ではなくて法則定立の手段であるが故に、法則と假説とは矛盾するものではない。されば法則は假説に依て演繹されるものに非ずして法則より推理假定して以て各種の法則を統合するものである。何はともあれ法則はその相互の間必らずしも統合組織せられて居るとは言ひ得ない。科学の目的は絶對普遍の法則定立にあるが、然しかゝる法則は容易に定立せらるべくもない。されば科学的研究の研究果は種々な法則が定立せられるが、かゝる法則は更に高度の普遍を要求する事となるであらう。此處に於て法則相互より假定的に立する統合的關係を求めて、それに依て高度の法則に進まんとするのが假説である。されば假説は法則を

統合組織し、經驗學をして更に高度の法則發見をうながす可能性を有する。

ニウトンは『吾は假説を作らず』と言つた。然し之は極論すればニウトン自身假説の意味を誤つたものであるか、乃至は吾人の解する假説と意義を異にして居るのであつて、ニウトンの有名なる萬有引力の法則の如きも、その初めに於ては確に一の假説であつた。アインシュタインの相對性理論に於ても、その法則は假説より導來されたものである。常識的階段に於ける推則と等しく、科學的研究に於ては一般的眞理性を定立する上に假説はなくてはならぬ重要な意義が存する。かゝれば假説を作らずと言ふ有名なるニウトンの言も、それは無用の假説を立てず、之を有效ならしむる上からは何處迄も經驗的事實に重きを置き、之を少なからしめるに存する。法則自身を組織立て、その大全般を認識し相互に意義あらしめる爲には假説は必然的に必要になつて來る。故に假説を立つる上からは相像力に俟つべき處の大なるを思はねばならぬ。

假説は右の如く假定したものであるが故に、假説それ自らの中に矛盾を有して居

てはならぬ。而して更にそれは立證し得る事が必要である。立證も反證も成し能はざる假説は假説と言ふ事が出来ぬ。マクスウエルの光の電磁説はベルツに依て立證されて居る。如斯假説は眞理が實證せられる事を要する。更に假説は事實及び既知の法則とも矛盾してはならぬ。されば假説を立證する爲には、此の定められた假説を根據として、之に演繹推理を行ひ、特殊を導入してその結果、觀察實驗に依る事實と對比して一致するや否やを見なければならぬ。若し觀察や實驗と不一致であるとすれば、それは廢捨せなければならぬ。かくの如く假説の眞理性を決定する事を假説決定の實驗 Experimentum crucis. と言ふ。(英Crucial experiment.) 然し若し假説がその性質上實際的事實に依て直接立證し得ざるものもある。然しその際は既知の法則と調和する事に依て間接に證明されるが、既知の法則とても絶対に確實なりとは言ひ得ざるが故に、それとても絶対に排斥すべきものでもない。如斯にして假説は必要上之を立てるのであるが、他の法則又は原理に依て説明し得べきものに對しては假説の要はなく、一切の事實を包括的に説明せんとしての假説は、その事實

の何れとも矛盾する事は出来ず、かくして假説が實證し得られたりとするれば、それは一の定説 Theory を立てられた事になる。されば逆に假説は定説を豫想するのであつて、立證し得ざる假説は定説となり能はざるが故に棄つべきである。

以上説きたる處は假説を作る上からの必然的條件であるが、即ち假説とは如斯經驗に於て立證し得ざる内容を有する概念を含んで居り、かゝる理論を中心として法則が立せられてゆくのである。實際物理學的法則は以上述べた處の如く、經驗的事實より直接歸納的に定立されるわけであるが、然らば法則は假説とは獨立に定立され、而してかゝる各種の法則より未知の經驗に及ぼし、次第に高度の普遍に進むべきである事となるが、普通には物理學的法則はかゝる順序を踏んでは居らぬ者が多い。それ等の多くは假説を導入し、而して假説よりその内容を得るが故に、假説は思惟形式としては經驗的歸納による法則よりも、後のものであり高度のものであるが、假説は反證せられ立證せられて定説となる事を豫想するゝが故に、法則も直接經驗より抽出されると言ふよりも、假説より經驗を解釋したものであると言ひ得る

であらう。即ち法則に依て假説が導來されるのであるが、一面は又その逆に法則も假説に依て存する事となると考へられる。されば物理學に於ては、法則と假説とは相互依存の關係にあり、假説は之を統合して一の系統的理論を構成するのであるが故に、一切の普遍は假説であるとも考へられ得る。

理論物理學の仕事は此の所謂假説を構成すると言ふ點に於て特色を有するのであつて、普通の他の科學と雖も假説を立てる事はあるが、理論物理學の重大なる仕事は假説を立てる所に存し、原理上經驗し得べしと豫想する以外、經驗の要件たる感覺的要素を除外せんとする目的を有して居る。如斯にして理論物理學は假説と法則とを融合して、理論的體系を以て經驗を數理化してゆくのである。

此處に假説につきその經驗との關係を一言すべきは、假説は經驗に依て證明し得ぬ概念であるが故に、經驗に依て之を確める事は出来ない。然しながら經驗に矛盾するが如き結論を生む如き假説は之を棄て去らなければならぬ事となる。即ち經驗は假説を立證する事不可能でありながら、之を否定する事が出来るのである。何故

ならば假説は法則を定め得るが、かゝる前提に依て得る結果は、必然に一義的のものであるとしても、結果が與へられた際に於ける前提は一義的のものなりと言ふ事は出来ぬ。その前提は幾個も想像し得るのであつて、一個の假説から演繹された法則が、逆に經驗より得た法則と矛盾するものでないにしても、經驗に矛盾する事は許されぬ。かゝれば自然科学的發展は新しき經驗に依て新しき假説が導來され、法則が立せられてゆくのであつて、法則の改廢に依て假説も又變化して來るのである。固體の運動に依て變形せざる假定はローレツツの收縮に依て否定せられ、相對性理論に依て新しき假定に置き換へられる事となつたのもその一例である。

以上説く所の如く假説は法則より溯るのであるが、更にそれは相互的に假説より法則内容を得るが故に、假説が普遍必然の法則を立てる上に、科學的に重大なる意義が存する。科學が假説を作るが、逆に假説が科學を作り、物理學上所謂世界象を見出す根據となるものであるとも言ひ得られる。假説はその定立は自由に選擇し得るが、然し今言ひたる如く、假説は法則と相互關係に存し、法則より溯り得るが又

逆に假説より内容を得るが故に、假説は直接經驗に依屬せざるも、間接には經驗に關する。經驗に依て立證する事は出来ぬが、經驗に矛盾する法則に導く事は出来ぬが故に、假令自由に假説を立て得るとも、それを根據として、全然異なる幾多の假定より、全然異なる物理學的世界象を形成すると言ふ事にはならぬ。

第四 輓近物理學界の進歩

輓近物理學界は目ざましき進歩の跡を示した。而してそれ等理論的の部分を概説せんとすれば、そのみにても實に大冊をなすのであつて、かゝる方面の研究は所謂物理學史として公にされたものもあり、且は本書も此の方面に深く入る事は目的上出来難いが故に、此處には記述の續く上から極めて簡単に叙述し度いと思ふ。

最近に於ける此の方面の研究を叙述せんには、必らずや十九世紀にまで溯らねばならぬ。十九世紀又それより僅に以前に於て、新しき領域にまで入り込んだ科學が先づ最初に於て成し得た點は新方法の發見に非ずして舊方法の擴張にあつた。ニウ

トン Newton のプリンシピアは當時の數學的方法の許す限りに於て引力説を擴大した。一七七三年より一七八七年至る間、此の學説はラグランジュ J. L. Lagrange 及びシモン Simon の近世數學の使用に依て非常に發達をした。更にはラブラース Marquis de Laplace の研究に依て之等は組織立てられるに至つた。

諸星の運行論につきて、或る細密な點は將來の研究として遺されたが、殆んど大部分の複雑なる諸惑星の運動は、之等の數學的天文學者の一派に依て明に説明せられた。斯くしてニウトン、ラグランジュ及びラブラースの方法を逆に用ひて未知の惑星の存在を豫言せし爲ニウトン説は此處に最後の試験に到達した。而して太陽系に於ける各個の物質が、其の質量の積に比例し、其の間の距離の二乗に逆比例する力を以て互に相牽引すると言ふニウトンの根本的假説に確證を與へたのであつた。

ニウトン説はラグランジュ及びラブラースに依て發展し、今日の如く太陽系に關する一切の觀測をよく結合せしめ得た。されば進んで過去を説明し、太陽系の起元をも説明せんとした。即ちラブラースは星雲説を組織し、形なき亂雲の如き混沌の

物質をもて充滿せる世界より、次第に太陽系及び諸多の惑星の形成せられるに至る説明を確實になし得た。かくて輓近天文學の發達に依て之等の説はその根據を固める事が出来るやうになつた。

之と同時に化學も又新しくその發展の途を開いた。シュタール *George Ernest*

Stahl は燃素を假想し、燃燒體より逸出する焰の現象を誤つて、そこに何物かの存在を認め、之に燃素 *Phlogiston* なる名を與へた。然しながら燃燒より生ずる一切の物質を集積する時は秤器は何物かの添加を示すが故に、それは沿極的質量を有しなればならぬ。化學は此の假説に従つて研究の歩を進め、燃素の學説は遂にブリストッ *Joseph Priestley* の酸素發見に依て崩壊せざるを得ざるに至つた。彼は酸化水銀を熱して酸素を得、それが燃燒を支持すべく大なる力ある事を發見した。

其後ラヴォアジエ *Lavoisier* は水の成分が水素と酸素なる事を發見し、更に物質不滅の原理に到達した。種々なる科學的變化に由て、物體の中に含まれたる物質は、其の化合状態を變じ且つ固體より液體に其の形式を變じ、更には瓦斯體と變ず